



続・続 尊敬する歴史上の人々

それぞれの時代に生きた - 偉人たちの記録

田中 義明

はじめに

この本は主として人生の目標や自分の生き方を探している子供たち、その子供たちを指導する立場にある大人たち（親・祖父母や先生方）に読んでもらうことを目的として書かれたものです。（続・続）となっているのは、既に出版された「尊敬する世界の人々」の3冊目になっているからで、できれば合わせて読んでいただければ幸いです。前書は著者がオーナーをしているアートサロン（パーティホール、ギャラリー、貸会議室）のホームページ（<http://www.artsalon.co.jp/>）に電子本の形で掲載されています。

本書は次の2部構成になっています。

【第1部 世界史年表と取り上げた人々】

これは、本書及び前書で取り上げた各偉人が生きた時代的背景を日本史、中国史、世界史の中で簡単に知ることができるように年表様式でまとめたものです。

この部分は、「わたしたちの中学社会」（日本書籍新社）の年表をもとに作成しました。

このシリーズで既に取り上げた人々は全部で84人になりますが、それらの人々を生年順に並べて一覧表に示しました。そして各人が収録されている場所および死亡年齢が分かるようにしました。

【第2部 本書で取り上げた世界の偉人たちの生きざま】

これは、世界の人々、あるいはある地域の人々の文明、文化、生き方などに重要な影響を与えた偉人たちのうち、これまで取り上げなかった24人を選んで抄録風にまとめたものです。普通1人で1冊にまとめられているので、偉人全員を読むのは大変ですが、各人数ページ程度であればそれ程の負担にはならないでしょう。勿論人名辞典や広辞苑や学校の歴史の教科書よりは詳しいことが書いてあります。もし興味が湧いたら、より詳しい資料へと入って行って下さい。

「世界の偉人が何故この人なのか」という疑問が必ず起こるでしょうが、私のこれまでの経験、見聞の中で勝手に選ばせてもらったと答える以外

にありません。ただ架空の人物臭い人や明らかな独裁者は意図的に外しました。

なお、並べた順は分野と関係なく誕生順となっています。

世界の偉人、郷土にゆかりのある偉人の生きざまを追いかけてきたのは、最初はどう生きたら良いのか迷っている若い人たちに、偉人といわれる先人たちの生きざまを紹介し、その中から何か参考になるものを掘り出さなければという動機からでしたが、続・続編を書き終えてみて一番勉強になったのは私自身ではないだろうかと思うようになりました。知らないことが多かったし、本を書くことによって生甲斐を感ずるということもできたからです。

これまでさまざまな偉人たちの生きざまを紹介してきましたが、どうしたら自分が偉人の生きざまに少しでも近づけるだろうか考える読者も多いことと思いますので、今回はそういう視点から私の考えを1冊の本にまとめてみようと思います。

最後になりましたが、パソコンへの入力にはアートサロンの従業員だった菅野寿子さんが担当し、表紙等書籍としてのデザインは出版社の高橋営業部長にお願いし、途中のアドバイスや校正は家内の京子が担当してくれました。応援して下さいの皆様に対してここに感謝の意を表します。

なおこの小冊子は前書同様無料で読める電子本（前述のアートサロンホームページにて）にもする予定です。

また新聞等で知って読んでみたい方は、下記へ御連絡いただければ、在庫がある限り寄贈させていただきます。

尚、「アート・ファンの時代」及び「尊敬する歴史上の人々」シリーズを千葉市の図書館や中学校に寄贈したことから、千葉市長から表彰状をいただきました。

〈連絡先〉アートサロン（または田中京子）

〒260-0855 千葉市中央区市場町2-6 TEL.043-222-2962 FAX.043-225-1631

目次

【第1部 世界史年表と取り上げた人々】	8
【第2部 世界の偉人たちの生きざま】	
1. 村民の生活を細々と描いた ピーテル・ブリューゲル.....	20
(1525 ~ 30—1569) 40才位没	
2. 最大の劇作家と称えられる シェイクスピア	23
(1564—1616) 52才没	
3. 世界で最初に全身麻酔を行った 華岡青洲	26
(1760—1835) 76才没	
4. 廻船問屋にして日口外交の範を示した 高田屋嘉兵衛	30
(1769—1827) 59才没	
5. 印象派の先駆となったイギリス人 ターナー	38
(1775—1851) 76才没	
6. 近代彫刻の巨匠 オーギュスト・ロダン	41
(1840—1917) 77才没	
7. 日本資本主義の父 渋沢栄一	48
(1840—1931) 91才没	
8. 「光の画家」クロード・モネ	51
(1840—1926) 86才没	
9. 日本の昔話を文学にまで高めた 小泉八雲	59
(1850—1904) 54才没	
10. 世界遺産を生んだ建築家 アントニ・ガウディ	61
(1852—1926) 73才没	
11. 100年先を読み込んで多目的な政策立案をした 後藤新平	67
(1857—1929) 71才没	
12. 日本の柔道・体育の父 嘉納治五郎	75
(1860—1938) 78才没	

13. アメリカの代表的素朴画家 グランマ・モーゼス	80
(1860—1961) 101才没	
14. 黄熱病の研究に殉職した 野口英世	83
(1876—1928) 51才没	
15. ミステリーの女王 アガサ・クリスティ	92
(1890—1976) 86才没	
16. 財界の荒法師 土光敏夫	99
(1896—1988) 92才没	
17. アメリカ文学を世界水準に高めた ヘミングウェイ	104
(1899—1961) 62才没	
18. 日本のゴッホになった 棟方志功	111
(1903—1975) 72才没	
19. 日本人で初めて自動車の殿堂入りをした 本田宗一郎	114
(1906—1991) 84才没	
20. フランスの生んだ最大のシャンソン歌手 エディット・ピアフ	120
(1915—1963) 47才没	
21. 人種隔離政策への抵抗を貫いた ネルソン・マンデラ	124
(1918—2013) 93才没	
22. 20世紀最大の肉体派女優 マリリン・モンロー	127
(1926—1962) 36才没	
23. 不朽の革命戦士 チェ・ゲバラ	132
(1928—1967) 39才没	
24. 世界に誇りうる現代日本画家 平山郁夫	136
(1930—2009) 79才没	
[著者プロフィール]	141



第1部

世界史年表と 取り上げた人々

日本		原 始						
日本		縄文時代				弥生時代		
中国		殷	周	春秋	戦国	泰	前漢	後漢
世界の主な出来事		○中国で紙が改良される						
		六七 仏教が中国に伝わる						
		前二七 ローマ帝国ができる						
		前二二一 秦の始皇帝が中国を統一						
		前二七二 ローマがイタリア半島を統一						
		前三三四 アレクサンドロスの東征はじまる						
		前四四三ごろ ギリシャ(アテネ)が栄える						
		前一六〇〇ごろ 黄河文明が栄える						
		前二五〇〇ごろ インダス文明が栄える						
		前三〇〇〇ごろ エジプト文明が栄える						
		前三三〇〇ごろ メソポタミア文明が栄える						
		○採取・狩り・農耕・牧畜の時代						
西洋		古 代						

古 代						
古墳時代		飛鳥時代		奈良時代	平安時代	
三国	晋	南北朝	随	唐		五代
						宗 (北宋)

- 一〇九六 十字軍の遠征がはじまる (一〇二七〇)
- ローマ教皇の権威が高まる
- 宋で火薬・羅針盤・活字印刷の発明
- 西ヨーロッパで封建社会ができあがる
- 九六〇 宋ができる
- 九三六 高麗が朝鮮統一
- 八七〇 フランク王国がフランス・ドイツ・イタリアに分かれる
- 杜甫や李白が「唐詩」をつくる
- イスラム帝国が栄える
- 六七六 新羅が朝鮮半島を統一
- 六六一 イスラム帝国ができる
- 六一八 唐が中国を統一
- 五八九 隋が中国を統一する
- 四八六 フランク王国が建国される
- 四七六 西ローマ帝国がほろびる
- 三九五 ローマ帝国が東西に分かれる
- 三二三 ローマ皇帝がキリスト教を公認する
- ローマ帝国が栄える

中 世 (封建時代前期)		
鎌倉時代	(南北朝時代)	室町時代 (戦国時代)
(南宋)	モンゴル／元	明

- 一五一九 マゼランが世界周航に出発
- 宗教改革 ルター(一五一七) カルバン(一五四一)
- ルネサンスが全ヨーロッパに広まる
- 一四九八 バスコルダリガマがインドに着く
- 一四九二 コロンブスがアメリカに着く
- 大航海時代はじまる
- 一四五三 東ローマ帝国がほろびる
- グーテンベルグが活版印刷術を発明
- 一三九二 朝鮮王朝を建国
- 一三六八 明建国
- 一三八七 ダンテが「神曲」を書く
- イタリアにルネサンスがおこる
- 教皇や教会の勢力がおとろえる
- 一二七四 マルコポーロが元に着く
- 一二六〇 フビライイハン即位
- 一二〇六 チンギスハーンがモンゴル民族を統一
- 一一七七 朱子学がおこる
- 自治都市が発達する

近 世 (封建時代後期)	
安土桃山時代	江戸時代
	明 清
<p>一五三三 スペインがインカ帝国をほろぼす</p> <p>○絶対主義の国家があらわれる</p>	<p>一六〇〇 イギリスが東インド会社をつくる</p> <p>一六〇二 オランダが東インド会社をつくる</p> <p>一六二八 イギリスで権利請願</p> <p>一六四二 イギリスの清教徒革命</p> <p>○市民階級の方が盛り上がる</p> <p>一六四三 フランスのルイ十四世が即位(絶対王政)</p> <p>一六四四 清が中国を支配</p> <p>一六八八 イギリスに名誉革命おこる</p> <p>一六八九 イギリスの権利章典</p> <p>一七四〇 フリードリヒがプロイセン国王になる</p> <p>一七四八 モンテスキューが「法の精神」を書く</p> <p>一七六二 ルソーが「社会契約論」を書く</p> <p>一七六九 ワットが蒸気機関を改良</p>
中 世	近 代

近世（封建時代後期）

江戸

明治

清

- 一八七六 ベルが電話を発明
 - 一八七一 ドイツの統一
 - 一八六九 スエズ運河が開通
 - 一八六七 マルクスが「資本論」を書く
 - 一八六六 アメリカで南北戦争が始まる
 - 一八六一 イタリアの統一
 - 一八六〇 ロシアが沿海州を領土とする
 - 一八四二 清がイギリスと南京条約を結ぶ
 - 一八四〇 アヘン戦争（清・英）一八四二）
 - 一八三二 イギリスが第1次選挙法改正
 - 一八二〇ころ ラテンアメリカ諸国の独立
 - 一八一四 ウィーン会議がはじまる
 - 一八〇四 ナポレオンが皇帝となる
- 欧米の産業革命が進む
- 一七八九 フランス革命がおこる（人権宣言）
 - 一七七六 アダム・スミスが「国富論」を書く
 - 一七七五 アメリカの独立戦争（一七八三）
 - 一七七〇年代 イギリスの産業革命が進行する

近代

近代		現代	
明治		大正	
清		中華民国	
一九二九	世界大恐慌がはじまる	一九二二	ソビエト社会主義共和国連邦が成立
		一九二〇	国際連盟の成立
		一九一七	ロシア革命 アメリカ参戦
		一九一四	第一次世界大戦（～一九一八）
		一九一一	中国で辛亥革命がおこる
		一九〇五	シベリア鉄道が完成する
一八九九	清で義和団事件（～一九〇一）		
一八九八	フィリピンがアメリカの領土となる		
一八九五	マルコーニの無線電話		
一八九四	朝鮮に甲午農民戦争がおこる		
一八九〇ころ	アフリカの分割終わる		
一八八六	ビルマがイギリスの植民地になる		
一八八五	フランスがベトナムを征服		
一八八二	三国同盟（ドイツ・オーストリア・イタリア）		
	○植民地の争奪が激しくなる（帝国主義の時代）		
一八七七	インドがイギリスの領土となる		

現 代

昭 和

中華民国	中華人民共和国
------	---------

- 一九六九
人間が月面におり立つ(米)
- 一九六八
核兵器拡散防止条約調印
- 〃
東南アジア諸国連合(ASEAN)の成立
- 〃
ヨーロッパ共同体(EC)が発足
- 一九六〇
アフリカで一七国が独立
- 一九五九
キューバで革命がおこる
- 〃
ソ連の人工衛星打ち上げ
- 一九五七
ヨーロッパ経済共同体(EEC)結成
- 〇平和共存への努力
- 一九四九
北大西洋条約機構(NATO)が成立
- 〇冷たい戦争がはじまる
- 一九四六
アジア諸国の独立
- 〃
ポツダム会談 国際連合発足
- 一九四五
ドイツが降伏
- 一九四三
イタリアが降伏
- 一九三九
第二次世界大戦(一九四五)
- 〃
アメリカでニューディール政策開始
- 一九三三
ドイツでナチスが政権をとる

現 代

現 代	
	平 成
中華人民共和国	
一九七三	ベトナム和平協定
一九七六	ベトナム社会主義共和国が成立
一九七九	ソ連がアフガニスタンに侵攻（～一九八九）
一九八六	ソ連で「ペレストロイカ」はじまる
一九八九	中国で天安門事件おこる
〇冷たい戦争が終わる	
一九九〇	東西ドイツ統一
一九九一	湾岸戦争
〃	ソ連の解体
一九九三	ヨーロッパ連合（EU）が発足する
二〇〇一	アメリカで同時多発テロ
二〇〇二	欧州単一通貨「ユーロ」一二カ国で流通
二〇〇三	米英軍、イラク戦争開始
二〇一〇	米英軍、アフガニスタン攻撃
二〇一一	東日本大震災

取り上げた人の生年と収録場所

人 名	生 年	I.前編	II.続 編		III.続・続編	死亡 年齢
				房総		
1 孔子	前 552	1				73
2 ソクラテス	前 470	2				71
3 ブッダ	前 463	3				80
4 キリスト	前 4~7	4				33
5 マホメット	570	5				63
6 聖徳太子	574	6				49
7 空 海	774		1			62
8 源頼朝	1146			1		52
9 チンギス・カン	1162		2			65
10 日 蓮	1222			2		60
11 コロンブス	1446	7				60
12 ミケランジェロ	1475	8				89
13 ピーテル・ブリューゲル	1525~30				1	40位
14 ガリレオ	1564	9				77
15 シェイクスピア	1564				2	52
16 ルーベンス	1577		3			63
17 佐倉宗吾郎	1612			3		41
18 菱川師宣	1618			4		64
19 平賀源内	1729	10				51
20 伊能忠敬	1745			5		74
21 華岡青洲	1760				3	76
22 滝沢馬琴	1767			6		82
23 ナポレオン	1769	11				46
24 高田屋嘉兵衛	1769				4	59
25 ベートーベン	1770	12				56
26 ターナー	1775				5	76
27 二宮尊徳	1787	13				70
28 大原幽学	1797			7		61
29 アンデルセン	1805		4			70
30 ダーウィン	1809	14				73
31 リンカーン	1809	15				56

人 名	生 年	I.前編	II.続 編		III.続・続編	死亡 年齢
				房総		
32 ショパン	1810		5			39
33 ワーグナー	1813		6			69
34 ナイチンゲール	1820	16				90
35 ファーブル	1823		7			92
36 トルストイ	1828	17				82
37 福沢諭吉	1834	18				67
38 チャイコフスキー	1840		8			53
39 オーギュスト・ロダン	1840				6	77
40 渋沢栄一	1840				7	91
41 クロード・モネ	1840				8	86
42 ルノワール	1841		9			78
43 エジソン	1847	19				84
44 小泉八雲	1850				9	54
45 アントニ・ガウディ	1852				10	73
46 ゴッホ	1853	20				37
47 浅井 忠	1856			8		52
48 後藤新平	1857				11	71
49 嘉納治五郎	1860				12	78
50 グランマ・モーゼス	1860				13	101
51 津田梅子	1864			9		65
52 伊藤左千夫	1864			10		49
53 ライト兄弟 (兄)	1867		10			45
53 ライト兄弟 (弟)	1871		10			77
54 鈴木貫太郎	1867			11		81
55 キューリー夫人	1867	21				66
56 横山大観	1868		11			90
57 ガンジー	1869	22				78
58 川合玉堂	1873		12			84
59 シュバイツァー	1875	23				90
60 野口英世	1876				14	51
61 アインシュタイン	1879		13			76

人 名	生 年	I.前編	II.続 編		III.続・続編	死亡 年齢
				房総		
62 ヘレン・ケラー	1880	24				88
63 ピカソ	1881		14			91
64 ココ・シャネル	1883		15			87
65 武者小路実篤	1885			12		90
66 チャップリン	1889	25				88
67 アガサ・クリスティ	1890				15	86
68 ベーブ・ルース	1895		16			53
69 土光敏夫	1896				16	92
70 ヘミングウェイ	1899				17	62
71 マレーネ・ディトリッヒ	1901		17			91
72 棟方志功	1903				18	72
73 本田宗一郎	1906				19	84
74 黒澤 明	1910		18			88
75 マザー・テレサ	1910		19			87
76 イングリッド・バーグマン	1915		20			68
77 エディット・ピアフ	1915				20	47
78 松下幸之助	1918		21			94
79 ネルソン・マンデラ	1918				21	93
80 マリリン・モンロー	1926				22	36
81 チェ・ゲバラ	1928				23	39
82 キング牧師	1929	26				39
83 平山郁夫	1930				24	79
84 大 鵬	1940		22			72



第2部

世界の偉人達の 生きざま

1. 村民の生活を細々と描いた ピーテル・ブリューゲル

北方ルネッサンスを代表する画家ブリューゲル

ブリューゲルという名前を知らない、あるいはその作風を知らないという方々も居られるかもしれません。私共も画廊という仕事柄勉強する必要があって世界の美術館巡りをしたり、テレビの美術番組を観たり、美術全集を見たりしたので多少平均より詳しくなただけで、ブリューゲルについても、オランダ・ベルギーの美術館巡りをしていなければ、多分ここで偉人の一人として取り上げていなかったでしょう。日本では上野の西洋美術館に数点収蔵されている位で、あまり実物を目にする機会はないからです。

オランダとベルギーはかつてネーデルランドという一つの国で、イタリア、フランス、スペインを中心とする南方美術に対し、北方美術として西洋美術史の中で重要な位置を占めています。特にルネッサンス期にはヴァン・エイク、ムメリック、ブリューゲルなどがフランドル美術の花を咲かせ、17世紀のバロック美術期にはルーベンス、レンブラントなどを輩出し、後期印象派のヴァン・ゴッホ、シュールレアリスムのルネ・マグリッドなどが続きます。

私たちがベルギーを訪れた時、たまたまブリュッセルの王立美術館でブリューゲル親子の作品百点余りを集めた特別企画展をやっていたので、興味を引かれて観てみました。二人の息子は親ほどの才能はなく、ほぼ父親のピーテル・ブリューゲルのものと言って良いでしょう。そこには色々なジャンルの絵が飾ってありましたが、私たちが一番興味を引かれたのは、村を少し高いところから俯瞰した構図の中に数え切れないほどの農民や家畜を散らせた絵で、それぞれの人は踊っていたり、家畜を殺していたり、お互いに喧嘩をしていたり、スケートをしていたりと様々な動きをしている絵でした。

私たちはそんな滑稽で面白い絵が、それまでの動きのない硬い表情の宗教画の世界から一挙に飛び出してきたことに驚き、それを成し遂げたブリュー

ゲルという画家はどんな人生を歩んだのだろうと思いました。

徒弟としての遍歴と独立

実はブリューゲルの生まれた年も出身地も正確には分かっていません。1525年から30年の間にネーデルランドのブレダという町もしくはその近郊で生まれたとされています。自画像も描いていないので、どんな顔をしていたのかも分かっていません。手紙等の文書も残していないので、ブリューゲルの生涯を辿る手掛かりは彼が描いた絵だけです。しかしブリューゲルの絵があまりにも素晴らしく、有名にもなっていたので、ブリューゲルの死後40年位後にファン・マンデルという人が、ブリューゲルの伝記を書いています。それによると「彼は物静かな思慮深い人で寡黙^{かもく}だった。しかし仲間と一緒にの時はよく冗談を言ったり、お化けの真似をして不気味な音を立てたりして、周囲の人を笑わせたり、驚かせたりしていた。」ということです。

当時画家の親方になるのは21～26才だったそうですが、ブリューゲルは画家の親方の組合であるアントウェルペンの聖ルカ組合に1551年に登録されているので、そこから生年が推定されたわけです。ブリューゲルは自分より24年前に聖ルカ組合に登録され、後に組合長になったピーテル・クックに弟子入りし、後にその娘と結婚します。クックはルネッサンス期のイタリアに留学しており、ブリュッセルでは最も著名な画家でした。クックの妻も彩飾画家だったので、クック夫妻はブリューゲルの義理の親であると同時に指導者でもありました。

1550年に師のクックが亡くなると、ブリューゲルは2年間イタリアに絵の修業に行きます。その時のスケッチからかなり広範囲にイタリア各地を巡ったようですが、イタリア・ルネッサンスの影響はブリューゲルにはあまり大きくなかったようです。アルプス越えで帰国した時に見た山岳の風景の方が後のブリューゲルの作品に影響を与えています。

帰国したブリューゲルは、ネーデルランドの中心都市アントウェルペンを拠点として創作活動を始めます。アントウェルペンはヨーロッパの主要な商業都市の一つで、画家たちの多く集まる新興の文化都市でした。ブリューゲルはそこで「四方の風」という銅版画出版業者の下絵画家として多くの作品を残しています。しかし、自ら彫版することはしませんでした。それは出来ないからではなく、次々に浮かんでくる絵のアイデアを下絵の形にして、後は彫版師に任せる方が自分にとって有意義だし、楽しくもあったからです。

その頃、油彩画の技法が世界で初めてネーデルランドで開発され、絵としての完成品まで自分一人で制作できる油彩画に興味を持ち始めました。そして下絵素描と並行して油彩による風景画にも取組むようになります。

1563年にブリューゲルは進歩的な貴族が多く住み、文化・芸術の水準も高い中心都市ブリュッセルに移住します。そこでもアントウェルペンの「四方の風」のもとに銅版画の下絵を送り続けましたが、力を入れたのは油彩画でした。ブリューゲルは1569年に病気のために40才位で死去しましたので、ブリュッセルでの制作活動は僅か6年でした。同じくネーデルランド出身の画家フェルメールが油彩画を40数点しか残していないのと同様、ブリューゲルも現存している油彩画はその程度であとは銅版画が80点位あるのみです。

ブリューゲルの評価

ブリューゲルは作品こそ少ないのですが、美しい自然を壮大に描いた風景画、民族を紹介する風俗画、風刺や教訓を込めた寓意画、伝統的な宗教画等扱った領域は多彩です。しかし、いずれの場合もその中心に置かれているのは村民たちです。宗教画にしても神の上からの目線ではなく、村民たちの目線で捉えた構図になっています。私はそこにブリューゲルのヒューマニズムを感じます。

古くからブリューゲルは農民作家と呼ばれてきましたが、私は彼の絵に、一般の作家にない高い知性が潜んでいる気がします。彼の作品が少ないの

は、生涯で制作に当たれる時間が少なかったことでもあります。彼の作品を見てみれば、一枚の絵の構想に相当の時間が掛かり、一年にそう何点も描けないことが分かります。

ブリューゲルの代表作としては「狩人の帰還」、「農民の踊り」、「農民の婚宴」等やはり村民を正面からモチーフとした作品が挙げられます。

ブリューゲルの卓越した描写力に加え、豊かな情感と深い知性を感じさせるブリューゲルの絵は、多くの市民の支持を受けていました。その人気の程は、息子たちが父の没後、注文に応ずるため父の作品の模写に追われたことから推察できます。また同じネーデルランド出身で息子と同世代のルーベンスも、ブリューゲルに敬愛の念を抱いており、彼の遺産目録の中に12点ものブリューゲルの作品が含まれていました。

ところが、17世紀後半になると、ヨーロッパ各国にアカデミーが設立され、古典主義の教義が美術の規範となると、ブリューゲルは次第に忘れられていきました。

ブリューゲルが再評価されるのは20世紀に入ってからです。アメリカの美術史家ギブソンは、長い美術の歴史の中で世界的評価を得た作家として、ミケランジェロ、レンブラント、ファン・ゴッホとともにブリューゲルの名を挙げています。ブリューゲルを世界四大画家として評価してくれていることは、ブリューゲル・ファンとして大変喜ばしい限りです。

2. 最大の劇作家と^{たた}称えられる シェイクスピア

数年前、家内とイギリスを旅行した時、シェイクスピアが生まれ、また老後を過ごしたというストラトフォード・アポン・エイボンにある彼の家を訪れました。現在はシェイクスピアの記念館になっており、各国

からの観光客で混雑していましたが、私は彼の戯曲を通して読んだこともなく、ましてや演劇を観たこともないので、何が展示されていたかも忘れてしまいました。しかし、ロンドンのテートギャラリーに飾ってあったハムレットの恋人オフィーリアが死んで小川に浮いている絵は、強烈な印象として残っています。

またオペラや映画では、「ハムレット」、「オセロー」、「ヘンリー5世」、「リチャード3世」などシェイクスピア原作のものに何回か接しており、私たち一般人もシェイクスピアについてできればもっと知りたいと思うようになりました。

注) 千葉県の安房郡丸山町にシェイクスピア・カントリーパークというテーマパークがあり、シェイクスピアの生家を再現し、展示していました。

市立の図書館に行ってみると、シェイクスピアを紹介する本があまりにも沢山あるので驚きました。それだけシェイクスピアを研究している英文学者が日本にいるのだらうと思いました。日本にも「日本シェイクスピア協会」というのがあり、多くの研究者が「新編シェイクスピア案内」という本を入門者向けに出版していたので、ここでは主としてそれを参考にシェイクスピアを紹介します。

シェイクスピアの正式名はウィリアム・シェイクスピアで、1564年にロンドンの北西部にある小さな町ストラドフォード・アポン・エイボンで裕福な商人の家に生まれました。その年はガリレオが誕生し、ミケランジェロが死亡した年ですから世の中を宗教界が支配しており、やっとルネサンスが開花しだした頃です。彼の人生は謎に包まれて居り、本当は実在しなかったのではないかという極論を唱える^{とな}学者も居たほどです。それは、37編の戯曲と3編の詩集の他には、日記や手紙などその人の生

涯を知る手掛かりとなるような資料を一切残さなかったからです。彼の肖像画や胸像も彼の死後制作されたもので、両者はあまり似ていません。しかし、文学史を飾る作品の執筆者が1人実在したことは確かです。

16世紀の後半のイギリスは芝居好きのエリザベス一世の統治のもとにあり、子供の頃のシェイクスピアも地方巡業の演劇の公演を見て演劇に関心を持つようになったものと想像されます。豊かだった彼の実家は彼が13才の頃から傾き始め、家の都合で18才の若さで結婚させられ、21才までに双子を含め一男二女の父親となります。にも拘らず彼は家族を置いて、単身ロンドンに出稼ぎに出ます。そして劇団に入って俳優として舞台に立ったり、舞台監督を務めたりしたといわれています。そのような職にすぐに就けたのは、演劇ばやりという社会的背景ばかりでなく、彼の才能と並々ならぬ努力があつてのことでしょう。しかも26才頃からは新進劇作家としてデビューし、「ヘンリー6世」、「リチャード3世」などの歴史劇や「じゃじゃ馬馴らし」などの喜劇を次々と発表して名声を得ていきます。

30才からは、悲劇「ロミオとジュリエット」、歴史劇「ヘンリー4世」、喜劇「真夏の夜の夢」、「ベニスの商人」など、36才からは四大悲劇といわれる「ハムレット」、「オセロ」、「リア王」、「マクベス」を発表します。

彼はそれまで形式的だった登場人物の性格に、人間的な苦悩や悲しみを持った個性を与え、世俗的なしがらみと真実の間で揺れる人間の姿を詩的な美しい韻文（同じまたは類似の音を文中の一定の位置に並べてメロディーが流れるように心地良く聞こえる文章）の台詞で綴りました。

一方事業的にも専用の劇場グローブ座の設立と運用に直接関与し、名声と共に富も同時に手に入れていきます。そして46才頃ロンドンを引き上げてストラトフォードに引退し、それまで疎遠にしてきた家族と一緒に過ごすことが多くなります。

この頃からイギリスの演劇界は変化を見せ始め、壮大な人間ドラマよりも、家庭の悲喜劇をより好むようになっていきます。シェイクスピアも時流に合わせ家庭のロマンス劇をいくつか書きましたが、あまり気に入らず、代わりに詩作に力を入れるようになります。この頃発行された「ソネット集」という詩集は、恋愛関係や友人関係について美しい韻文で書きとめたもので、イギリス詩史上最も優れた傑作^{けっさく}として高く評価されているそうです。

彼は52才という若さで亡くなっていますが、時代が彼の能力を一番必要としている時に自らの能力を思う存分発揮して生きたと言えるでしょう。それにしても稀有^{けう}の天才であったことは事実です。私も長生きさせていただいている間に、原文のような韻文の美しさは分からないかも知れませんが翻訳本^{ほんやく}でもいいからシェイクスピアの本当の魅力に少しでも触れなければと感じました。

3. 世界で最初に全身麻酔を行った 華岡 青洲

私自身も息子や妹もがんの治療の際、全身麻酔の御厄介になっていて、麻酔の有難さについては、人並み以上に感じているので、麻酔の歴史の中で江戸時代中期に華岡青洲が果たした偉大な功績についてテレビで特集しているのを観て、これは皆さんにもご紹介したいと思いました。

実は60年近く前、有吉佐和子が書いた「華岡青洲の妻」という本を読んだのですが、その時は母親と嫁とが全く新しい危険を伴う麻酔薬の実験台に競って自分の身を提供するという、いわゆる嫁姑の複雑な人間関係を主題としたものと軽く思って、その後すっかり忘れていました。

麻酔薬通仙散の完成

ここでは、和歌山県那賀町という田舎の開業医だった華岡青洲という一人の医師を中心として話を進めます。青洲は4代目の村医者として1760年に生まれ、家業を継ぎました。この一介の村医者が、世界の医学に先駆けること42年、患者に痛みを感じさせずに外科手術に成功した人として知られています。

青洲が15才の時、杉田玄白が「解体新書」を出しているのをみても、その時代は日本の医学会は和漢流と西洋流入り乱れての躍動期でした。青洲は田舎に引っ込んでいては、急速な医学の進歩についていけないと、家族からの仕送りを当てに、23才から3年間京都に勉強に行きます。彼の学友は青洲を称して「立志の鋭きこと、寒暑を避けず、^{かんじょ}体貌を飾らず、^{たいぼう}学を好み、^{きんぜん}欣然として食を忘れる」と言っています。

青洲の目標とする医者は、古代中国の名医「華佗」^{かた}で、麻酔薬を使い大掛かりな手術を行っていたという伝説を持ち神格化されていました。青洲は自ら「華佗」たらんと、麻酔薬の発明に情熱を傾けていきました。それまで、実際に麻酔薬を使った大手術は行われた事例はなく、痛がる患者を数人で押さえつけて手足の切断などは行われていましたが、がんなど体内の手術は見送られていました。

3年間の修業を終え郷里に帰った翌年に父が亡くなり、青洲は日常の診察と麻酔薬の研究に明け暮れました。毒草である朝鮮朝顔に麻酔作用があることは分かっていたましたが、その副作用を軽減させる薬剤を求めて山野を探し回る毎日が続きました。麻酔薬の効果を試すための生き物が必要で、最初は村の野良犬が対象でしたが、そのうち飼い犬にまで対象を広げ、村から犬が居なくなってしまったと村人たちに文句を言われるまでになりました。

その頃にはやっと動物実験で満足できるレベルの結果が得られたので、まず自ら飲んでみました。結果は両脚の麻痺を引き起こし、回復するのに一年を要してしまいました。

青洲の麻酔薬は通仙散と名付けられ、自身に続いて母と妻を実験台としてその有効性が試され、母の身体を蝕み^{むしば}寿命を縮めると同時に、妻には20年もの盲目生活を強いることになりましたが、当時としてはまずまずの成果とって良いでしょう。

乳がん手術の成功

当時、女性の乳房は神聖なものであって、切ったら死ぬという民間信仰が根強く、青洲としては助けられる可能性がある乳がんと思っても手術の無理強いはず、患者に手術の話をするに恐れをなして何人も逃げ帰ったといえます。乳房は切れないという迷信が薄らいだのは、農家のお婆さんが自分の家の農耕用の牛に角で突かれて、乳房が大きく裂かれてしまったという患者の縫合手術に成功してからです。

このようにして、通仙散を使った最初の乳がん手術が行われたのは、彼が46才になった時です。それが一応成功したという事実はたちまち全国の医師や、医師を目指す人たちの間に口コミで広がり、2千人ともいわれる多くの研修医が青洲のもとを訪れ、片田舎が急に活況を呈したと言われます。中でも青洲より30才も年上の蘭方医の大御所であった杉田玄白が青洲に教えを請う手紙を書いているのは注目して良いでしょう。

紀伊藩主は、有名になった青洲を藩医として何とか取り立てようとしませんが、束縛されるのが嫌な青洲は拒み続けます。それでも諦めない藩主に現在のままの開業医を続けられるのならということで、^{こぶしんかくご}小普請格御^{いし}医師という役に就きました。青洲は名声とか勲章なんか欲しくなく、青洲ならではの和漢と西洋の医学を取り入れた独自の臨床医学の発展に、

残された人生を捧げたかったのだと思います。青洲は一介の開業医として76年の人生を終わりました。初めは青洲のことを愚直だ、残酷だといって冷たい眼で見っていた村人たちでしたが、村の発展に尽くした医聖として立派なお墓を造りました。

世界の医学史に偉大な足跡を残した青洲の通仙散という麻酔薬でしたが、残念ながら現代の医学では使われていません。それは、後に西洋で発明されたエーテルやクロロホルムと異なり飲み薬であったために、コントロールが難しかったということが最大の原因とされています。それに加えて、青洲の意志ではなかったと伝えられていますが、通仙散は華岡流秘薬とされてしまい、その製法を知る者は、それを絶対に口外しないという血判を押させられたということもあるでしょう。几帳面な青洲ですから、患者のカルテは沢山残しましたが、研究成果を書物にして世に問うという行為は行っていません。まだまだ研究途上であるという気持ちが強かったのかも知れません。その証拠に彼のもとを巣立つ研修生の一人一人に「ただ思うは起死回生の術」と書いて与えていました。

私は華岡青洲を紹介していて、小学校の修身の授業で、^{てんねんとう}天然痘の予防接種法を開発したイギリスの田舎の開業医エドワード・ジェンナー（1749年～1823年）が自分の息子を実験台として種痘法の有効性と安全性を証明したと教わったことを思い出しました。

ただしこの話には若干の誤りがあり、種痘のワクチンを牛痘にかかった牛から作成し、初めてテストしたのは彼の使用人の息子というのが正しいそうです。ジェンナーが自分の息子に接種したのは、その7年前、既にアラブで開発されていた天然痘にかかった人の膿胞からとった人痘のワクチンで、接種を受けた人の2%は重症化し死亡することもあるといわれているものでした。ジェンナーの開発した牛痘からとったワクチンによる種痘法は改良が重ねられやがて世界に広まり、1980年に天然痘の根

絶が宣言されました。

青洲もジェンナーも片田舎の一介の開業医で医学の発展に偉大な貢献をしたということ、その成功には使用人も含め家族の命がけの協力があったということは共通です。

4. 廻船問屋にして日口外交の範を示した 高田屋 嘉兵衛

最近NHKの教育テレビで、江戸時代の幕末に活躍した高田屋嘉兵衛が2回にわたって取り上げられ、嘉兵衛が現代にも通ずる大きな教訓を残した偉人であることを改めて認識しました。大分前に司馬遼太郎が書いた歴史小説「菜の花の沖」を読んで、凄い商人がいたものだなと感心しましたが、その司馬遼が別の所で「江戸時代の人達にもし会えるなら、真っ先に高田屋嘉兵衛に会いたい。世界のどんな舞台でも通用する世界史的に見ても偉い人でした。」と述べているのを知り、皆さんにも紹介したいと資料を集めて勉強しました。

廻船問屋として自立する

嘉兵衛（幼名は菊弥といいましたが、ここでは嘉兵衛で通します）はナポレオンと同じ1769年に淡路島の西岸の都志本村^{つしほんむら}で貧しい小作人の長男として生まれます。男ばかりの6人兄弟でした。嘉兵衛は身体は小さかったけれど筋骨逞しく、腕白なきかん坊で正義を貫くために喧嘩ばかりする任侠肌の子だったといわれます。両親が病弱だったため弟たちの面倒も良くみしました。

嘉兵衛は、見ていて応援したくなるようなオーラを発していたとみえ、村の医者がただで読み書き、算盤^{そろばん}を教えてくださいました。また海が大好きで暇さえ

あれば丘から瀬戸内海を眺めて塩の満ちる時間を言い当てて大人たちを驚かしました。

13才になると家計を助けるために隣村の叔父や叔母の家に奉公に行き、10年間漁業や商業の基礎を学びました。その村は漁業と商業を中心としており、農村から来た嘉兵衛はよそ者として差別され、いじめを受けました。しかし彼は自分が受けた嫌^{いや}な思いを、決して他人にはしまいと前向きに捉えて自分の人格形成の肥やしとしました。

20才になる頃、嘉兵衛は村の網元の次女ふさと恋仲になりました。村の青年たちの憧れのマドンナだった「ふさ」をよそ者が仕留めたとあっては彼等のプライドが許しません。嘉兵衛は身の危険を感じ、秘かに1人で神戸へ逃げ出しました。何不自由なく暮らせるふさを連れ出すことまでは考えていませんでしたが、ふさは自らの決意で嘉兵衛の後を追いつ3年後神戸で正式に結婚します。その時既に長女、長男を生んでおり嘉兵衛は23才でした。

嘉兵衛はもともと淡路島という狭い空間に留まっていられる男ではなかったのです。当時神戸は西日本を代表する港湾都市で、親戚の堺屋喜兵衛が廻船問屋を営んでおり、弟の嘉蔵^{よしぞう}が住み込みで働いていたので、嘉兵衛もそこで働かせてもらうことにしました。

当時新酒を江戸に運ぶスピード競争が毎年盛大に行われており、嘉兵衛が乗り込んだ船が毎年一番をとりました。嘉兵衛の評価は急速に高まり、僅か3年で沖船頭^{おきせんどう}（雇われ船頭）になるというスピード出世を成し遂げます。次の目標は自分の船を持つことです。船にも二種類あって宅配便のように運送を専門とするものと、船長が積荷^{つみに}を買い取って高く売れそうな港へ寄港し自ら売り捌く商人^{さば}を兼ねたような船とがあり、嘉兵衛が目指したのは勿論後者です。それは「動く商社・百貨店」ともいえるものです。

そのためには莫大な資金が必要で、雇われ人ではとても不可能です。嘉兵衛は世話になった堺屋^{つちか}の元を離れ、淡路島で培った漁業の腕を生かして

第2部 本書で取り上げた世界の偉人たちの生きざま

熊野灘での鰹漁かつおに賭けました。そして2年間で必要な資金たを貯めると、嘉兵衛しんえつまるは辰悦丸という当時では最大級の大型船を建造し、神戸に弟5人を呼び寄せて高田屋を立ち上げます。実は堺屋喜兵衛は既に13艘そうもの船と大きな倉庫を持って大手の廻船問屋を営んでいたにも拘わらず、高田屋の将来性を見込んで、自らその傘下に入ったので、高田屋は最初から盤石ばんじやくの基盤のもとにスタートすることになります。余程嘉兵衛の様々な分野にわたる潜在能力に堺屋は惚れ込んでいたものと思われます。堺屋喜兵衛の子供や孫まで高田屋のネットワークに組み込まれ、以後の高田屋発展の有力な人材となります。

高田屋は1,500石の巨船あやつを操って、それまで殆ど開発されていなかった日本海航路を酒田を手始めに次第に蝦夷えぞ（北海道）にまで商圈を広げていきました。これを北前船といいます。「板子一枚下は地獄」といわれる危険な船乗り家業なので、女人禁制にょにんきんせいであり、嘉兵衛の妻ふさは神戸に残り二人の子育てにとどまらず、神戸本店の総務一切を取り仕切ることになります。

嘉兵衛は北海道の昆布にしんや鰯等の物産に着目し、支店を開設したいと考えていました。当時幕府は松前藩に北海道の統治を任せていたので、港としては松前や江差が栄えていましたが、嘉兵衛は敢えて寂れている函館さびを選びました。それは競争相手が少ないだけでなく、天然の良港でもあったからです。嘉兵衛はまず地元の有力者とネットワークを築こうと、ロシアからの使節ラスクマンや10年間のロシア抑留後ラスクマンと一緒に帰国した黒田屋光太こうだ夫いう（緒形拳主演で映画化されています）を饗応きょうおうしたことのある白鳥家に投宿しました。

その頃、ロシアだけでなくイギリスの船も北海道に來航するようになり、幕府は松前藩だけでは北海道の守りは十分でない、東北海道を幕府直轄として奉行所を函館に置くことにします。そのことも北海道を飛躍の拠点にしたいと考えていた嘉兵衛は、好機と捉え活用することになります。一方幕府の方もエトロフ島への安全な航路を開発するために、優秀な船頭を求めており、

嘉兵衛に目を付け依頼します。出来ないと言えない嘉兵衛は単身赴任のまま蝦夷地に留まり、見事複雑な潮流を読み切ってエトロフ島への航路を確立します。エトロフ島には千人近いアイヌ人がいましたが、嘉兵衛は辰悦丸で持ち込んだ米、酒、塩等を分け与え十数ヶ所の漁場を開発して日本式の漁法を教えました。嘉兵衛は一民間人でありながら植民地統治にも力を発揮しました。

幕府はカラフトを含めた北方の島々を日本の領土として確立するために、5艘の軍船にもなる大型船を急いで造る必要に迫られ、船大工を探しましたが引受手が居らず、嘉兵衛に頼み込んできましたが、彼は相手が幕府であろうと堂々と対等の交渉相手として、条件をつけて引受けます。そして10才になる娘を船大工に嫁がせ造船業にも進出することになります。同時にその5艘の船の操船も高田屋が引受けることになり、その一環で北方の島々の測量を行う間宮林蔵の輸送も担当します。そのようにして苗字帯刀まで許された嘉兵衛は33才の男盛りでした。

嘉兵衛は引受けたからには、役割以上の働きをする男で、幕府と協力して北方の島々を含む蝦夷地の開発を行いました。郷里の淡路島からの入植者を連れてきたり、自腹を切って道路や港湾の整備を行ったり、函館大火災の後には炊き出しをしたり、仮設長屋を建てたり、井戸を掘ったり、自ら仕事を創りだして失業者を救済したりしました。一方では全国に販売する積荷の品質を徹底的に管理し、高田屋の品物ならチェックせずに買ってもらえるまでの信用を築き上げ、江戸や大阪に支店を出すまでになりました。

民間外交官として重大な役割を果たす

1808年、嘉兵衛は39才の時、ロシアが領土拡大と通商を求めて千島列島を南下し、幕府が日本の領土としていたカラフトやエトロフにまで攻め込み集落を略奪し、焼き払う事件がありました。幕府は松前藩に任しておけな

いと蝦夷地を全て直轄統治とし、奥州諸藩に蝦夷地防衛のための出兵を命じました。兵士の輸送といざという時軍船としても使える新たな船の建造が必要となりましたが、頼みとなるのは嘉兵衛しかいません。このようにして嘉兵衛は危険な蝦夷地の仕事にいやおうな否応無く組み込まれていきます。

1811年にゴロヴニンを船長とするディアナ号が千島列島の測量を目的として南下して来て、水の蓄えが乏しくなったのでクナシリ島に給水のために上陸します。ゴロヴニンは、3年前のカラフトやエトロフの略奪を行ったのは、商船であってロシア政府の意向ではなく、その船長は逮捕され、さば裁きを受けたと説明しますが、幕府の役人は信用せずゴロヴニン以下7名を強制的に拘留してしまいます。その様子をディアナ号の船内から望遠鏡で確認した副船長のリコルドはそのことを報告するために直ちに帰国します。そしてゴロヴニン救出と報復のための大船団の派遣を願い出ますが、ナポレオンのロシア侵攻が間近に迫っているロシアに日本と争いを起こす余裕はなく、結局リコルドを船長として測量を再開するという名目でゴロヴニン救出作戦が開始されます。

嘉兵衛の船がエトロフ島から函館に向かっている時たまたまりコルドのディアナ号に遭遇してしまい、そうぐう拿捕されてしまいます。船員のうち10人は海に飛び込んで逃げましたが、陸地に泳ぎ着いたのはたった1人だったといえます。嘉兵衛は蝦夷地の仕事を続けている限り、いずれこういう事態が発生するのは避けられないと覚悟を決めていたので少しもあわてず、他の者は恐怖で食べ物かのどを通らないというのに、「腹が減っては戦は出来ぬ」とばかり悠然と昼食をとりました。そして侍としての正装をし日本刀をさして単身堂々と出て行くと、「これは大物に違いない」と、銃剣を持って横柄な態度だった兵士たちは急に整列し、船長のリコルドの部屋に案内しました。

リコルドはゴロヴニン以下の拘束されているロシア人の安否を確かめ救出するのが目的であることを知らせ、そのためには交換に値する日本人の人質が必要であると嘉兵衛に告げて、人選を任しました。嘉兵衛は自船に戻り自

分と同行する者を募ると、皆「自分たちだけが生きて帰ったのでは、神戸にいる女将^{おかみ}さんに合わせる顔がない。」と言って志願したので、弟等5人を選んで同行させることにします。嘉兵衛はリコルドに一つだけ条件をつけます。それは自分だけは常にリコルドと行動を共にするということでした。その背景には姿かたちは異なっているけれども、同じ人間同士であり、言葉は十分に通じなくとも、心は通じ合うという信念があったからです。リコルドはそれを承知します。

嘉兵衛はリコルドの要請で幕府と家族にそれぞれ手紙を書きます。幕府には「自分は拘留されるが、それは幕府がゴロヴニン等を何時までも拘留しているためであり、自分は蝦夷地を任された商人として命^とを賭して日ロの関係改善に努める。」という趣旨のことを、家族には「自分のことは心配せず、ただただ家業に励め。」という趣旨のことを書きました。

嘉兵衛はさらに日本に送り返す船員全員にディアナ号の見学をさせてくれるように頼み、それを実現させます。幕府が大型船の建造を禁止していたため、日本には一本マストの船しかありませんでしたが、ディアナ号は三本マストで沢山の帆が張ってありました。嘉兵衛は造船業もやっていたし、いずれ諸外国と海軍、海運の面で対等に立ち向かうためには、日本に帰る者たちに外国船の技術を見せておきたかったのです。

嘉兵衛はカムチャッカのペトロパブロフスク港へ連行され、そこで捕虜としての生活を送りますが、嘉兵衛自身は日ロの間の摩擦解決のために自らロシアに乗り込んできたのであり、自分が捕虜であるとは全然思っていませんでした。リコルドは約束を守って嘉兵衛と同室で寝ていたし、嘉兵衛等は出来るだけ^{ほど}施しを受けず自船から持ち込んだ食料で自炊するようにして対等の立場を維持しようとしていました。そのお陰で嘉兵衛とリコルドの間には友情のような感情が生まれました。しかし、その代償は大きく、5人の同伴者のうち3人を栄養不足のため^{かいけつびょう}壊血病で亡くし、自身も以前のような頑健な身体ではなくなってしまうました。

しかし、幕府の手伝いとして蝦夷地の開発に当たっていた嘉兵衛には幕府が欲しがる情報が分かっていたので、さまざまなルートを使って情報収集に当たりました。例えばリコルドに仕えていたロシア人召使いと仲良くなり、日本語を教える代わりにロシア語を習う過程でロシアの軍備や産業の状況について知り、アメリカの駐口大使の中国人召使いとは漢字を使って筆談したりしました。その駐口大使がペテルブルグに行ってアレクサンドルⅡ世に面会すると聞くと、自分の日本刀を献上することを依頼しました。

リコルドは嘉兵衛の身体が壊血病で弱ってきていることを知り、友人としてその身を案ずると同時に、ゴロヴニン救出と日本との外交関係の改善のために嘉兵衛が切り札であると思っていたので、ディアナ号で早々にクナシリに行きます。そこで約1年振りに嘉兵衛と部下2人を返還しますが、幕府は州知事の正式な謝罪文がなければ、ゴロヴニンは引き渡せないとして、翌年再び函館で面会することにします。リコルドは困りますが、嘉兵衛を信じて一旦帰国し、州知事の謝罪文を持参して函館港に入港します。

幕府は面会所を函館の浜に新設し、準備は整ったのですが、両国の習慣の違いからなかなか双方の折り合いがつかえません。例えば室内に銃剣を持ち込んではいけないとか、長靴を履いたまま入ってはいけないといったようなことで、両国のパイプ役を任された嘉兵衛は何回も小船でディアナ号を訪れては両者の調整に当たりました。その時嘉兵衛は日本とロシアの双方が尊厳を損なわないように細心の注意を払い、無事両国代表の面会を終え、ゴロヴニン等の解放と一触即発だった日ロ関係の改善に大きな貢献を果たしました。

ディアナ号の乗組員は、役目を終えて日本を去る時全員で「タイショウ、ウラー」を三唱したといえます。「嘉兵衛大将、万歳」という意味で、如何に嘉兵衛がロシア人兵士にも慕われていたかが分かります。それには嘉兵衛が侍の大將のような大物であるとロシア人に思わせるよう儀式等で自ら演じていたこともあるでしょう。

帰国後

当時日本は鎖国政策をとっており、外国帰りの人はそれだけで罪人扱いされ、嘉兵衛もディアナ号来航時接待役として重大な役割を果たしたにも拘らず、函館の寺に半月も監禁された上、大阪に連行されて取調べを受けました。幸い無罪となり、再び高田屋の事業拡大に尽力しますが、事業主を留守中の高田屋を任せた弟の金兵衛に譲り、自分は郷里の淡路島に豪邸を建てて住み、表には出ずにリモート・コントロールに徹します。嘉兵衛46才の時でした。

嘉兵衛には弥吉、くにという二人の実子がいましたが、行いが悪いということで二人とも勘当^{かんとう}してしまい（くにには後に勘当を解かれて再婚）、本妻ふさは嘉兵衛が妾と同棲し、妾腹の子嘉吉に高田屋を継がせるなど、自分の理想とする男性とは違ってしまったので家を出てしまいました。ふさは嘉兵衛の無事を祈って四国をお遍路して回り、立派に神戸の本店を守って使用人にも「女将^{おかみ}」、「姐御^{あねご}」と慕われていたのですが、プライドが許さなかったのでしょう。嘉兵衛には港ごとに妾がいたそうですが、本妻と離婚する前から妾を自宅に連れ込み、その子に家督を継がせるというのは現代では問題外の行為といえるでしょう。

嘉兵衛は晩年蓄財を惜し気もなく使って溜池や、漁港の整備を行って郷里の発展に尽くし、住民や阿波藩主から感謝されますが、本当に充実した人生はリコルドと別れるまでだったのではないのでしょうか。嘉兵衛は背中に悪性の腫瘍^{しゅよう}が出来、手当ての甲斐もなく59才でこの世を去ります。そして弟金兵衛に引継いだ高田屋もロシアとの密貿易を幕府にとがめられ取り潰しに遭ってしまいます。

明治になって嘉兵衛が日本の海運業、通商、外交に果たした役割が再評価され、数々の表彰を受け、カムチャッカにはカヘイ峰という山があって、ロシアでも嘉兵衛が評価されていることが分かります。

5. 印象派の先駆となったイギリス人 ターナー

私と家内は絵の好みがかなり共通していて、ターナーは最も好きな画家の一人です。しかしターナーの絵を購入するだけの経済的なゆとりはないので、ターナーの流れを受け継いでいるイギリスの風景画家ヘンリー・ドーソン(1811～1878年)の「ウォルトン橋」という夕暮れ時の空、川面、橋、自然な岸辺を描いた美しい色彩の絵を求め、居間に飾って我が家の宝としています。

イギリスは不思議なことに、ターナー以外に美術史上に大きな足跡を残している人がいません。たしかにロンドンには博物館、美術館が充実しているのですが、それらはかつての大英帝国の反映を物語るもので、イギリス独自の美術が開花したものではありません。

世界でも有数といわれる大英博物館は、エジプト、西アジア、ギリシャ、ローマ、東洋を中心とする美術品、民俗資料を展示していますが、英国本土のものは殆んどありません。目玉であるロゼッタ・ストーンは、エジプト王プトレマイオス五世を讚^{たた}える言葉が古代エジプトの聖刻文字と民衆文字およびギリシャ文字の三書体で刻まれており、エジプト文字解読の鍵となったものですが、ナイル河口の町ロゼッタでナポレオンのエジプト遠征軍が最初に発見したものです。

私たちは、アートサロンが応援している作家をロンドンの画廊に売り込むという目的もあったので、画集を持って画廊巡りをしたのですが、保守的なイギリス人は、ニューヨークで売れている作家でないと見向きもしないという態度で、私たちの英語力にも原因があったのですが、売り込みは一件も成功しませんでした。せめて好きなターナーの絵でもじっくり観ていこうと、テート・ギャラリーとナショナル・ギャラリーに行ってみることにしました。ターナーの遺贈した作品は殆どこの二つのギャラリー（美術館と言ったほうが日本人にはイメージが合う）に収蔵されています。

作家の多くは、時代によってその画題や画風を大幅に変えるものですが、

ターナーもその例にもれず1851年に76才で亡くなるまでに大きく変化しているので、それを知った上で鑑賞したほうがより深く感動したのでしょうか、私たちはテート・ギャラリーで日本語訳もついた画集を求めて後で勉強するという逆の順序になってしまいました。

各種の解説書で、ターナーは文学史におけるシェークスピア的位置にあるとされています。たしかにイギリスはターナーの時代、風景画においてフランスの印象派の一步先を行っていました。ターナーの影響は、特にモネに色濃く現れています。

同じ風景画というジャンルで、ターナーと並んで頂点を極めたライバルにコンスタブル（1776～1837年）がいます。私たちがターナーの絵を観て歩いている間に、またかと思える程にコンスタブルの絵が飾られていました。二人はお互いに意識し合いながらも画家としては全く違った道を歩きました。

ターナー（1775～1851年）がロンドンの下町で理髪店の息子として生まれ、子供の頃にただ一人の妹を亡くし、母も精神病院に入院中に亡くなり、生涯独身を通したのに対し、コンスタブルはイングランド東部の田舎に生まれ育った自然児であり、紆余曲折を経た末に幸せな家庭を持ちました。またターナーが国内はもとより、国外もアルプスに10回以上、フランス、イタリア、ドイツ、オランダ、ベルギー、デンマークなどをスケッチして回り、高齢になるまで定住地を持たなかったのに対し、コンスタブルは家庭を重視し、長期のスケッチ旅行はしませんでした。イギリスにはコッツウェルズという美しい農村風景や湖水地方という風光明媚な広大な地域めいびもあり、外国にまで行かなくても、画題には事欠かなかったことは事実です。私たちがイギリスに行った時も、コッツウェルズの農村風景をスケッチしている棚町さんという日本人画家に出会い、それが縁で彼の個展をうちのギャラリーでも2回やっています。

コンスタブルは家族を愛し、郷土を愛し、手に触れることのできる自然の一瞬を忠実に切り取って美しい風景画を具象的に描いており、生涯その姿勢

を貫きました。

一方ターナーは同じく自然を対象としながらも、一枚の絵の中に動きや変化を表現し、更に自分の魂たましいを入れ込もうとしました。色と光の錬金術師ともいわれるように、空や海に肉眼では見られないような色彩も使いました。現場主義をモットーとしていたターナーは、壮年期まで、ヨーロッパの各国を旅しながらスケッチし（1万9千点にものぼり当時では最多）、一部を下絵としての水彩画とし、その中から厳選して油彩画の大作を制作しました。海洋での吹雪の絵を描くために、自らをマストに縛り付けさせ、4時間にわたって嵐の海を見続けたといわれます。

ターナーは27才という若さでイギリスの王室が認める有力な画家の集まりであるロイヤル・アカデミーの会員に選ばれ、後に副会長にまで登り詰めながらも、ターナーはロイヤル・アカデミーを利用することはあっても自ら評価することはありませんでした。ロイヤル・アカデミーは年に1回展覧会があり、開催日前日に飾り終わった後、数時間の最後の手直しが認められていましたが、ターナーはわざと未完成の絵を出品し、飾られた自分の絵を他の画家や美術愛好家の見守る中で見事な絵に変貌させてみせるというパフォーマンスをして見せました。こんな技は、確かな腕前と自信がなければ不可能なことですが、快く思わない会員も多かったことでしょう。

ターナーの絵は晩年になるにつれて、輪郭りんかくのはっきりしない抽象画っぽくなっていきますが、それらは純粹な意味の抽象画ではなく、あくまでも現実の風景が素になっているもので、余分なものを削ぎ落としていった結果であるといわれています。しかし当時のイギリスの画壇では高い評価が得られる画風ではありませんでした。

ターナーは人間関係的には生涯孤独で、自分の絵の進歩発展だけが生き甲斐でした。そのため自分の絵だけを飾るターナー・ギャラリーを作り、既に売れている自分の絵を売値の何倍もの価格で買い戻すということまでやっ

ていました。ターナーがバトンを渡すべき画家はイギリスでは現れませんでした。フランスで秘かに印象派に引継がれ、本国でも今では再評価されてイギリスの国家的偉人とされています。

6. 近代彫刻の巨匠 オーギュスト・ロダン

彫刻家としてのレビュー

ロダンはフランスのパリで1840年に生まれました。父はフランス北部の出身で荷車引きをしていましたが、産業革命の波に飲み込まれて失業し、パリに出て修道院や警視庁の雑用係を足掛かりに後に刑事になりました。ロダンの両親は宗教心が厚く、一家は日曜ごとに教会に行き、その後天気の良い日は植物園や公園に連れて行ってもらいました。

ロダンはごく普通の内向的な少年で、空想的な世界で一人で遊ぶことが好きでした。また母親が食料品屋で買い物をした時の包み紙に印刷された絵があると、それを手本にして絵を描いていたといわれます。しかし、彼は強い近視でした。教育熱心な両親は、ロダンを修道士が運営する優れた学校に入れましたが、彼は何も身に付けることが出来ませんでした。そこで父は彼を叔父がフランス北部で経営している寄宿学校に送り込みましたが、それでもロダンは読み書きはもとより数学も殆ど理解できず、14才の時パリに送り返されてしまいます。男の子なら将来の仕事を決めて手に職をつけないければならない年頃です。

彼は図書館で偶然ミケランジェロのデッサンを集めた画集を見つけ、デッサンを仕事にしようと心に決めます。それを父に言うと、「それでは食べていけない。我が家の社会的地位に相当した仕事に就け。」と猛反対されてしま

います。ロダンは授業料の要らない帝国素描学校なら良いだろうと、まず母と姉を見方につけ、父の譲歩を引き出しました。学校に行ってみてロダンは「仲間と比較して自分には芸術の素養が欠けている」と気付きました。それを補うために彼はルーブル美術館や図書館に足繁く通って模写をしたり、文学を含め芸術に関して幅広く文献をあさったりしました。父の反対を押し切って自分が選んだ道ですから、心構えが違います。ロダンの実力はみるみる上がって、17才の時古代彫刻のデッサンで2度1等を獲得し、教師からも国立高等美術学校に進学することを奨められます。

ロダンも自信がつき、更に粘土をこねて塑像^{そぞう}を作る作業に激しい喜びを感じたことから、彫刻こそ自分が進むべき道だと確信します。そして進学することにし、国立高等美術学校を受験するのですが、どうしたことか3回も不合格となってしまいます。ロダンの才能を知る友人は不合格の原因が分かりませんでした。後になって考えると、当時サロンといわれる一流芸術家の主流は、極めて保守的で、ロダン等の新しい考え方を有する若い芸術家の卵を身内に入れたいなかったからだろうと思われれます。

その頃父は刑事を引退し、ロダンが家計の面倒を見なければならなくなったので、ロダンはパリの装飾業者を渡り歩いて出来ることは何でも引き受けて稼ぎ、夜だけ自分の自由な制作のために費やしました。そのようにしてやっと貯えた僅かなお金で、24才の時初めて自分のアトリエを手に入れます。それは馬小屋だったもので、広さは十分でしたが、どこからでも隙間風^{すきまかぜ}は入ってくるし、雨は漏るといふひどい環境でしたが、ロダンにとっては、自立するための重要な砦^{とりで}でした。

その年にロダンはローズ・プーレという20才のお針子の女性に出会い同棲し子供も設けますが、子供を認知することも、正式の結婚をすることもありませんでした。それにも拘らずローズは、その後53年にもわたって家事手伝いやモデルとしてロダンに献身的に尽くすこととなります。

ロダンが芸術家として世に認められる道は、サロンという官展に入選することでした。彼は出展のためにビビという名の実在の人物をモデルとした「鼻のつぶれた男」という胸像を制作しましたが、この作品は「あまりにも本物に似ている」という理由で落選し展示されませんでした。そのショックは美術学校入試失敗以上のものでした。

一流彫刻家として認定

1870年、ロダン30才の時フランスとプロセインとの間で戦争が勃発し、ロダンも短期間ですが兵役を課せられました。戦いに敗れたフランスのパリは大きく破壊されて仕事がなくなり、単身ベルギーのブリュッセルに出稼ぎに行きます。

ロダンのベルギー暮らしは6年にも及び、途中でローズを呼び寄せ一緒に大聖堂や美術館を見て回り、森を散歩し、夜はその記憶を辿って絵を描いていました。その頃の愛読書はイタリアの詩人ダンテの「神曲」でした。ブリュッセルはロダンが初めて彫刻家としてデビューした土地となります。しかし彼が出展した「青銅時代」という作品は、生身のモデルを使って型を取ったのではないかとの噂が広がってしまいます。当時そのような制作方法は彫刻家の恥ずべき行為とされていたので、ロダンはそうではない事を証明するために、モデルから直に型を取った作品を作り、背の高さや、筋肉の付き方の違いを見せてやっと疑いを晴らしました。

ロダンはパリに戻って制作を始め、政府や市が企画する様々なコンクールに応募しましたが、殆ど落選し、「ダランベール」という作品のみが、新市庁舎の正面を飾りました。ただし彼の技術は広く知られるようになり、彼を擁護してくれる友人たちによってやっとパリの芸術家サークルに入ることを許されます。

ロダンの才能を公式に認めて作品を購入し、制作を依頼したのは、時の

美術省次官のエドモン・チュルケでした。彼はフランス学士院の強すぎる影響力はフランス美術界の発展のために良くないと、自分の行政力で敢えて有名でないロダンを引き立てようと、リュクサンブール美術館のために「青銅時代」と「洗礼者ヨハネ」を購入し、計画中だった同美術館の門の制作もロダンに任せました。ロダンはやっと巡ってきたチャンスに創作意欲を燃やし、かねてから構想していたダンテの「神曲」をもとにした「地獄の門」を制作することにします。

ロダンは「地獄の門」の制作に20年を費やしましたが、結局は未完成のままに終わってしまいました。彼はインスピレーションの赴くままに様々な小さな像を作って門を埋め尽くし、一つの宇宙、人間の多様な感情を表現した一大絵巻を完成させようとしていたのです。そのために200体ほどの小さな作品を制作したのですが、それらをどのように配置しても自分が思い描く地獄門のイメージにぴったり来なかったのでしょう。ロダンの一途で自分に妥協しない姿勢が見て取れます。しかしそれらの作品がすべて無駄になったわけではありません。拡大して単独の作品として世に問うているからです。その中に有名な「考える人」も含まれていました。

以後ロダンは1880年代のパリの名士の間で、大変人気を博すようになり、それら名士から胸像の注文を受けて手掛けます。しかし彼が本当に制作したかったのは尊敬するビクトル・ユーゴーの胸像でした。ユーゴーは既に他の彫刻家に胸像を依頼してあるからということで、ロダンの申し入れを断ります。しかし、自分の家に来て勝手に制作するのは構わないというので、ロダンは仕事をしているユーゴーを様々な角度からスケッチして、それを総合して胸像を制作するという敢えて難しい方法での制作に挑み、傑作を生み出します。

カミーユとの関係

ロダンの名声が広まると、彼は工房をまるで近代工場のように分業化しま

した。モデル、型抜き工、荒削り工、下彫り工等に分け、特に下彫り工には将来芸術家として有望かつ個性的な若者を採用しました。その中にカミーユ・クローデルも含まれていました。カミーユ19才、ロダン43才と年令は24歳も離れていましたが、二人はお互いに相手の能力を認め合い、いつしか惹かれ合う関係になっていきました。ロダンには身の回りの世話をしてくれるローズが居り、愛してはいたのですが、ローズはロダンの成長について来れず、ロダンにとって芸術上の相談相手、パートナーとしてカミーユの存在が大きくなっていったのです。

ロダンとカミーユは、アトリエの近くにあった古い屋敷を買い同棲するようになります。そしてロダンはカミーユをモデルとした作品を数多く制作します。それらは厳粛な愛、官能的な愛、度を越えた苦悩を表現しています。一方カミーユは心酔しているロダンの大成のために、自らが彫刻家として生きる道を諦めなければなりませんでした。

1880年代はロダンにとって輝かしい年代でした。フランス北部のカレー市の市長からカレー市の英雄たちを讃える記念碑を依頼されました。ロダンが試作を示すと、市民たちの意気消沈した姿に委員会メンバーが反発しましたが、市の財政的理由でこのプロジェクトは中断され、委員会も解散されてしまいます。ロダンは自主プロジェクトとして、誰からも束縛されずにこの「カレーの市民」を完成させました。またフランス革命100年祭を記念したエッフェル塔で名高いパリ万博では、モネとロダンの二人展が開催され、絵画と彫刻の分野でそれぞれが革新的な作品を展示しました。二人は生涯を通じて友情を結びました。

1891年には、フランス文芸家協会会長のエミール・ゾラの推薦で、文芸家協会の創設者バルザックの全身像を依頼されましたが、既に亡くなっている人を対象に制作することは非常に難しく、ロダンは資料集めに何年も掛かってしまいました。バルザックの洋服を仕立てた仕立て屋に同じサイズの洋服

を注文したり、バルザックに似ているという郵便配達人にモデルを頼んだりして試作を繰り返しました。ゾラが引退した後の文芸家協会のメンバーは待ちくたびれて、24時間以内に作品を提出するようにとロダンに迫りました。しかしそれはロダンにとって不可能なことだったので、事前に受け取っていた1万フランを返済し、文芸家協会は新たにファルギエールという彫刻家にバルザック像の制作を依頼しました。

ロダンは独自にバルザック像を完成させ、サロンに出展しましたが、文芸家協会はその像を採用することはありませんでした。ロダンは自信作をまでも世間に拒否され、自分のアトリエの庭に設置して、認められるのを待つこととなります。

バルザックの像の完成が遅れたのには、カミーユ・クローデルとの同棲が行き詰ったこともありました。ロダンはカミーユに去られた衝撃から立ち直れずに、貧血の発作に悩まされていました。カミーユはいずれロダンと結婚できると期待していたのですが、未婚のままロダンの身の回りの世話をし、子供まで設けたローズをロダンが愛し続けているのに耐えられず、大変なことだと思いながらも自ら独立した彫刻家を目指すことにしたのです。

ロダンはカミーユのことが忘れられず、何とか彼女の気を引こうと人を介して援助をし続けました。カミーユがロダンの胸像をサロンに出展すると知ると、それが展示できるように審査委員長に働きかけたりもしました。やがてカミーユの評判が高まり、多くの作品がサロンに展示されるようになったのですが、ロダンの弟子だという世間のイメージを消し去ることができず、精神が不安定になり、被害妄想の兆候が見られるようになります。そして1913年に精神病院に入れられ、再び社会に出ることなく30年後に亡くなりました。

ロダンは次第に老いていきますが、東京を含め世界を巡回する大回顧展が大成功を収め、注文が殺到してアトリエの下彫り工だけで約50人にもなりました。その頃アメリカ生まれのショワーズ公爵夫人に夢中になり、同棲する

ようになります。夫人がロダンの遺産だけが目当てだと分かり、ローズの元に戻ります。

ロダンは老いて時々おかしいことをするようになって、世の女性たちは財産目当てに彼に付きまとい続けていたので、ロダンの友人たちがお膳立てをして長年献身的に仕えてきたローズとの正式の結婚式を1917年に挙げます。しかしその年のうちに二人とも亡くなりました。ロダン77才の誕生日の直前でした。彼の作品や収集品は遺言により全て国家に寄贈され、ロダンとローズが最後に住んでいた屋敷がロダン美術館となり、それらの作品を展示しています。

私も家内とパリの美術館巡りの際立ち寄りしました。夕方にも拘らず長い行列ができていて、私たちが入場券を買ってすぐに締め切られ、大勢の人が入館できませんでした。庭に置かれた有名な「考える人」は、ナポレオンが葬られているアンバリッドの黄金のドームをバックに今何を考えているのだろうと思いました。

ロダンと日本との関係

最初にロダンを日本の美術界に紹介したのは岡倉天心で、1890年（明治23年）に東京美術学校で行った講義で、ロダン彫刻の目的に応じた力点の集中について説いています。その後萩原守衛と高村光太郎がロダンのアトリエを訪問し、その後の作品に大きな影響を受けています。

1910年（明治43年）には雑誌「白樺」がロダン特集号を刊行するに及んで、ロダンが芸術家の間だけでなく一般にも広く知られるようになります。その際「白樺」の同人たちは、ロダンに日本の浮世絵30点を贈り、ロダンから「ごろつきの首」等3点のブロンズ像が返礼として送られてきました。現在この3点は倉敷の大原美術館に寄託されています。大原美術館にはこの他児島虎次郎による「洗礼者ヨハネ」等の収集作品も収蔵されています。

東京上野の西洋美術館には、松方幸次郎収集になる「地獄の門」、「カレーの市民」などの大作を含むロダン・コレクションがあります。

一方のロダンも日本に強い関心を抱いており、浮世絵コレクションを愛蔵していたし、特に踊り子の花子に魅せられ、多くのデッサンと彫刻を残しています。

7. 日本資本主義の父 渋沢 栄一

先日NHKのBS放送で歴史上の人物を取り上げて多様な視点から専門家が評価するパネル・ディスカッションを行う番組を見ましたが、その時はたまたま渋沢栄一について議論されていました。渋沢栄一といえば、私の母校である一橋大学の創立者であり、私はもっと彼の生きざま、業績について知っていなければならなかったのですが、そのテレビ番組をみて、「そんなに偉い人だったのか」と再認識させられました。早速図書館で彼に関する伝記を探すと、何と十数冊もあり、しかも最近になって評価が一層高まったのか、近年になっての出版物が多いのに驚きました。明治維新といえば、これまで政治改革に焦点が当てられがちでしたが、日本が資本主義国家として急速な発展を遂げた背景には、渋沢栄一のような日本の産業の発展に生涯を捧げる人が必要だったのです。

渋沢栄一は江戸時代の末期1840年に、現在の埼玉県深谷市の比較的豊かな農家に生まれました。1931年(昭和6年)に91才で歿しましたから、江戸、明治、大正、昭和とまさに激動の時代を生き抜いた人でした。

彼は学校には行きませんでした。漢学を父や従兄から学び、11才からは剣術も習い始めました。小さい頃から家業の藍玉あいだまづくりを手伝って、1人で

関東一円に売り歩きました。そして近隣の農家から質の良い藍を仕入れるために、藍の質の良さによって相撲の番付表のようなものを自ら作って農家を競わせるなど、非凡な商才を発揮したといえます。

一方、代官等幕府の役人の圧政や侮蔑に憤慨し、幕府を倒さなければこの国は良くなると、21才で江戸に出て過激な尊皇攘夷派となり、京都に出奔して薩長の志士とも交わったのですが、25才で方向転換し、徳川最後の将軍一橋慶喜に仕え、幕臣となります。この辺の事情は良く分からないのですが、私がコンサルタントとして一寸法師のように時の権力者の懐に入り込み、内部から役人の考え方を変えていく方が、外側でやみくもに反対し、抵抗するよりも効率的に変革できると考えていたことと一脈通ずるものがあったのかも知れません。

渋沢栄一はそのお陰で将軍慶喜の弟昭武のパリ万博使節団の一員となり、27才の若さでフランスを中心に西欧の近代文明に直接触れることとなり、それが後の彼の生き方に大きな影響を与えます。この渡航は、明治新政府の成立により、僅か1年で切り上げられてしまい、帰国後は新政府の民部省に任官し、主として財務関係の仕事に当たります。この度世界遺産となった富岡製糸場の運営にも関与し、また租税制度、貨幣制度、戸籍制度、度量衡制度、太陽暦による暦制度等の立案・施行にも大きな貢献をしました。33才の時に井上馨と共に政府財政の立て直しに関する建白書を提出し、最早役人として自分がやるべきことは終わったと潔く役人を辞任してしまいます。30才前後までの短い役人生活において、これだけの偉業を成し遂げたとはまさに驚異という他ありません。しかし渋沢栄一の真骨頂は一民間人となってから発揮されます。

彼は実業界にあって金融・保険・交通・通信・工業・商業・サービス業・鉱業・農林水産業等にわたる500もの会社の設立に関わり、その中のいくつかには代表取締役として自らそれらの運営に当たりました。彼は金儲けだけ

を大事にする資本主義ではなく、金と同時に人も大切にすることを提唱し、それを自ら実践してみせました。彼の思想は発展途上国の産業開発のモデルとなるのはいうまでもなく、リーマン・ショックからの立ち直りに手間取り、金融・財政優先の資本主義に行き詰まりを見せている先進諸国の経済の新しい仕組みを考える上でも参考になるというので近年再評価され始めています。

明治の経済人といえば三菱財閥を築いた岩崎弥太郎が思い起こされますが、政商化し、政府をバックにした髭を生やしていかつい顔の岩崎に対し、国民から広く株主を募集して対抗する小柄で柔和な顔つきの渋沢栄一が激論を戦わす場面を想像しただけで痛快です。

彼が設立に関わった会社の多くは、現在でも合併等によって名称こそ変わっていますが、日本経済の根幹を支える会社として存続しています。彼は会社を作っただけでなく証券取引所等の資本主義経済に必須の施設や経済団体を作り、自らその先頭に立って日本経済を引っ張っていきました。

また特筆すべきは、民間外交官として、グラントアメリカ大統領やインドの詩人タゴール等国賓級の外国の客を東京王子の飛鳥山別邸で接待し、また自ら度々アメリカ等諸外国を訪問して時の大統領等の要人と面談していることです。

61才の時には井上馨からの大蔵大臣就任の要請を、あくまでも一民間人としてお役に立ちたいとして固辞しました。70才までに現役は第一銀行と東京貯蓄銀行を除いて退き、若い頃から続けていた教育・啓蒙^{けいもう}・社会福祉活動に専念するようになります。教育ではビジネス教育、女子教育、身障者教育に特に力を入れました。

彼は91才という長寿にも拘わらず、歿するまで後発の日本の経済発展という崇高^{すうこう}な使命感のもとに、人生をいくつかの段階に分け、それぞれの段階での自分の役割を決め、ぶれることなく活動し続けたまさに私の理想像とすべき偉人でした。彼の生きざまを追うと、私もこれからの10数年を目標を持って渋沢先生に恥じない生き方をしなければと思いました。

8. 「光の画家」 クロード・モネ

少・青年時代

モネは1840年にフランスのパリで食料品店を営む両親の元で次男として生まれました。既にこのシリーズで紹介しているルノワールより1年早く、ゴッホよりは13年早い誕生でした。モネが5才の時父の仕事の関係で一家は、海のそばにある町ル・アートルに引越し、そこで17才まで住んでいました。

モネは海が大好きだったので、毎日海辺を走り回って遊びました。もう一つ大好きだったのは絵を描くことで、中学生になったモネは学校の勉強にはちっとも興味を持たず、教科書の余白やノートに先生や町の有名な人物の似顔絵を漫画風に描くことに夢中になりました。あまりにも上手だったので、モネの描いた似顔絵はモネを可愛がっていた画材店の壁に飾られると次々に町の人たちが買ってきて、モネ少年は一躍ル・アートルの人気画家になり、2千フランもの貯金ができました。父はそのような息子の姿を必ずしも快く思っていないのですが、絵が好きで自分も絵を描いている伯母がモネに屋根裏のアトリエを貸して絵の勉強を応援していたので、父も強制的に絵を止めさせることはできませんでした。

モネが16才の時母が亡くなったので、モネは卒業を目前にして中学を退学してしまい、自ら画家を目指している画材店のオーナーのブーダンを師として本格的に絵の勉強を始めます。ブーダンはモネの才能を認め、日の当たっている屋外での写生を奨めます。当時多くの画家はアトリエの中だけでの制作をしていたのです。モネはブーダンが屋外でキャンバスにいきなり絵を描くのを見て「突然目の前から霧が晴れるような感動を覚えた。」と言っています。モネは初めての屋外写生で、明るく降り注ぐ魔法のような光と、その光を受けてきらきら輝く風景を見て、「なんて美しい光だ! そうだ、この光を描ける画家になろう。」と決意します。この方針は、86才で亡くなるまで揺らぐ

ことなく貫かれることになります。

ある意味で、モネの最大の師は、美術の歴史に残ることなく人生を終えたブーダンだったと言えるかも知れません。ブーダンによって目を開かされたモネは、パリに出て本格的に絵を学びたいと思うようになり、父にそのことを話すと、父は大変困惑しました。父には息子が画家になるために必要な資金を出すだけの経済的な余裕がなかったからです。父はル・アール市からの奨学金を当てにして、モネが一時的にパリに行ってサロン（官展）を見てくることだけは許してくれました。

モネが意気揚々とパリに向かったのは、18才の時でした。奨学金は結局は出なかったのですが、モネにはブーダンが売ってくれたマンガ（カリカチュア）の売り上げ2千フランがポケットにあったし、何通かのブーダンの紹介状もあったので、「行ってしまえば何とかなるだろう」という安心感がありました。

パリでの学習

当時のパリはナポレオン三世の帝政のもと、近代都市へと急激に変貌を遂げている最中でした。花の都パリで、モネはブーダンの紹介状を手に先輩画家たちを訪ねては助言を仰ぎました。先輩画家たちは異口同音にデッサンの基礎を学ぶことと、ルーブル美術館での名画の模写をしきりに勧めました。

モネが楽しみにしていたフランス芸術アカデミー主催のサロン（官展）へも出掛けました。画家として身を立てるためには、サロンへの入選が一番の近道だったからです。しかし、当時サロンを支配していたのは、古代の神話や聖書の物語を題材とした絵画で、モネが目指す風景画はごく僅かしか展示されていませんでした。

モネが20才の時、アカデミーが介入しない現代絵画の展覧会を見て、ロマン主義のドラクロワ、バルビゾン派のミレー、リアリズムのクールベ等の作品に関心を引かれ、自らがどんな画家になるべきかを確認していきます。そ

して市立の画塾アカデミー・シュイスに入学します。

しかし、間もなくモネのもとに兵役の知らせが届きます。友人たちからアフリカの光の美しさを聞いていたモネは、アフリカを志願して騎兵としてアルジェリアに向かいその景色に感動しますが、翌年にはチフスに罹り、治療のために帰国します。父は兵役免除のお金を用意してくれましたが、それには条件がついていました。それはアカデミーの正式会員である教授について絵を学ぶということでした。田舎にいる父からみれば、国が管理するアカデミーこそが、画家への正道であると思うのは当然であり、モネも敢えて父と芸術論を闘わすのは避けました。そして国立美術学校の教授でもあるスイス人のグレールのアトリエに登録します。モネはグレール先生を尊敬してはいませんが、「生徒たちにはそれぞれ独自のスタイルを追及させる」という自由な雰囲気^{ただよ}がアトリエに漂っていたからです。そこでモネはほぼ同年輩のバジール、シスレー、ルノワール等と一緒に互いに刺激し合う間柄となります。

仲間がモネにつけたあだ名は「ダンディー」というものでした。モネは文無しのくせに洒落たカフスの付いたシャツを着ていたからです。モネはリーダー格として仲間を戸外の写生に誘い、フォンテンブローの森やノルマンディー地方へしばしば出掛けました。そして24才の時ノルマンディー地方の風景を描いたモネの作品2点がサロンに初入選を果たしました。

モネを巡る二人の女性

モネが25才の頃モデルだったカミーユと知り合い、彼女をモデルにモネは多くの作品を描いています。いつしか二人は画家とモデル以上の関係になって行き、長男が誕生しますが、父の猛烈な反対に合い、正式に結婚できたのは長男誕生から3年も経ってからのことでした。モネはサロン入選で自信をつけ、頻繁にスケッチ旅行に出掛けていたため、ゆっくり家に腰を落ち着けて新婚生活を楽しむということはありませんでした。カミーユにとっては自分

がモデルとして献身的にモネに協力していた頃が一番幸せだったと思われる。彼女は28才の頃から病を患うようになり、32才で次男を出産するのと引き換えにこの世を去ってしまいます。

彼女の死をモネと共に看取ったのは、アリス・オシュデ夫人でした。アリスはエルネスト・オシュデというパリで百貨店を営んでいた富豪でモネのパトロンだった人の妻で、6人もの子持ちの母でした。モネはオシュデ家と家族ぐるみのお付き合いをしていたのですが、その百貨店が破産してしまい、モネはそれまでの恩義もあったので、自分も財政的に苦しかったにも拘らず、オシュデ一家8人を呼び寄せたのでした。誰が見ても無謀と思える行動に出たのは、モネのアリスに対する愛情があったといわれています。それに気付いたのかアリスの夫は人知れずモネの元を去って行ってしまいます。

アリスとモネは一時別れ話もありましたが、1911年にエルネストが死去するのを待って正式に結婚します。その時モネは51才で、カミーユの死後12年もアリスは自分の宗教上の理由から籍を入れずにモネとの同棲生活を送り、その後20年間（モネ71才）アリスが死去するまで苦しいながらも平和な生活が続きます。その間にモネはアリスを連れてロンドンやヴェネツィアなどに観光とスケッチを兼ねて訪れています。

モネはマネを慕って画家を志したので、若い頃はカミーユをモデルとして盛んに人物画を描いていましたが、次第に風景画を中心とするようになったこともあって、2度目の妻であるアリスをモデルにした絵は殆ど描いていません。アリスとの年齢差は分かりませんが、6人の子持ちだったのですから多分アリスの方がかなり年上だったのではないのでしょうか。モネはモデルが必要な時は、アリスの娘たちを使っています。

いずれにしても、カミーユが生んだ自分の息子2人と、アリス及びその連れ子6人、それにモネ自身を入れて10人の家族が安定的に生活していくだけの収入を画家という職業で確保することは大変なことだったと思います。後に

モネの長男とアリスの次女が結婚します。

印象主義のスタート

以上でモネの女性関係の話は終わりとし、彼の画業の展開に話を戻します。モネが生涯の親友ルノワールと戸外のスケッチに行った時、キャンバスを並べ二人で絵の具を分け合って制作していたという困窮時代のエピソードも残っています。金持ちの友人バジールにしばしば借金をしますが、バジールは間もなく普仏戦争で戦死してしまいます。いよいよ金に困ったモネを救ったのは画商のポール・デュラン・リュエルでした。サロンなどでモネの能力を高く評価していたリュエルは、以降モネの絶大なる支援者となってくれます。

普仏戦争に敗れてフランスは大不況になり、リュエル等パトロンたちの作品の買取が減ったばかりか、作品の価格も下落していきました。ちょうどその頃、モネ、ルノワール、シスレー、ピサロ等の新進作家たちの間で、サロンに頼らない独自の展覧会を開こうという企画が持ち上がり、全国に呼びかけると、サロンのあり方に不満を持つ多くの作家の賛同を得られ、165点の作品が集まりました。第一回の展覧会は写真家ナダールのアトリエで開催され、3千5百人というサロンの百分の1程度の入場者でしたが、世間には賛否両論の議論を巻き起こしました。

ある新聞でモネの出品作品「印象・日の出」というタイトルに由来して「印象主義の画家たち」と侮蔑を込めて酷評されたのが契機となって印象主義、印象派という新語が流行することになります。その不評を買ったモネの「印象・日の出」を8百フランという高額で購入してくれたのが、二度目の妻アリスの夫だったのです。

モネは10人家族の家計を支えていくために転々と安い借家を求めて引っ越すと同時に、やはりサロンで認められるしかないと考え、自ら中心となって立ち上げた印象主義のグループ展への出品を渋るようになります。そしてサロ

ンに出品した2点のうち1点が入選すると、経営難をやっと乗り切った画商のリュエルも再びモネの支援をする余裕が次第に出てきました。リュエルはモネが制作に行き詰った時はモネを励まし、気前良く資金を融通してくれていたのですが、株の投資に失敗し、またも経営難に陥ってしまいました。印象主義の画家たちの作品を中心に画商をしていたリュエルは、モネとルノワールがグループ展に出品することが、自分が再興するためには絶対に必要だとモネとルノワールに頼み込みます。二人の画家はそれまでの恩義もあり、友情も感じていたので、モネは37点もの作品を出品し、ルノワールもモネに歩調を合わせて25点を出品しました。グループ展での二人の作品は大変好評を博し、その勢いを買ってリュエルはモネの大回顧展を開いたのですが、それは思うように成功を収めることはできませんでした。

ジヴェルニーでの後半生

1883年、モネ43才の時、パリから80kmも離れたジヴェルニーという村に広大な敷地を持つ屋敷をリュエルの援助で借りることにします。モネは死ぬまでの43年もの長きにわたってそこに棲み続けることになります。

リュエルはロンドン、ニューヨーク等でもモネたち印象主義の画家たちの展覧会を開きますが、ロンドンでは1点も売れず、ニューヨークでは好評でかなり売れたのですが、運送費、会場費等のコストが嵩み、画家たちへの配分は僅かなものでした。それでモネはリュエルだけに頼ってでは生活できないとリュエルとの仲違なかつがいも覚悟の上で積極的に他の画商やグループの展覧会に出品することにします。その結果1889年には、リュエルのライバル画商であるブティの画廊でモネはロダンとの絵画と彫刻の二人展を開けるほどフランスでは有名な画家になっていきます。

モネは尊敬するマネが亡くなると、葬儀に駆けつけ、その時マネがサロンでスキャンダルを巻き起こした娼婦しょうふをモデルとした「オランピア」という裸婦

の絵を、アメリカ人が買おうとしていることを知ります。モネはマネの知人たちに呼びかけ2万フランの寄付を集め、マネ夫人からその絵を購入してフランス国家に寄贈しました。

その頃からモネは光の一瞬を一枚の絵に描き込むそれまでの画法に飽き足らず、刻々と変わっていく対象物の姿を捉えようと、同じ構図で色彩を変えていく連作を取り入れるようになります。その最初の作品が1891年にリュエルの画廊での個展に展示された15点の「積みわら」の連作です。その連作は高値ですぐに売れました。リュエルはモネの作品を扱う複数の画商の一人として付き合いは継続していたのです。連作は「ポプラ並木」、「ルーアン大聖堂」と続きます。

モネは経済的な余裕ができると共に、ジヴェルニーの自宅を買い取り、更に隣接地を買い増して大改造を行います。特にモネが凝ったのは「水の庭」で、池には日本風の太鼓橋たいこぼしが作られ、竹、柳、藤、睡蓮など日本の植物が植えられました。それらをモネに提供したのは、パリで画商をしていた林忠正でした。林は日本の浮世絵や陶磁器とうじきとモネの絵を交換していました。モネは日本に来ていませんが、作品の収集を通じて大変な日本贔屓びいきになっていました。

モネの大切な客は、まず「水の庭」に案内されるのが習慣となっていました。客の中には、ルノアール、シスレー、ピサロ、ロダン、セザンヌ、クレマンソー首相なども含まれていました。

モネの「睡蓮・水の風景の連作」もリュエル画廊で展示され、文学者のロマン・ロランも激賛しました。その展覧会は欧米各国を巡回し、特にアメリカでの評価は高まるばかりでした。

しかし私生活では不運が続きました。1910年には大洪水で大切な「水の庭」が水没し、翌年には愛するアリスに先立たれ、失意のどん底にあるモネの両眼は白内障で次第に視力を失っていきました。悲しみに追い討ちをかけるように長男が亡くなり、次々に友人たちも世を去っていき、モネは「人生

の終わりとはなんと酷いことか」と孤独感を募らせていきます。

最後の超大作

そんなモネに再び生きる力を与えたのはやはり絵でした。モネは「水の庭」を修復させると同時に、アトリエを増築し、左眼を失明しながらも微かに見える右眼だけを頼りに「睡蓮大装飾画」の制作に取り掛かります。モネはその絵が完成したら、2回首相になっているクレマンソーを通じて国家に寄贈したいと申し出ました。1918年のことです。しかしそれから絵の枚数が6倍の12枚にもなったことと、視力、体力の衰えから、8年経っても絵は完成せず、モネは自宅で86才の人生を終えました。その最後の大作となった「睡蓮大装飾画」はモネの希望通りパリのオランジェリー美術館の地下に用意された二つの楕円形の展示室に壁画のようにつなげて展示されています。

私も家内とフランス美術館巡りをした折、オランジェリー美術館でモネの遺作となった超大作に圧倒されました。それまでも日本の西洋美術館や川村記念美術館などで数点モネの睡蓮の絵は目にしていたのですが、「焦点がぼやけたもやもやした絵だな」と感じてあまり好きになれませんでした。しかし、目の不自由なモネが8年もかけて描いた一連の12枚の絵を前にして一気にモネのファンになってしまいました。そしてセーヌ川下流にあるルーアン市の美術館にモネの「ルーアン大聖堂」の連作が展示中であることを聞き、予定を変更して観に行きました。その絵は大聖堂を真正面から描いたものですが、大聖堂の前の道は狭く、道路からは大聖堂の全貌は見えません。モネは前の建物の3階を借りて大聖堂を描いていたと聞いて納得がきました。因みにルーアンといえばあのジャンヌ・ダルクが火炙りの刑にされた所です。

ここまでモネの生涯を簡単に紹介してきましたが、私は画家と画廊との関係について反省させられました。たいして絵のことが分かっていない段階で、若手の有望な作家を発掘、育成しようなどと大それた理想を掲げて無謀にも

家内と画廊を始めたのですが、見事に経営難に陥ってしまいました。モネ等印象主義作家のパトロンだったリュエルは莫大な資金と、広いネットワークを持ち、何度か経営難に陥りながらも不死鳥の如く立ち直り、これぞと思ったモネたちへの支援を生涯にわたって続けました。私たちは画廊の先輩として尊敬します。

9. 日本の昔話を文学にまで高めた 小泉 八雲

小泉八雲（ラフカディオ・ハーン）の記念館が、島根県の松江にあり、数年前に山陰地方を家内と旅行した折に立ち寄りました。私は文明開化の時期に日本に帰化した西洋の文学者位しか知らなかったのですが、小泉節子という日本人の奥さんが献身的に日本の民話集めに協力したということに興味を引かれて入ってみました。当時私は今ほど暇ではなく、皆さんに紹介する程の情報も得ずに出て来てしまったのですが、最近ちくま文庫の「妖怪・妖精譚」（小泉八雲コレクション・池田雅之訳）を読んで、大変面白かったので、小泉八雲について簡単にまとめてみました。

彼は1850年にギリシャで生まれ母はギリシャ人でしたが、父はアイルランドの陸軍軍医でした。しかし両親はハーンが5才の時離婚し、ハーンは親戚に預けられ、イギリスに行きます。そこでカトリックの学校に入れられますが、友達と遊んでいる時、誤って縄の先が左眼に当たり失明してしまいます。残った右眼も極端な近視だったので文学者として生きるには、大きなハンディキャップを背負ったことになります。

19才の時単身アメリカに渡り、行商、電報配達、ホテルのボーイなどのアルバイトをしながらどん底生活を経験しますが、文学者になりたいという夢は捨て切れず、図書館に行って読書し、文章を書く訓練は続けていました。そしてその後各地の

第2部 本書で取り上げた世界の偉人たちの生きざま

新聞社を転々としながら漫画を描いたり、レポートを書いたりして小金を貯めては、小説を自費出版したり、東洋関係の古書を買集めたりしていました。また友人と料理店を始めたりしましたが、友人にお金を持ち逃げされて、一月足らずでつぶれてしまったこともありました。

ハーンが日本に来たのは40才の時、最初の仕事はアメリカでの博覧会で知り合った文部省官僚の紹介による松江尋常中学校と松江師範学校の英語教師の仕事でした。ハーンは直ぐに松江の日本式生活が大変気に入りました。松江の人々もハーンが地域の人々に尊大な態度をとらず、また人種的、宗教的偏見から分け隔てすることなく接するので皆好意を持っていました。そしてその年のうちに紹介者があって節子夫人と結婚しました。

しかしながら松江での生活は僅か1年でした。温暖なアメリカ南部に長く居たハーンには、松江の冬はあまりにも厳し過ぎました。ハーンは身体と眼を守るためにやむなく熊本第5高等中学校に転職しました。熊本在任中、休暇を利用して九州、四国、中国地方を中心に夫人を伴って旅をし、見聞を広めると同時に日本の民話を収集して歩きました。ハーンは九州の土地柄が粗野で殺伐としているように感じ、44才の時に神戸の新聞社に転職しますが、神戸の鼻持ちならない欧米文明模倣に嫌気がさし、1年で辞めてしまい、首都東京へ移住します。

それまでに日本の文化について英文の優れた論文を米英で出版し、それが大変好評だったので、45才の時東京帝国大学文学部英文科講師として招かれます。と同時に帰化願いが通り、小泉八雲としてやっと腰を落ち着けて文学者としての活動を開始します。

節子夫人によると八雲は「ろくろ首」、「耳なし芳一」、「牡丹燈籠」などの怪談話や「浦島太郎」などの民話が特に好きだったようで、物語のあらすじを聞いた後、英文でそれらを文学作品になるまで自分で精練し、米英で次々に出版していきました。

東大には、八雲が心臓発作で54才で急死する前年まで在職しており、8年余

り充実した文筆活動を続けることができたのですが、終わり方は八雲にとって気分の良いものではありませんでした。八雲にとっては全くの寝耳に水で、文学部長からの一通の解任辞令だけでした。八雲はその礼を失した処遇に怒り心頭でしたが、学生達の留任運動も効果なく押し切られました。ちなみに八雲の後任は、英国留学から帰国したばかりの夏目漱石だったというのも皮肉な結末でした。

この後早稲田大学学長の招きに応じ何回か出講し、和服の先生が多いといっ
て校風は気に入ったのですが、残念ながら間もなく亡くなりました。

訳者の池田雅之氏によれば「八雲は日本の古ぼけて埋もれてしまった荒唐無稽な伝説や仏教説話から、うずたかい埃を払い落とし、その原石ともいべき鉞脈を探り当て、磨き上げ、そこに新たな言葉の生命を吹き込んだ。八雲は根っからの語り部といえる。」ということになります。

10. 世界遺産を生んだ建築家 アントニ・ガウディ

少年期と時代的背景

アントニ・ガウディは1852年にスペインのカタロニア州レウスに生まれました。父方も母方も4世代にわたって銅細工師の仕事についていたことが分かっており、この家系がガウディの建築家としての経歴に大きな影響を与えたといわれます。両家ともタラゴナ平野で収穫されるブドウからアルコールを蒸留する銅の器を製作していました。その銅器の蛇のような螺旋形態や奇妙に歪んだ形態は、ガウディの建築における三次元の空間的想像力と特異な発想力を鍛えたと自ら認めています。それは一般の建築を学ぶ学生が幾何学や遠近法の学習を通して学ぶものですが、ガウディはそれを神様からの贈り物として会得していったのです。

ガウディは5人兄弟の末っ子でしたが、父と長女以外は彼がバルセロナ建築学校を卒業する前に亡くなっています。残されたガウディも病弱でシャイな少年でした。幼くしてリューマチを患い、療養のためにしばしば隣町のリウドウムの農園で過ごしました。

ガウディの生涯を語るには、彼が73年の生涯の殆どを過ごしたバルセロナを中心とするカタルニア地方の状況についてまず知って頂く必要があります。最近テレビ等でカタルニア州は独立について住民投票を強行し、結果は独立支持派が多数を占めたという報道がありました。この投票結果には法的強制力こそありませんが、「住民の多くは中世のカタロニア・アラゴン帝国の栄光の時代への回帰を希求している」ということをスペイン政府はもとより世界に示したのでした。

ガウディの少年期は、まさにイギリスに遅れること半世紀でバルセロナを中心とした産業革命が起こり、鉄道の敷設、繊維産業への蒸気機関による機械化の導入、他のヨーロッパ諸国との貿易の拡大等により、人口の急激な増加がみられました。そのような状況を背景として、バルセロナの都市の拡張と改修のための大胆な実施計画が策定されます。市は技師のイルデフォンス・セルダーの案を採用し、中世期の市壁および18世紀の要塞の撤去と、旧市街を取り巻くような新しい新市街の建設に取り掛かります。これはバルセロナをスペインだけでなく、世界に通用する都市にしたいという住民の強い支持があったればこそできた大規模な都市改造でした。

この都市改造に駆り出されたのは、まぎれもなく建築家であり、建築工匠でした。この大改造を見通していた地域の産業資本家、実業家たちは、1817年にバルセロナの商工会議所内に美術クラスを創設し、建築家や建築工匠さらにデザイナー等の育成に着手していました。それが後にガウディも通うことになるバルセロナ建築大学へと発展していくことになります。

1888年にはバルセロナで万国博覧会が開催され、バルセロナは地方都市

から世界的なコスモポリタンへと^{へんぼう}変貌していきます。それにつれてカタロニア・ナショナリズムが高揚し、スペイン語とは別のカタロニア語の普及と定着、カタロニア独自の文化芸術の保存と発展に地域住民はこぞって努めました。カタロニアの上層階級の人々は、まるで中世の王侯貴族のように、彼等が後援する建築家たちに依頼して、実際に彼等が社会的に占めている地位よりもはるかに上の地位を^{しょうちよう}象徴するような施設（教会や教育・慈善施設、公園等の公共施設）を造らせました。上層階級の人々は、かなりの背伸びをしていたのです。

以上のような背景は建築家にとっては恵まれた環境であったといえるでしょう。ガウディがカタロニアにどっかり腰を据えて制作に励んだのも、グエルやパトリヨといったクライアント（作品の発注者）の大きな支援があったからといえるでしょう。

建築士称号の取得

ガウディはレウスからバルセロナに居を移し、21才の時バルセロナ建築高等技術学校（後に大学になる）に入学します。学業成績は特に秀でていたという記録はなく、むしろしばしば授業をさぼり度々再試験を受けて不足する単位を取得するといった状況だったようです。ガウディは後年「私は出来の悪い学生だったのではなく、ただ私に合った教授がいなかっただけだ。」と述べており、当時の型通りの教育には反発を感じていたようです。

ガウディは生活費を稼ぐために学生ながら、いくつかの建築事務所を掛け持ちしてアルバイトに精を出す一方、暇さえあれば図書館にこもってひたすら独学に励みました。古代エジプト、ギリシャからビザンティン、イスラム、ゴシックに至るまで、様々な建築写真を通じて先人の知恵を学んでいきました。特に古代ギリシャ建築からの影響が大きかったとみえ、卒業設計で作成した大学の講堂の設計図の壁面には背景にアテネのパルテノン神殿のような建物が描かれ、その前に到着したばかりの2人の使者と馬とそれを取り囲む群衆が

克明に描かれています。そこから彼の絵画の腕前が相当なものであることが分ると同時に、細かいところにまで気配りしないではられない彼の性格が読み取れるといわれています。

26才で建築大学を卒業し、晴れて建築家の称号を手に入れたガウディですが、一区切りついたと思ったのか酒と美食を好み、一分の隙もない服装に身を包んで芝居や乗馬を楽しむという快楽的な生活を送るようになります。一方でカタルーニャ文化の復興を標榜する「カタルーニャ科学探訪協会」のメンバーになり、同地方はもとよりマヨルカ島やフランス南部に足を延ばしてカタルーニャの古い建築を調査、研究し、同協会のメンバーである各界の知識人とも親交を深めました。

順風満帆の新進建築家

快楽的な生活を送ったとはいえ、それは次なる飛躍の準備期間でもありました。皮手袋の店主にパリ万博に出品するためのショーケースを依頼され、総ガラス張りのモダンなデザインが評判となりました。その実物を見たバルセロナの繊維業を営む実業家エウセビオ・グエルがガウディの才能を認めて、自らガウディを訪問します。これが、ガウディの生涯における最大のクライアントとの初の出会いとなります。

31才の時、グエルの紹介でタイル商人のカサ・ビセンス邸の設計に取り掛かりますが、ここではまだガウディらしい曲線は見られません。この年にガウディは幸運にもサグラダ・ファミリア聖堂の二代目の主任建築家に推されました。初代がクライアントと対立して辞任したからですが、殆ど実績のないガウディが選ばれたのには、実力者グエルの推薦も効いたのだと思われます。

32才から34才にかけては、グエルからの依頼で別邸の広大な庭の改修と本邸であるグエル館の建築を手掛けました。特にグエル館はパトロンの期待に応えるべくガウディが全力を注いだ見事な豪邸で、世界遺産に登録されて

います。1888年、ガウディ 36才の時バルセロナ万博が開催され、ガウディ自身もパビリオンのデザインを手掛けました。また万博がカタルーニャにおける近代芸術運動の出発点となりました。ガウディはその先頭を走る者として、サグラダ・ファミリア聖堂の中に自らの仕事場を設け、意気込みを示しました。

ガウディらしさが爆発する中年期

ガウディが40才から60才に至る中年期は尖塔や曲線、カラフルなタイルの多用といったいわゆるガウディらしさが発揮された最盛期でした。最初の集合住宅を完成させ、バルセロナ市から年間最優秀賞を受賞したのを初めとして、コロニア・グエル教会地下聖堂とグエル経営の繊維工場と労働者の宿舎、市民や観光客にディズニーランド並みの人気を博しているグエル公園、ガウディの最高傑作といわれる直線を殆ど使わない溶けるような建築物カサ・パトリヨ等をバルセロナ市内に次々に完成させていきます。

それとともにガウディの名声は国外にも知れ渡り、フランシスコ会アフリカ本部からの依頼で、多くの尖塔を持つ教会建築や、高さ300メートルにも及ぶニューヨークの尖塔型のホテルの先鋭的な設計などを手掛けています。いずれも財政的理由等から、実現しませんでした。建築や造園には全くの素人である私たちからみてもガウディのデザインは、芸術的ではあっても、それを実現するのにはいかにもお金がかかりそうに見えます。

ガウディは自然の山並みや動・植物をデザインのヒントにしていたといわれますが、それは何事も規格化し、効率を求める産業革命以来の世の中の趨勢すうせいには逆行するものでした。ガウディにはコスト意識というものが殆どなかったものと思われれます。それはガウディの最大のパトロンだったグエルの秘書が、「いくら私が財布にお金を満たしても、ガウディがそれを空っぽにしてしまう」とこぼしていたというエピソードにも表れています。

ここまで読まれた読者の皆さんは、偉大な芸術家には珍しく女性の話が全

く出てこないことに気付かれたことと思います。そうなんです。どういう理由か入手できる伝記類では分かりませんが、彼は生涯独身を貫きました。ガウディにとっては、彼の作品こそが恋人であったのかも知れません。

サグラダ・ファミリア聖堂に全てを捧げた老年期

62才の時、友人でもあり、有能な助手でもあったベレンゲールが死去します。「私は右腕を失ってしまった」と嘆いたガウディは、以後他の仕事からは手を引き、サグラダ・ファミリア聖堂の建設に没頭します。そのためにグエル公園内にあった自宅を引き払い、サグラダ・ファミリア聖堂内の仕事場に住まいを移します。

ガウディが引継ぐ前のサグラダ・ファミリア聖堂の設計は、ヨーロッパの大都市によくみられる普通のネオ・ゴシック様式でしたが、ガウディによって全く異なる現在のような形に作り変えられていきました。

ガウディはとりたてて熱心なキリスト教信者ではありませんでしたが、教会建築を研究するうちにカソリックにのめり込んでいきます。1894年にはキリストの故事にちなんで断食を行い、死に瀕する経験もしています。聖堂建設こそが自分の天命であると悟った後は、社交も絶ち禁欲的で清貧な生活に徹し、サグラダ・ファミリア聖堂の建設のために、自ら住民に寄付を募って歩き献身的に動き回りました。

サグラダ・ファミリア聖堂の4本の塔のうち、最初に聖バルナバの塔が完成しますが、これは、ガウディが生前に完成した唯一の鐘塔となります。1926年6月7日、サグラダ・ファミリア聖堂から徒歩でミサへ向かう途中、グラン・ピア通りの交差点近くで、路面電車にはねられ、それが原因でガウディは73年の人生を閉じます。事故を起こした時まるで乞食のような服装をしていたので、誰もそれがガウディだと気付きませんでした。葬儀には1.5キロにも及ぶ列が出来たといわれます。遺体はローマ教皇庁の特別な許可によってサグ

ラダ・ファミリアの地下聖堂に埋葬されています。

サグラダ・ファミリア聖堂の建設はガウディなき後も継続されていますが、1934年のスペイン内戦のため地下聖堂やガウディの仕事場が破壊され、図面や模型など多くの貴重な資料が失われました。そういう状況の中で、後を継いだ建築家たちがなるべくガウディの設計思想を生かそうと、バルセロナのシンボルとして彼の死後も100年近く建築が続けられているということは、驚くべきことです。その石工いしくの中には日本人も含まれています。

私も家内とバルセロナ聖堂に行った時、一人の彫刻家が脚立に登って石像にのみをふるっていました。いかにも絵になる情景だったので写真に撮らせてもらい、アートサロンの写真展に出展しました。鐘塔のてっぺんからのバルセロナの景色は空、海、港、丘陵、旧・新市街と見渡せて素晴らしいパノラマでした。その後、ガウディがよく行って、発想の素にしたという近郊のモンセラット修道院に行くと、そこから見える山並みの異様な姿は、まさにガウディの世界でした。ちなみにサグラダ・ファミリア聖堂は一本の巨大な樹木をモデルとして構想されたものと言われています。

ガウディは勿論偉大な建築家ですが、最初に述べたように彼が生きた時代が、彼のような異色の建築家を求めていたという背景を抜きにガウディの生涯を語ることはできないと私は思います。

11. 100年先を読み込んで多目的な政策立案をした 後藤 新平

後藤新平といえば、関東大震災後の大胆な復興計画を立案した政治家ということ位しか知りませんでした。大人向けの伝記としては、日本人で一番多く書かれていると知り調べてみて納得がいきました。

2011年に東日本大震災があり、自然の猛威と原発事故の恐ろしさを体験し、それに続いて異常気象による洪水や土石流といった災害の頻発に、日本だけでなく世界はどうなってしまうのだろうという不安を多くの人が抱いていると思います。災害だけでなく人口問題、経済問題、環境問題等人為的な諸問題も絡まってまさに長期的視点から総合的な対策が緊急に必要とされる状態になっています。こんな情勢の時こそ医者出身の政治家後藤新平が世界のリーダーだったら、どんな判断をし、どんな処方をしてくれるだろうと期待するほど、彼は偉大な政治家でした。

医師としての人生のスタート

後藤新平は1857年、江戸時代の末期に水沢藩（現在の岩手県）の下級武士の子として生まれ、藩校を出た後藤は12才の時、明治維新で廃藩置県によって設けられた県庁に住み込みの給仕として就職します。そこで阿川という上司に将来性がある子として認められ、阿川が福島県庁に転勤になった後、「医学校を作った、学費を出してやるから来て学べ。」という手紙を後藤は受け取り、二度とないチャンスとそれに応じます。そして須賀川医学校に入学し、寄宿舎に入って猛烈に勉強します。夜眠ってしまわないように、天井から吊るした帯に体を縛って机上の本を読んだといひます。土地の人々は後藤を「下駄はちんばで着物はぼろだが心は錦にしきの書生さん」とひやかしました。

19才で卒業すると、阿川が愛知県に転勤になっていたので給料は安いけれど愛知県病院に就職し、翌年開業医の資格も取ります。この年に西南の役が起こり、大阪に陸軍病院が出来たので、一時そこに手伝いに行き腕を磨いて再び愛知県病院に戻り、24才の若さで病院長兼医学校校長ばってきに抜擢されます。後藤は若く見られたくないので、かなり大袈裟おおげさな髭ひげを生やします。

翌年自由党の板垣退助が岐阜に演説に来て、「暴漢に襲われて負傷を負ったからすぐ来てくれ」という電報に、周囲の者は自由党員は危険分子である

から院長が行くのはやめた方が良くと止めたにも拘らず、後藤は「人命を救うのが医者の仕事だ」と言って聞かず、適切な処置をして帰って行きました。後で板垣は「医者にしておくのはもったいない男だ、政治家にすれば大物になる。」と言ったそうです。

後藤は無類の建白書好きで、生涯様々なポジションに就きますが、それぞれの節目で世の中のあるべき理想像を描いて建白書に纏め、上司に提出してその実行を迫りました。愛知県病院では、自分が医師でありながら、患者数を減らすべく予防医学の重要性を説き、自分の権限で出来る範囲の努力をしています。

役人時代

後藤が26才の時、内務省衛生局が出来ると、「自分は個々の病人を治すより、国家の病気を治したい。」と収入が大幅に減るのも厭わず、行政官に転じます。その年に恩人の娘で美人の和子と結婚します。後藤は一行政官として建白書を出し続けますが、そのかたわら「国家衛生原理」という本を書き上げます。それは彼の行政官としての姿勢の基幹となるもので、公衆衛生の重要性に触れながらも、「国家も人体と同様一つの生命体とみるべきで、その心身の健全な発達と生活環境の改善を目指すべきであり、経済は国の栄養源である。」と主張し、既に一衛生局員の枠に入り切れないスケールの発想をしていることが分かります。

衛生局員になって7年目にして自費による2年間のドイツ留学を許され、既に引退していた鉄血宰相ビスマルクの社会政策、特に保険制度に感服し、それらを基に博士論文を書き上げました。また当時の医学の最先端であった細菌学について学んで帰りたいと、その第一人者であるコッホの研究所を訪れると、「同年輩で東大出のエリート北里柴三郎が留学生として来ており、その下で研究するのなら」というのがコッホの条件でした。それまで生い立ちの

違いから両者は反目し合っていたのですが後藤は折れて髭を剃り落とし北里の下で研究に励み、帰国後も北里の伝染病研究所設立に行政官（当時は衛生局長）として支援する間柄になりました。

後藤の人生は順風満帆という訳にはいきませんでした。36才の時、相馬子爵殺害事件で共犯という疑いを持たれ、1年間投獄されてしまいます。結局は無罪放免となり復職しますが、獄中で最初の晩から大鼾おおびきをかいて眠ったので、同牢どうろうの者から余程の大親分と思われたそうです。

誤解に基づく投獄とはいえ、世間の後藤に対する評価はそう簡単には回復しません。さてこれからどう生きたら良いだろうと思案していた頃、日清戦争が勝利に終わり、22万人の兵士が帰還することになり、コレラ等の感染症の水際みずぎわでの防止という緊急課題が発生し、陸軍次官の児島源太郎がその責任者になって、適切な人材を探していました。後藤は先輩に連れられて児島と面談した時、予算を問われ余裕をみて100万円と答えると、児島は「150万円出すから完璧に防止して欲しい」と後藤に言って全面的に任せると同時に、検疫拒否者が出ないように従軍していた宮様に最初に受けていただくよう根回しをしてくれました。後藤は意気に感じて寝る間も惜しんで働き、ついに全兵士の検疫を終わり、国内への感染症の広がりを完全に防止しました。

それで信頼を得た後藤は、2年ぶりに衛生局長に復帰しました。大事を成し遂げるには、大物実力者の後ろ盾が必要ということ学んだ後藤は児島の紹介で伊藤博文に何度か会い、保険制度、教育制度、救貧のための施療病院の設置、国家の身体検査に相当する統計局の設置などの広範囲な提案をしました。伊藤は賛意を示し、議会に提案しますが、「そんなことは単なる人気取りで、政府のやるべきことではない。」と悉く反対ことごとされてしまいます。

台湾の民生長官、満鉄総裁時代

後藤は衛生局長復帰後2年半して、児島総督の下で台湾の民生長官に任

ぜられます。日清戦争の結果日本の統治下となった台湾での最大の問題は阿片^{あへん}吸引の習慣でした。国論も政府も「直ちに禁止してしまえ」という意見でしたが、後藤は医学的見地（中毒患者治療の困難さ）からこれに反対し、既に中毒化している者には阿片を売るが、そこまでいっていない者には厳禁する代わりに、より害の少ない酒とタバコの販売店を増やすという漸減策を行いました。

第二の問題は、土匪^{どひ}と呼ばれるゲリラ的な盗賊の横行です。調査によりその多くは生活に困ってやむを得ず土匪に身を投じていることが分かったので、公共事業として幹線道路、縦貫鉄道、主要港湾を整備すると同時に砂糖^{きび}黍の生産と精糖工業の振興を図り、それらの労働力として土匪を使いました。それをも拒否する土匪に対しては最後の手段として武力を使って全滅させました。砂糖黍^{きび}生産については、滞米中の農学者、新渡戸^{にとべいなぞう}稲造を指導者として呼び寄せています。

その他に地方自治の強化、所有権の明確でなかった土地の地籍の整理、国勢調査の実施、軍から警察への大幅な権限委譲、台湾銀行、中央研究所の設立など、後藤が本国でやりたくても出来なかったことを児島の後押しもあって実現していきます。児島、後藤（後半は児島が日露戦争の参謀本部長となったために後藤一人）の台湾統治は9年に及びますが、後発の日本には植民地経営は出来ないと思っていた欧米諸国が日本の実力を見直すきっかけとなりました。

後藤が台湾統治に専念している間に日露戦争は勝利に終わり、日本は遼東半島の租借権と南満州鉄道及びそれに付属した炭鉱の経営権を得ます。それに伴い南満州鉄道会社という日本最大の企業が設立され、児島他元老たちの総意によってその初代総裁に後藤が推挙されます。児島は翌日、日露戦争で力を使い果たしたかのように死去してしまい、後藤は総裁を引き受けざるを得なくなります。49才の男盛りでした。

後藤は桂内閣の^{ていしん}逋信大臣として呼び戻されるまでの僅か2年の満鉄総裁でしたが、その間に台湾の経験を生かして様々な革新的事業に着手しています。例えば、まず資料がなければ計画を立てようがないと現在のシンク・タンクに当たる東亜経済調査局の設立、満鉄沿線の開発のための新しい都市計画、学校設立による文化振興、ロシア・清国との外交問題の改善など一鉄道会社の枠を遥かに超えた仕事を手掛けました。仕事半ばで逋信大臣を引き受けたのは、満鉄の管理権限を逋信省に移管することを桂総理が約束してくれたからです。

政治家として

逋信省はそれまであまり重要な役所ではなかったのですが、電話の普及、電気の各方面での使用の拡大等に対応するには科学的な発想の出来る後藤のような政治家が必要だったのです。半年後には鉄道院が創設され、後藤はその初代総裁をも兼務することになります。後に後藤は鉄道の生みの親と言われるようになりますが、鉄道の広軌化、サービスの向上のための職員養成所の設立、丹那トンネル等の建設、鉄道の電化などを進めたからです。

その後内務大臣や外務大臣を歴任し、総理も夢ではなかったのですが、派閥のボスというより、その都度広く人材を求めて適任者を活用し、自らが中心となって^{そっせんすいはん}率先垂範するというタイプだったので、敢えて総理の椅子を目指すということはありませんでした。

そんな後藤が53才の時、東京市議会が満場一致で東京市長に迎えたいと言って来ました。当時市政は乱脈を極め、汚職もはびこっていたので、後藤の^{せいれんけっぼく}清廉潔白な人柄と、発想力、実行力等からマス・コミも後押ししました。後藤は受け入れる代わりに給与の増額を要求しました。市側がそれを受け入れると、自分で所得税を払った後、全額を市に寄付することにしました。それを知った職員や市民の後藤への人気は一層高まり、東京市の改革に思い

切って辣腕らつわんを振るえる環境が整いました。

後藤は台湾以来の経験を生かして、100年先を思い描いて8億円の予算を必要とする東京近代化計画を新聞に発表しました。当時の国の年間予算が15億円でしたから、「また後藤のいつもの大風呂敷が始まった」といって国会はまともに相手をしてくれませんでした。新興の銀行家安田善次郎が後藤を見込んで資金援助を申し出ました。安田はその直後暗殺されてしまいますが、遺族がその遺志を継いで東京市に寄付をしてくれたので、その資金で(財)東京市政調査会を作り、アメリカからアドバイザーを呼んで、市政改革の立案に当たらせました。後藤は後は自分でなくても出来ると2年半で市長を辞任しますが、それは行き詰ったからではなく、日本にとってより重要な問題が発生したからです。

それは日ソ国交回復の問題であり、日本政府が次々と総理が変わり、もたついている間に、新しく出来たソヴィエト政府が日本と中国のどちらと先に交渉すべきか決めかねているという情報を得た後藤が、一民間人の自分であるからこそ出来ることだとして動いたのです。そしてソ連の極東全権のヨッフエが北満州でリュウマチに苦しんでいるということを知り、自費で日本での温泉治療を勧め、熱海で秘かに会談を重ねます。二人は古くからの友人でもあるかのように親しくなり、「これで良し」と後は外務省に任せることにしました。

ヨッフエが日本を去った年の9月1日に10万人もの死者を出した関東大震災が発生し、後藤は内務大臣兼帝都復興院総裁として山本総理のもとで再び国政に関与することになります。しかし皮肉なことに4ヵ月後皇太子(後の昭和天皇)狙撃事件いわゆる虎ノ門事件があり、その責任をとる形で山本内閣は総辞職することになってしまい、後藤の政治活動にも終止符が打たれます。後藤67才でした。最後の仕事となった帝都復興の仕事は計画作りが中心ですが、現在でも参考とすべきことが沢山含まれています。そのいくつかを紹介します。

- イ. 東京に1号～8号の環状線を計画しました。現在7・8号線が完成しています。大都市の道路網としては放射線状の道路と環状道路が理想的ですがパリを除きニューヨーク、ロンドンは碁盤目状で渋滞をより激しくしています。
- ロ. 新橋から三輪^{みのわ}までの幅44メートル、長さ16キロメートルの昭和通りは、最初100メートル道路として構想されたものですが、現在でも東京の最大・最強の道路として利用されています。
- ハ. 東京の隅田公園、横浜の山下公園等数十箇所の都市公園を防災を兼ねた憩いの空間として計画しました。
- ニ. 隅田川に架かる橋が木造だったため焼け落ちて多くの犠牲者を出したことから、全てを鉄製の橋とし、デザインを公募して隅田川を橋の美術館にしました。
- ホ. 被災地をそのまま再建するのではなく、都市計画の区画整理の手法を活用し、土地の価値を上げる代わりに道路や公園等の公共用地を供出させるという画期的な方法を導入しました。

これらの構想は東京市長時代にほぼできていたもので、帝都復興院総裁として後藤が驚くほどの早さで復興計画を議会に提出できたのもそのためです。

晩年

後藤は政治の表舞台からは一步退きますが、晩年も拓殖大学学長、ボーイスカウト初代総裁、性病予防協会初代総裁、東京放送局（現在のNHK）初代総裁（ラジオ電波に乗った最初の声の後藤の開局のスピーチ）としての業務をこなす一方、日口協会会長としてモスクワを訪れ、ソ連をあげての歓迎を受けスターリンとも面談し民間外交の範を示しました。

また普通選挙を前にして、これまでの私欲に基づく政治ではだめだと政治の倫理化を国民運動として展開するため、全国各地での講演を200回近く行

いました。その途中で3回目の脳出血を起こし、1929年71才で亡くなりました。遺族には大きな借金が残っていたといわれます。後藤の最後の言葉は、「よく聞け、金を残して死ぬのは下だ。仕事を残して死ぬのは中だ。人を残して死ぬのは上だ。」というものでした。

後藤は公共の仕事にも、私財を投げ打って当てていたのです。東京市長を辞任した時の退職金も全額ボーイスカウトに寄付していたのです。

読売新聞や野球のジャイアンツのオーナーとなった正力松太郎が警視庁警察部長の時、虎の門事件の責任をとって辞職した後、尊敬する後藤の家を訪れて、巨額の借金を願い出た時、後藤は一目でこの男は見込みがあると評価し、正力には知らせずに自宅を担保にして銀行から借金をして快く正力に貸し与えました。

彼の信念は「人のお世話にならぬよう、人のお世話をするよう、そして報いを求めぬよう」という自治の精神で、この根本精神が生涯を貫いていました。私はどうに彼の一生以上生きてしまいましたが、彼の生きざまを知るにつけ、背筋がピンと伸びるような気がしました。彼の生きざまは、まさに第一級の芸術だと思います。

12. 日本の柔道・体育の父 嘉納 治五郎

私は柔道を全く経験していませんが、唯一の日本発祥のオリンピック種目として、テレビではメダルを期待しながらよく観戦しています。そして古来からの武術としての柔術から、スポーツとしての柔道を創立したのが嘉納治五郎という人だという位のことには知っていたのですが、調べてみると国際オリンピック委員会のアジア人最初の委員となり、西欧風の体育の授業を日本に

導入した明治の偉人だということが分かり、是非ここで取り上げたいと思いました。

政治学・哲学・美学を専攻

治五郎は1860年に現在の神戸市の郊外にある造り酒屋の三男として生まれました。父は養子で祖父の遺言で酒屋の後継ぎとなりますが、自分は世の為、人の為にもっと大きなことをやりたいと、母に家業をまかせ、単身家を出て、関西と江戸を結ぶ廻船業や幕府の依頼を受けて砲台を築く等の土木建築業を興すなど、わが国の産業の基礎固めに貢献しました。一方母は父の気持ちを理解し、灘の酒造りに専念し数十人もの従業員を持つ大きな酒蔵の経営と子供たちの教育を一手に引き受けました。父は勝海舟と親交を得て名字帯刀を許され、明治新政府になってからは役人となって通商、土木、造船、皇居の造営などに携わりました。

治五郎の家には大きな庭があり、近所の子供たちが沢山遊びに来ましたが、母は身分や貧富などで決して差別せず、お菓子をあげる場合でも、身内の子を最後にするなど平等の精神を植えつけました。治五郎は幼少の頃身体が弱かったけれど、敏捷で小刀で魚を刺して獲るのが得意でした。ある時遊び仲間より沢山の魚を獲って得意になって帰ってくると、母は「男の子が自慢すべきことではない」と言ってたしなめました。治五郎が恵まれた家庭に生まれながらも、小生意気な人間にならなかったのは、そのような母の訓育によると思われる。

治五郎は村の塾では限界があると11才で父を頼って上京し、より博く深く勉強するためにまず生方経堂うぶかたきやうどうが主宰する塾に入ってめきめき才能を開花させ、文明開化の波に乗り遅れぬようにと英語塾にも通い出します。そして後に東京大学となる開成学校が設立されると、その一期生60数人に選ばれ、政治学を専攻します。全寮制の学校で治五郎は学業では群を抜いて優秀で

したが、小柄で喧嘩けんかはあまり強くなく、いじめの対象にされてしまいます。

負けん気の強い治五郎は仕返ししようとは思わないが、自分をもっと強くなっていじめた連中が二度と自分に手を出せないようになりたいと強く心に決め、かつて武士のたしなみとして剣術と共に盛んであった柔術を学ぶことにします。ところが戦も近代兵器が中心となり、東京に沢山あった柔術道場も殆どが潰れてしまい、師範が細々と接骨院を営んでいるという状況でした。やっと見つけた柔術の師範も、治五郎が東大の学生だと知ると、過去のものとなりつつある柔術を習うよりも、学業を生かして官吏になった方が良いとってなかなか受け入れてくれません。それでも治五郎は諦め切れず、東京中を歩き回って探し、やっと福田八之助てんしんしんようりゅうの天神真楊流の道場に入門することができ、必死で練習に励みました。

普通の人なら一つの流派きわを窮めればそれで満足してしまうのですが、探究心が強く頭の良い治五郎は、沢山ある柔術の諸流派の資料を集め、各技を取捨選択し、誰もが修得しやすいように理論化して統合しようと考えます。それまで各流派の柔術は秘技を多く含み、特定の門下生にしか伝授しないのが当たり前だったのですが、治五郎は柔術を身心鍛錬のための体育の一環としてより開かれたものにすべきではないかと考えていたのです。このあたりに、後に教育者としての生涯を送る治五郎の萌芽ほうがが既に見て取れます。

講道館柔道の創設

政治学の他に一年延長して哲学と美学を学んで東京大学を優秀な成績で卒業した治五郎は、人材を求める明治政府の求人はいとまず置いて、自ら開発した統合柔術を「柔道」と命名し、東京下谷の永昌寺の一角を借りて道場を開き講道館柔道としてその普及に努めます。しかし、入門者は少なく経営的に非常に苦しかったので、友人からの紹介もあり学習院の教師をし、ま

第2部 本書で取り上げた世界の偉人たちの生きざま

た内職として英書の^{ほんやく}翻訳に当たり、それらの稼ぎで講道館の赤字を埋めていました。当時治五郎は23才で、学習院の生徒は貴族である子爵、男爵等で、殆ど治五郎より年上だったといえます。そこで治五郎は政治学の講義を英語と日本語で行っていたというのですからを恐れ入ります。しかもこの後父に紹介された勝海舟の奨めもあって青少年のしつけ、道徳を主として教える全寮制の嘉納塾も開くようになり、講道館と合わせてまさに文武両道の教育の原形を確立します。

治五郎26才の時、警視庁が講道館柔道の評判を聞いて、全国から名人、達人と称される柔術家を十数名集めて講道館柔道の門下生と試合をさせたことがありました。他流試合を禁じていた治五郎としては素直に喜べなかったけれど、学士さんのお遊びと思われ、門下生の募集に苦労していた治五郎は渋々承諾し、腕の立つ者を選んで出場させました。すると何人かの引き分けはあったものの、講道館柔道の圧勝に終わり、新聞にも大きく報道され、それを契機として全国から門下生が殺到するようになります。その頃の講道館の四天王といわれた一人に西郷四郎という5尺位の小柄な人がいて「山嵐」という技で勇名を轟かせていましたが、彼をモデルとした小説「姿三四郎」（富田常雄作）がベストセラーになり、映画化されています。

私たちは柔道といえば、203連勝をし無敗のまま引退した山下泰裕氏^{やすひろ}から連想して、創始者の嘉納治五郎も大男だったと思いがちですが、写真を見ると当時の日本人の平均的な背格好だったようです。自らの強さを誇示するのではなく、既存の柔術を分離分解し、理論的に再構築し、心身ともに鍛える一種のスポーツとして新たに柔道を確立したところに彼の真の価値を見出すべきでしょう。理論的な考察の一例ですが、30cmほどの人形を関節が全て動かせるように特別に作ってもらい、それを使って1つずつの技を力学的に説明したり、新しい技を工夫したりしていたそうです。

警視庁の次に講道館柔道に着目したのが海軍で、兵学校が江田島に移っ

た時道場を開設するのに尽力したのが、後に日清戦争で戦死し、小学校唱歌にもなり軍神とあがめられた広瀬武夫（中佐）でした。広瀬の柔道への身の入れ方は尋常ではなく、治五郎も特に目をかけ、広瀬が戦死するまで文通を続けていました。

教育者としての活躍

治五郎の教育者としての一面を補筆して、この項を締めくくろうと思います。治五郎は生徒や教師たちからの信頼も厚く26才の若さで、学習院の院長に次ぐ教頭の地位に就き、やりがいを感じていたのですが、新しい院長として来た三浦中将と根本的に教育方針が異なり、ことごとに対立するようになります。治五郎は華族、士族、平民の区別なく機会均等とすべきと考えていましたが、三浦は学習院だけは何事にも華族優先という考えを譲らず、ついに治五郎を追い出す為に洋行を命じます。治五郎は8年近く学習院に奉職していたこととなりますが、これによって、天文学者や政治家あるいは宗教家になりたいという幼い頃からの夢を捨て、教育者としての生涯を全うするという決意を固めます。

洋行に先立ち、治五郎は7年間続いた弘文館という文学を教える私塾を閉鎖し、駒場農学校（現在の東大農学部）の講師も辞して、講道館と嘉納塾だけは門下生に託し、身軽になってヨーロッパに旅立ちました。この時治五郎は30才でした。フランス、ドイツを主に約1年間のヨーロッパ視察でしたが、治五郎はそれぞれの国の言葉で教育関係者や政治家を単独インタビューして回りました。下宿先の家族との会話でその国の言葉での会話が何とかできるようになると、あとは持ち前の度胸で有益な情報を得られそうな人々を訪問したのです。そしてキリスト教等の宗教と離れた独自の道德教育に自信を深めて帰国します。

帰国後は熊本の第五高等学校、東京の第一高等学校の校長を歴任し、

33才の時東京高等師範学校（後の東京教育大、今の筑波大）の校長を27年間も勤めます。その間に各校に柔道ばかりでなく、西歐式の体育も含めた体育科を設置すると同時に道徳教育を重視した指導を行いました。

1909年（49才）の時、フランス大使を通じクーベルタン男爵の要請で東洋初のIOC（国際オリンピック委員会）委員となり、1912年の第5回オリンピック・ストックホルム大会では陸上の選手2人を連れて日本初参加を実現させます。1938年にカイロで開催されたIOC総会では2年後の東京オリンピック開催の約束を取り付け（戦争のため中止）、帰路に着きますが、船中で急性肺炎のため78年の生涯を終えました。

13. アメリカの代表的素朴画家 グランマ・モーゼス

1987年に東京新宿の伊勢丹美術館で「グランマ・モーゼス展」が日本で初めて開催され、家内と観に行きました。グランマはグランド・マザーを縮小したお婆さんを意味する言葉で、アメリカでは知らない人がいない程有名な画家です。彼女の正式な名前はアンナ・メアリー・ロバートソン・モーゼス（1860～1961年）で、75才から絵を描き始め、101才で亡くなるまでに約1600点の作品を残しています。

伊勢丹の展覧会には油彩画60点余りが展示されており、ニューイングランド州の農村の古き良き時代の風景や日常生活がいかにも素人っぽいタッチで描かれており、素朴（ナイーフ、プリミティブ）派を代表する作家として紹介されていました。私は本格的に画廊を始める前で、まだコンサルタントとしてバリバリ仕事をしている時だったので、「癒される絵だな」とは思いつつもそれ程の感動もなく過ぎてしまいました。

ところが自分も79才になり、晩年を十分な生き甲斐を持って過ごしているだろうかと反省した時、ふとグランマ・モーゼスのことを思い出し、彼女の生涯を辿ってみる気になりました。

画家になるまで

彼女は日本でいえば江戸時代末期の1860年にニューヨーク州の貧しい農家の子として生まれました。小さい頃から家事を手伝わされ、12才の時には近所の大きな農家に生活費を稼ぐため住み込みのお手伝いに出されました。そして27才の時、同じ農場で働いていたモーゼスと結婚し、南のヴァージニア州に新居を構えて農業を続けます。子供は10人生まれましたが、そのうち5人は幼くして亡くなりました。彼女は少しでも家計の足しにとバターやポテトチップスを自家製し、販売しました。

夫の強い希望もあって家族は郷里に近いニューイングランド州に引っ越し、農業を続けていきましたが、彼女が67才の時夫が亡くなります。一方で子供たちはそれぞれ独立し、彼女は生涯で始めて少しずつ自分の時間を持つようになります。そしてまず始めたのが刺繡ししゅうで、次第に腕を上げて、作品を友人や家族へのプレゼントにするようになります。しかし、その頃から彼女は慢性のリューマチが発症し、指の関節痛に悩むようになり、彼女の刺繡の評判が広まって依頼が増えるのに応えていくことが苦痛になってきました。

失意のグランマ・モーゼスを見かねた娘たちが、刺繡より指への負担の少ない絵への転向を奨めました。モーゼスはそれまで殆ど絵を描いたことはなかったのですが、独学で絵を描き始めました。彼女はもともと絵を描くことが大好きで、子供の頃実家の壁や窓ガラスに遊び半分に描いた絵を父が「お前には絵の才能がある」と褒めてくれたことがあり、また孫のために描いた一枚の絵を夫が見て「誰が描いたのだ、良く描けている」と褒めてくれたことを思い出し、もしかすると自分には絵の才能があるかも知れないと毎日絵

筆をとるのが楽しみになっていきました。

最初は新聞や雑誌の挿絵^{さしえ}や写真を切り抜いてスクラップに貼り、それらを参考に絵を描いていたのですが、それでは自分が描きたいものが描けないと、自分が生活している村の風景や村人の生活を題材とする絵に重点を移していきます。今の言葉で言えば、よりリアリティを求めていたということでしょう。

彼女は少しでも小銭を稼ごうと、自家製のジャムと自分の絵を村で行われるカントリー・フェアに出品しました。ジャムの方は売れたのですが、絵の方はさっぱりでした。村人にとっては自分たちが見慣れた光景がただキャンパスに描かれているだけと映ったのでしょう。グランマ・モーゼスはそんなことは気にもせず、好きな絵を描き続けていました。そして近所のドラッグ・ストアに彼女の絵を継続的に飾ってもらえるようになりました。

一躍有名人に

彼女が78才の時、転機が訪れます。ルイス・カルドアというニューヨークの画商兼プロデューサーがドラッグ・ストアに飾られている彼女の絵に目を留め、10点全部買い取っていき、翌年にニューヨークの近代美術館で行われた「現代アメリカ無名作家展」にそのうちの3点を出品したのです。そして彼女が80才の時ニューヨークの画廊で彼女にとって初めての個展を開きました。それに対しヘラルド・トリビューン紙は「グリニッチ郊外に天才モーゼスお婆さん出現」ともてはやしました。これが契機となってニューヨークのデパート等でも彼女の個展をやってくれるまでになり、その1点がニューヨーク州賞を受賞し、彼女は絵の制作に一層励むようになります。普通多作になると絵の質が落ちるものですが、彼女の場合年齢に似合わず、まだ十分な成長の余地が残されていたと見え、次第に絵のレベルも向上していきました。

86才の時には、「グランマ・モーゼス——アメリカンプリミティヴ」という本を書いて出版し、彼女の名は全米に知れ渡りました。また89才の時には、

「女性のためのナショナル・プレス・クラブ賞」を時のアメリカ大統領トルーマンから直に手渡されました。彼女はアイゼンハワー元大統領のために一枚の大作を作成し、ケネディ元大統領とも親交がありました。彼女はアメリカの独立記念日をモチーフにした絵を大統領府に寄贈し、その絵は今でもホワイト・ハウスに飾ってあるそうです。農家のお婆さんが、働き続けていよいよ楽隠居という時から独学で始めた絵でアメリカはもとより世界的に有名になるなんてことは誰が想像したのでしょうか。まさにアメリカン・ドリームといっても良いでしょうが、いくつになっても夢を抱いてコツコツ努力を積み重ねていったからこそその夢が現実となったということを忘れてはならないでしょう。

彼女は自分の絵の価格がどんどん上がっていくことに啞然^{あぜん}としていましたが、自分の日常生活は昔のまま質素そのものでした。彼女はお金持ちになりたいからとか、有名な画家になりたいからとかいう目的で毎日絵を描いていた訳ではなく、ただ好きな絵を描くことによって楽しく幸せな老後を過ごしたいために絵を描いていたに過ぎません。結果として絵の評価が上がってしまったので、一番驚き、戸惑ったのは本人ではなかったのでしょうか。

素朴派の絵といえば、ベルギーのブリューゲル父子、フランスのアンリ・ルソー、日本の山下清、原田泰二などが思い浮かびます。共通なのは美術学校が教える伝統的な画法とは縁がなく、最も基本的な遠近法なども無視して自由に描いている点でしょう。

14. ^{おうねつ}黄熱病の研究に殉職した 野口 英世

エボラ出血熱が西アフリカを中心に猛威を振るっており、日本ではデング熱の患者が東京を中心に多発してニュースになっていますが、私はふと小学

校の頃学んだ野口英世のことを思い起こしました。野口英世は初めて日本人でノーベル賞を受賞した物理学の湯川博士よりはるか前に医学の分野で3回も候補になりながら、第一次世界大戦のために流れてしまったそうで、当時から世界的に評価されていたのだと知りました。野口英世は生存中から伝記が出版され、それを読んだ本人が「これは本当の自分ではない。欠点のない人間なんていないし、そうなりたいとも思わない。」と言って怒ったといわれます。ここでは出来るだけ本当の野口英世像を紹介したいと思います。

郷里会津時代

野口英世は1876年（明治9年）に福島県^{おきなしま}翁島村（現猪苗代町）の貧しい農家の長男として生まれました。本名は清作^{せいさく}といいますが、ここでは英世で通します。一年の大半が雪に埋まっている村です。会津藩は幕府側についたので、官軍に攻め込まれ、翁島村も焼かれそうになりますが、一人の少女が官軍の陣地に現れて「どうか罪のない普通の人の家を焼かないで」と必死に願い出たそうです。おかげで村は7軒焼かれただけで済みました。その少女こそ後に英世の母となるシカでした。

英世がまだ1才半の頃、シカが汁を作ろうといろりに掛けた大鍋に入れる野菜を取りに外に出た十数分間に、英世が一人で這い出しているろりに落ち大声で泣き出しました。シカが驚いて駆け付けてみると英世は左手を炭火の下の灰に突っ込んでいるではありませんか。急いで抱き起こしましたが、左手は大やけどをして握ったまま開きません。シカは自分が悪かったと一生自責の念にかられることになります。

シカは野口家を立て直そうと婿^{むこ}を迎えたのですが、この婿が役立たずで、酒やばくちに明け暮れる始末。田畑は借金のかたに取り上げられ、シカは病弱の母と働かない夫と二人の子供（英世と姉）を女手一つで養っていかなければならない立場にありました。昼は他人の田畑を耕し、夕方は猪苗代湖

でエビを獲り、朝早くそれを売りに行き、暇が出来れば他所よその家の使い走りもするという状況でした。ですから、英世のやけどはシカだけの責任とは言えないのですが、それ以後シカは外に出る時は必ず英世をおぶって行くようにしました。

やがて英世は小学校に行くようになるのですが、常に左手を袂たもとに隠かくしているのを級友たちに見とがめられ、無理やりに引き出されてしまいます。すると左手の指は開かず天秤棒のように見えたので、「てんぼう、てんぼう」と言って冷やかされました。今でいう「いじめ」に遭ったのです。英世は学校に行くのが嫌いやになり、母に黙って近くの林に行って時間をつぶし、何気ない顔をして家に帰っていたのですが、母の眼はごまかせません。母に問い詰められ、実情を話すと、母は「左手のやけどは母さんの責任でお前が悪いのではない。母さんももっと頑張るから、お前は勉強で皆を見返しておくれ。」と泣きながら英世を抱きしめて言いました。

英世は母が寝る間も惜しんで働いていることを知っていたので、それからは見違えるほど勉学に励むようになります。自分の家では燈りがないので、金持ちで親切な友達の家泊まり込んで、友達が寝てもなお勉強を続けていました。友達に「体を壊こわすぞ」と注意されると、「ナポレオンは3時間しか寝なかった。」と答えて平然としていました。

やがて英世は学校で断トツの成績となり、先生の代わりに教えることを許されました。母は借金をして英世に新しい着物をしつらえてあげましたが、「借金をするような子に教わりたくない。」と生徒たちは意地悪をして教壇を隠してしまいます。小柄な英世は教壇がなければ黒板に字が書けません。先生のとりにしで教壇は戻されます。

英世は小学校を抜群の成績で卒業すると、更に上の勉強をしたいと高等科（当時小学校には2年間の高等科が付属していました）の面接を一応受けてみました。一応というのは、英世には学費を払える見込みが立たなかったか

らです。すると面接してくれた小林先生は英世の成績を見て「学費は自分が持つから、是非進学するように。」と言ってくれました。そればかりでなく生徒たちにも寄付金を募^つって英世の左手の手術代まで出してくれました。お陰で会津若松にある「会陽医院」の渡部院長の執刀で、指の切り離しの手術を受けることができました。

英世は人を助ける医者という職業に魅力を感じ、医者になりたいと思うようになります。英世は高等科も一番で卒業すると、左手の手術をしてくれた渡部先生を頼って「会陽医院」で手伝いながら勉強する書生にして欲しいと願い出ます。先生は書生は既に5人も居て間に合っているけれど、英世の必死の訴えに折れて特別に認めてくれました。英世は昼間は病院の手伝いをしながら夜を勉強の時間に当てました。特に力を入れたのが英語、ドイツ語、フランス語等の語学でした。

やがて日清戦争が始まると、渡部先生は軍医として招集され、書生たちに暇を出すと同時に、行く所のない英世に「会陽医院」を任せることにしました。1年余りで日清戦争が終わり、渡部先生が帰ってみると、留守中のことが全て英文できちんと整理されているうえ、病院経営はむしろ改善されて黒字になっていました。

医者になる

渡部先生の友人の血脇^{ちわき}先生が会陽医院に立ち寄られた時、英世は一人でドイツ語の病理学の本を読んでいました。血脇先生はこんな田舎にこんな難しい本で勉強している書生がいるのに驚き、「君は今に立派な医者になる、東京に出てくることになったら、訪ねてくれ。」と言って名刺を渡してくれました。英世はその言葉に勇気を貰い医師の国家試験のために東京に行くことにし、一旦家に帰ります。その時柱に「志を得ざれば、再びこの地を踏まず（医者として成功するまでは、二度とこの家に帰ってこない）」と決意の程を刻み

込みます。

英世は小林先生や渡部先生や姉などから一年間は暮らせる位の餞別を貰い、母に見送られて一人東京に旅立ちます。そして本郷の安い下宿に落ちていて1ヶ月後医師の前期の試験に見事合格します。後期の試験は難しく、英世はまだまだ勉強しなければならないことが沢山あるのですが、手元にあるお金はもう無くなっていました。英世は気前良くお金を払うと、店員などに愛想良くちやほやされるのが大好きで、ついお金を使ってしまうという悪い癖があり、これは一生直りませんでした。

困った英世は血脇先生から貰った名刺のことを思い出し、先生が教師をしている高山歯科医学院を訪ねて思い切って「私をこの学院で働かせて下さい。」と頼み込みました。血脇先生は困った顔をしながらも、一応高山院長に相談してくれたのですが断られてしまいます。お金が無くて後期試験まで東京に留まっていられないのだなど英世の事情を汲み取ってくれた血脇先生は、寄宿舍のおばさんに内緒で暫く置いてくれるように頼み込みました。

英世が真面目に勉強しているのを知った高山院長も、英世を寄宿舍の用務員として雇ってくれました。始業、終業の鐘を鳴らしたり、ランプのすすを拭いたりという仕事でしたが、英世にとっては助かりました。用務員として働いているうち、学院経営がうまくいっていないことを知った英世は、院長が学者肌で経営者に向いていないことを突き止め、むしろ血脇先生がやった方がうまく行くと思い、具体的に経営改善計画を作成して血脇先生に示しました。

血脇先生は医者のお卵がビジネス・コンサルタントのようなことをするのでびっくりしましたが、計画の中身をじっくり読んで納得し、高山院長の説得に当たりました。最初は「学院経営はそんなに甘いものではないぞ。」と言って取り合わなかった院長も、英世の作った計画を読んで遂に血脇先生に経営を任せることにしました。血脇先生と英世の努力で学院経営は黒字になり、英世も一人前の給料を貰えるようになるのですが、髪はぼうぼう、風呂は月

に1回行水につかる程度、着物もよれよれという状況で、血脇先生の注意にも返事ばかりで一向に変えようとはしませんでした。

英世20才の秋に後期の試験を迎え、半年ぶりに床屋に行き、風呂に入り、友達から袴を借りて試験場に臨みました。試験は患者を診断する実地試験で、聴診器を持参するのが当たり前でしたが、英世は自分の聴診器を持っておらず試験官に貸してもらって診断するという失態を演じましたが、診断は正しかったと見え見事に合格しました。80人中合格したのは僅かに4人でした。

英世は早速血脇先生に報告し、更に医学の知識を深めたいと高山歯科医学院で教師をしながら勉強を続けることとなります。数日前までは用務員をしていた英世が教壇に立ったので、生徒たちはびっくりしましたが、英世は得意満面で熱のこもった講義をしたので、生徒たちの評価も次第に上がっていきました。

しかし、英世はすぐに物足らなくなり、血脇先生の同意を得て順天堂大学の研究論文の編集の仕事に転職します。自分の論文の発表も出来るので、月2本という非常に早いペースで論文の執筆を続けました。しかし財布の中はいつも空っぽでした。それは英世の金遣いが半端ではなかったからです。まるで大臣の行くようなきれいだころのいる料亭で遊ぶのですから、安給料などたちまち無くなってしまいます。そのくせ医者の子だしなみである袴も持っていないので、先輩医師に嚴重注意を受けてしまいました。東京で英世が頼りに出来るのは血脇先生だけなので、先生に借金のお願いに伺うと、さすがの先生も呆れ果て、持っていた財布をポンと英世に投げ出す始末でした。

当時、多くの病気が細菌によって引き起こされるということが分かってきており、日本で細菌学の先頭を走っている「伝染病研究所」で研究したいと英世は思いました。しかしその研究所は東大出の博士たちが中心で英世のような経歴の者を受け入れる環境にはありませんでしたが、英世の熱心さに北里柴三郎院長の特別の計らいで、研究員助子という資格で入所が許されました。

翌年アメリカのフレクスナー博士が来日し伝染病研究所を訪れた際、英語が話せる英世が通訳としてかり出されました。それだけでなく、博士に東京を案内する大役も任され、丁度桜の季節だったので、博士も満足し、英世に「日本は主にドイツの医学を学んでいますが、最近はアメリカも相当進んでいるので、あなたも一度いらして下さい。」と誘ってくれました。

アメリカ留学と結婚

英世は北里所長の命を受けて横浜の検疫所で海外から入ってくる船に伝染病患者がいなくどうかを検査することになります。ある日英世は船室で苦しんでいる二人の病人を調べ、それがペスト患者であることを突き止めます。当時清国（中国）ではペストが流行していて、それが世界に広がっては困ると各国から医師団が派遣されることになり、日本からは英世も選ばれました。そのことが知れ渡ると、英世が借金している友人やお店の人たちが取り立てに押し寄せ、研究所から出る出張費は借金返済で消えてしまいました。困った英世はまたも血脇先生に恥をしのんでお金を貸してくれるように頼みました。英世がやろうとしている仕事の意義を認めた先生は、新婚の奥さんの着物を売って貸してくれました。英世は郷里の人たちにも協力をお願いし、やっと出張費に見合うお金を集めることができました。

中国への船中で偉い先生方は豪華な食堂で飲食を楽しんでいる時、英世は船底で働く貧しい中国人と寝食を共にし、身振り手振りで中国語の会話を学んでいました。そのようにして現地に着いてから医師として一番人気があり、実際に役に立ったのは英世でした。中国で各国の医師たちと一緒に仕事をしているうちに、英世はアメリカで更に勉強したいと夢が膨らみました。

しかし先立つものはお金です。英世はまたも血脇先生にねだることにしました。その頃は英世の名が少しずつ知れ渡ってきていたので、英世がアメリカ留学の希望を熱烈に訴えると先生も賛成してくれて、可能な限りの資金を

用立てしてくれました。郷里の恩師小林先生も既に引退していたにも拘わらず大金を貸してくれました。英世の母の手紙によると、母も英世のために色々な人たちから多額の借金をしていたようです。

資金が集まったので北里研究所を辞め、東京を案内したことのあるフィラデルフィア大学のフレクスナー博士を予告もなく突然訪ねて仕事をさせて欲しいと頼みます。驚いた教授は「この大学では外国人の助手は原則として雇わないことになっているし、自分のところは手が足りている。友人のミッチェル教授がペンシルベニア大学でヘビ毒の研究を手伝ってくれる人を探しているので紹介しよう。ところで君はヘビ毒の研究をしたことはあるかね?」と聞きました。英世は「あります。」と嘘をついてやっととりあえずの仕事に就くことができました。英世のアメリカ留学は4年間でしたが、その後もアメリカに留まりペンシルベニア大学で博士号を取得し、カーネギー研究所、デンマークの国立血清研究所、ロックフェラー研究所等を転々としながら細菌学の研究に没頭します。そしてアメリカ人のメリーと33才の時結婚しますが、英世は研究生活を全く変えることなく、食事中でも時々顕微鏡を覗く始末で、メリーが英世の仕事の重要性を十分理解していたから夫婦であり続けられたのだと思います。

細菌学の世界的権威となる

英世の研究は梅毒、ペスト、コレラ、ジフテリア、チフス、トラコーマ、破傷風、小児麻痺、赤痢等多方面に及んだので、研究仲間が「細菌の同居人」と呼ぶほどでした。英世の研究はヨーロッパでも評価され各国を講演して回ることになり、ウィーンの講演では世界で最も有名な医学者ミュラー博士の方から英世に面会に来て、会食では隣り合わせで座るという光栄に浴し、英世はまるで子供のように有頂天になりました。

それまで日本のマスコミは英世の活躍をあまり国内で報道していなかった

のですが、英世38才の時、東大と京大から博士号を、日本の帝国学士院から恩賜賞おんししょうと賞金を授与され、ノーベル賞の候補にもなったので、これで胸を張って日本に帰れると思ひ、急に母親に会いたくなりました。こうして英世は15年振りに郷里の土を踏み、血脇先生や小林先生をはじめとして村の人たちの強烈な歓迎を受けます。英世は恩賜賞の賞金で母に農地を買い与えただけでなく京都や奈良等への観光旅行に母を連れて行き、その親孝行振りが新聞に報道されました。

僅か2ヶ月程の日本滞在中も多くの講演を行い、アメリカに戻ると、フレキシナー博士に「パナマ運河の工事現場周辺で黄熱病が流行していて蚊が媒介しているのは分かっているが、治療法はもとより病原菌も分かっていない。行ってもらえないだろうか？」と頼まれました。これを聞いた英世の研究心は燃え上がり、早速エクアドルに行き、その菌を突き止め、治療薬を開発しました。

それから9年経って、アフリカのゴールド・コースト（現在のガーナ）で英世が作った薬の効かない新しい黄熱病が発生したという情報に接します。英世はその前に原因不明の病気で入院しており、身体が弱っているにも拘らず、黄熱病の全滅は自分の一番の使命であると感じていました。妻のメリーは「あそこはイギリスの統治下にあるのだからイギリスの医師に任せるべきだ。」と言って初めて猛反対し、ロックフェラー財団の同僚の医師たちも心配して止めますが、一旦決心した英世の心を変えることはできませんでした。「皆さんの気持ちは有難いのですが、医師としての自分がこの世に残したいと思うのは、黄熱病の研究です。」といつになく静かに英世は言いました。

そして単身アフリカのゴールド・コーストおもむに赴き研究に着手するのですが、そこでの研究は英世の思う通りには進みません。数十倍も時間が掛かってしまいます。それでも英世は現地人を全く差別しないし、チップも気前良くはずんだので、人気がありました。しかし治療薬を開発する前に自分自身が黄熱病に感染してしまい、帰らぬ人となってしまいました。1928年、享年51才

の短い人生でした。

ニューヨークに葬られた英世の墓石には「野口英世、この人は全てを科学に捧げ、全人類のために生き、全人類のために死んで行った。」と記されています。

借金魔だった英世にお金を貸した多くの人が貸し倒れになってしまいましたが、細菌学に果たした英世の貢献に免じて許してあげて頂きたいと思います。

英世の生涯は、子供の頃の好奇心、集中力、負けず嫌い、突進力を生涯持ち続けた見事な生きざまでした。

15. ミステリーの女王 アガサ・クリスティ

ユネスコの調査によると、アガサ・クリスティは世界中で聖書とシェークスピアに次いでよく読まれているそうです。彼女は生涯で70冊の推理小説を書き、110ヶ国語の言語に翻訳され、3億冊も売られています。

少女時代

アガサ・クリスティは、1890年にイギリスのトーキーという村の裕福な家の第三子として生まれました。家には乳母や料理人など多くの使用人がいました。兄と姉は寄宿舎に入っていたので、実質的には一人っ子として育ちました。彼女は母クララを愛し、尊敬していましたが、滅多に会うことはなく、乳母がいつも彼女の遊び相手でした。しかし乳母の話は6パターン位の単純な物語の繰り返しで、頭の回転の速い彼女はすぐ飽きてしまい、一人で空想の世界を創り上げ、その主人公になって楽しむような子になっていきました。そういう彼女にとって広い自宅の庭は格好な空想の舞台となりました。という

のは、半分は人の手のはいったイギリス庭園でしたが、半分は自然の森の様相を残していたからです。

母クララの方針で8才までは文学を読めない方が目のためにも、頭のためにも良いということで、正式な教育は受けませんでした。好奇心旺盛な彼女は多分乳母が内緒で教えたのだと思いますが5才で読み方を覚え、家の図書室にある本は全て読んでしまい、特にディッケンズが好きだったそうです。

彼女は両親に連れられて、トーキー村に巡業に来る芝居を観に行きました。その経験が後に戯曲作家にもなる彼女の舞台への想いを育んだのでしょう。父は投資に失敗し、トーキーの屋敷を売り払わなくてはならない程になり、その心労からか彼女が11才の時55才で心臓発作を起こして帰らぬ人となりました。母は打ちひしがれて3日間も部屋から出て来ず、その後すぐ保養のためアガサと料理人のジェーンを残して3週間フランスに旅行に行ってしまう。アガサは急に悲劇の女王となり、人々の関心をそそる一人前の人間になったという快感を感じたといわれます。

父の投資の失敗でアガサの家は貧乏になりましたが、屋敷を売るのはアガサの猛反対で何とかくい止め、生活の支出を切り詰めることにします。使用人を減らし、近所との付き合いも最小限にし、食事も切り詰めましたが、アガサにとってはその頃は幸せな生活でした。母は毎晩のように名作といわれる小説を朗読して聞かせてくれるようになり、母がより身近な存在になったからです。コナン・ドイルのシャーロック・ホームズのシリーズを初めて知ったのもこの頃でした。アガサは母が急に死んでしまうのではという恐怖心から、夜そっと寝息を確認に母の寝室のドアに耳を当てるようになりました。

16才になるとアガサはフランスで寄宿舎のあるいくつかの学校を渡り歩きます。意外なことに彼女が一番得意な科目は数学で、音楽も好きでしたが、国語は大の苦手でした。彼女のフランス語の先生は、一回のテストで25ヶ所も間違える生徒は見たことがないと驚いた程です。これは母国語である英語

でも同じでした。アガサ自身が語っていることですが、文法はチンプンカンプンだし、言葉のスペルにも関心がなかったと言います。それなのに作家になったのは、時間の拘束があまりなく、一人でマイペースでやれる仕事だったからということです。数学は論理的思考そのものであり、推理小説には特に要求される能力です。本当はピアニストかオペラ歌手になりたかったけれど、本番に弱いという弱点が克服できず諦めたということです。

最初の結婚と失踪事件

アガサも18才になり、人並みに社交界入りの年頃になりましたが、イギリス国内ではお金の問題があって無理だったので、母は自分の病気に転地療法が有効だという医師の奨めもあり、3ヶ月間娘を連れてエジプトに逗留することにします。アガサは淡いピンクのイブニング・ドレスの両肩にバラのつぼみを付けてダンスに興じながら、気に入った青年に流し目を送りました。その結果3人のイギリス軍人から結婚の申し込みを受け、そのうち2人に即座にOKを出してしまいます。しかし、暫く離れて暮らしていくうち熱が冷めてしまい、結局3人のうちの誰ともゴールインしませんでした。

最終的にアガサが選んだのは、同じくエジプトに駐留していたアーチボルト・クリスティという空軍将校でした。二人は稲妻のような一目惚れで、母のクララは自分がお金で苦勞していたので、娘にはお金持ちの青年を選んで貰いたかったのですが、二人の磁石のように引き合う力にはどうすることも出来ませんでした。アーチボルトはフランスの前線に急に召還^{しょうかん}され、二人は大慌てで質素な結婚式を挙げました。アガサは白いドレスもヴェールもなく、「こんなひどい格好の花嫁なんて他にいないだろうな」と一瞬悲しくなりました。二人がきちんと一緒に暮らせるようになったのは第一次世界大戦が終戦した4年後のことでした。

アガサはアーチボルトがフランス戦線で戦っている間、ただじっと故郷で

待っていた訳ではありません。^{とくし}篤志看護隊に志願し、最初は看護助手として、後に薬剤師として赤十字の仕事に従事していました。戦場での薬剤といえば助からない負傷兵の苦痛からの解放や敵を殺すための毒薬が大部分を占めていました。この経験は後に彼女が推理小説家になってから非常に役に立つことになります。多くの作品の殺人や自殺の手段として毒が用いられていることから分かります。

アガサは30才の時「スタイルズ荘の怪事件」という初めての推理小説を書き上げ、そこにベルギー人の元刑事である名探偵ポアロを登場させます。2作目は冒険小説の「秘密機関」、3作目は詩集「夢の道」、4作目は戯曲「アクロイド殺し」と同じ文芸作品でありながら多様なジャンルの作品を世に問い、ことごとく成功し、たちまち中堅作家の仲間入りを果たします。その間に夫アーチボルトの元上司で大英帝国博覧会の宣伝を担当するベルチャー少佐の依頼で夫と共にアガサも一緒に世界を回れる事になり、一人娘のロザリンドを母に預けて旅に出ます。その経験は後のアガサの作品に生かされるのですが、その頃から夫との間に亀裂が生じるようになります。夫は始終頭痛や胃痛で体調が悪く、不機嫌で殆ど口をきかず、夜は早く寝てしまうというアガサにとっては極めて退屈な男だったのです。

それでもアガサは、夫は自分を愛しているのだから、自分も夫を愛さなければと努めていました。そんな時母が亡くなったという報せに接します。アガサの悲しみようは大変なもので、夫のアーチボルトはアガサの気晴らしにとスペインに二人で旅行に行こうと誘いましたが、アガサは現実から逃避するのは本当の解決にはならないと断ってしまいます。次いで彼は家と車を買おうと提案します。全て反対したのでは、二人の結婚生活は完全に壊れてしまうと、アガサは気が進まぬままに同意しますが、後にそれは当時彼が夢中になっていたゴルフに便利だからだったことが分かります。休日の度に近所のゴルフ場に通う夫に、自分はまるでゴルフ未亡人ではないかと思うようになります。

更に夫から「テレサ・ニールという女性が好きになってしまったので別れて欲しい」と言われます。

実は有名な11日間の「アガサ・クリスティ失踪事件」の直前には以上のような背景があったのです。彼女の車はヘッド・ライトが壊れていましたが、大事故があった様子もなくニューズランドの道脇に乗り捨てられていました。しかし、それから10日間も彼女についての手掛かりは一切なく、各大衆新聞は情報提供者に賞金まで出して官民あげての大捜索が行われました。アガサは列車でヨークシャーの保養所に行き恋敵のテレサ・ニールの名を使ってホテルに滞在していたのですが、バンドマンたちが失踪中の作家ではないかと警察に通報したことから一件落着となります。

記者会見に臨んだ夫のアーチボルトは、「失踪事件の間、妻は完全な記憶喪失に陥っていた。」と説明しました。精神科医の診断は「ヒステリー性遁走」という大きなストレスで突然陥る特殊なタイプの記憶喪失である可能性が高いというものでした。この事件については色々な説がありますが、いまだに真相は明らかにされていません。この事件を契機に夫は姿を見せなくなりました。アガサ38才の時でした。

一流の推理小説家への道

アガサは子供の頃から本当の芸術家になるのが夢でした。自分が書いているものは、大衆が現実を逃避し空想の世界を浮遊して一時を楽しむポップスのようなものに過ぎない。特に色々な規則に縛られている推理小説はその傾向が強く、思い切ってやめようと思ったこともありました。推理小説をドル箱としている出版社の猛反対に会い、やむなく生涯書き続けることとなります。そしてどうせ書くならば推理小説を職人芸の域から芸術の域まで高めてやろうと思いました。失踪事件から立ち直ると自ら「探偵クラブ」の会員となり、晩年は会長として新しい推理小説のスタイルの確立に尽力することとなります。

アガサの一番の趣味は自分の家を持つことで、一時は8軒もの家を持ち、それらを事件発生の舞台としました。考古学にも興味を持ち、オリエント急行で中近東を旅し、発掘している学者の奥さんが彼女のミステリーのファンだったこともあって非常な歓待を受けました。

彼女の作品の愛読者は主に主婦層でしたので、さらに読者層を広げていくためには、女性であるポアロのライバルの登場が必要だと考えたアガサは、イギリスの小さな村に住むオールドミスのマープルを生み出します。ポアロもマープルもシャーロック・ホームズのように天才肌ではなく、論理的にじっくり考えてやっと結論に辿り着く普通の人間です。二人に共通するのは探偵ごっこが大好きだということと、どんな理由があるにせよ殺人者を憎み、犯人の死刑を容認している点です。もう一点加えるとすれば、二人とも外見はあまりパツとせず、読者に多少の優越感を与えることでしょう。

アガサは2度目の中近東旅行の際発掘現場で助手として働いていたマックス・マローワンと知り合い、マックスの案内で遺跡巡りに二人で出掛けます。しかし途中で一人娘が急病という報せに接し、アガサは急遽イギリスに戻ることにになり、それにマックスが付き添ってくれることになります。帰ってみると娘は順調に回復していましたが、意外にも14才年下のマックスから突然求婚されます。アガサは驚き自分は既に40才で子供は産めないことや、前の夫との苦い経験があること、周囲の人達にもうまくいかないだろうと反対されたことなどから結婚は無理だとマックスに答えましたが、心の中ではお互いに惹かれ合っていました。マックスは自分のことが嫌いで断ったのなら諦めるけれど、そうではなく他の問題なら解決できると積極的で、発掘以外は大英博物館で仕事をするとするので、アガサも今度こそはとの期待のもとに結婚に同意します。

再婚と最盛期

この頃から15年間ほどが「クリスティ小説」の最盛期と言って良い時期が

続きます。その原因の一つは、アガサとマックスとの関係が極めて巧くいっており、お互いに相乗効果をもたらしたことがあげられるでしょう。アガサは幾何学を学んで、中近東でのマックスの発掘を手伝い、マックスもアガサの発想の障害にならない範囲で自分のアイディアを提供しました。

アガサの最も有名な探偵小説「オリエント急行殺人事件」にもマックスのアイディアがいくつか取り入れられているといわれます。私は、同名のハリウッド映画を観た事があります。私の憧れの美人女優イングリッド・バーグマンが乗客の老婦人として出演していましたが、最後までそれがイングリッド・バーグマンだと気付きませんでした。とびきりの美人女優がグレタ・ガルボのように「リーブ・ミー・アローン」と言って突然銀幕から消えてしまうという心境も分かるような気がしました。

アガサは砂漠の中で執筆することが多くなりました。それは自身が考古学が好きだったし、夫のマックスの側そばに居たかったので自然にそうだったのです。アガサ自身が最も良く書けたと評価する「ナイルに死す」は巨大なアブ・シンベル宮殿の前に浮かぶ船上の出来事で、私も家内とナイル川を遡ってアスワンダムまで旅をした時のことを思い起こしました。

1939年アガサ49才の時第二次世界大戦にイギリスが参戦すると、マックスは自ら志願兵となってエジプトに派遣され、アガサも赤十字病院の薬局で働きながら、執筆活動を続けます。淋しさのあまり毎日のようにマックスに手紙を書きました。終戦を迎え幸いにしてマックスは無事帰国し、彼の最大の考古学的業績となるイラクのニムルド遺跡の発掘に夫婦協力して取り組みます。そこからの見事な出土品はイラク博物館やアメリカのメトロポリタン美術館に展示され、「ニムルドとその遺物」という二巻の書物となり、マックスも考古学者としての絶頂期を迎え、それまでの業績が認められてナイトの称号を与えられます。

戦後も86才で亡くなるまでアガサの創作意欲は衰えませんでした。戯曲「ね

ずみとり」は、ロンドンとニューヨークで記録的なロングランとなったし、「オリエント急行殺人事件」の他にも彼女の多くの作品が映画化されました。ただしアガサは映画会社としばしば衝突しました。それは脚本家が彼女の承諾を得ずにあまりにも自由に筋書きを書き換えてしまったからです。ポアロをミス・マープルに置き換えてしまったり、ポアロに自慢の髭がなかったりということが当たり前のように行われていたからです。

批評家の中には、アガサ・クリスティを全く評価しない人も沢山いました。それは多作の作家にとっては避けられないことですが、物語りの進行がどうしても似てしまうのです。彼女の作品は密室あるいは狭い空間を舞台とする殺人事件で、読者たちが自ら探偵か作家になった気でパズルを解くような気軽な気分で参加できる構成になっています。文章は純文学のように一文が長くなく、余分な飾りは全てそぎ落とし、易しい簡潔な短文になっており、その上会話を多用しているのですから、そこに高い芸術性を期待する方が無理というものでしょう。しかし、そこに大衆の取り込みに成功したアガサ・クリスティの本領があるのだと思います。

寝たきり老人になっても知的好奇心を失わず創作を続けたアガサ・クリスティの生きざまは、これから人生の最晩年期を迎える私にとっても学ぶべき実例といえます。

16. 財界の荒法師 土光 敏夫

私はコンサルタント時代、経団連会長だった土光敏夫氏の講演を聞きに行ったことがあります。誠実そうだけれど、決して能弁^{のうべん}とはいえずむしろ訥弁^{とつべん}で、話の内容も地味で常識的だったので評判ほどの人ではないなと誤解して

しまいました。土光さん（以下土光という）の本当の良さは、じっくり接した人にしか分からないのかも知れません。土光は昭和を代表する財界人として松下幸之助以上の評価をする人も多いからです。それで土光の生きざまを辿ってみることにしました。

受験が苦手な少年

土光は1896年（明治29年）に岡山県の大野村という現在の岡山市の郊外で、6人兄弟の次男に生まれましたが、長男が1才で夭折した^{ようせつ}ので実質上は長男でした。1町歩ほどの平均的な農家で、父があまり丈夫ではなかったため、小学校の頃から力仕事は土光の役割だったといえます。たとえば掘割りを舟を引いて本を読みながら片道2時間ほどかけて肥料を買い付けに行ったり、60キロの米俵を担いで倉庫に入れたりしていたそうです。お陰で体育は得意でした。

土光は学費の安い県立中学校に入ろうと受験しますが、3度失敗し、やむなく岡山市内にある私立の中学に入学します。中学では級長を続け、特に数学が好きだったのでさらに勉強したいと東京工業専門学校（現在の東工大）を受験しますが、またもや落ちて地元で代用教員をしながら勉強し、翌年にはトップで入学します。このことから土光がいわゆる秀才とは違うことが分かります。

東京工専といえば、もと蔵前にあり、溝を挟んで向かい側に柳橋の花柳界が広がっており、隅田川の川風に乗って三味の音や脂粉が漂ってきて青年たちの欲望をかき立てていました。裕福な学生の中には、毎晩柳橋で遊んでそこから学校に通うという豪の者もいましたが、苦学生である土光には無縁の世界でした。

土光は在学中一度だけ旅行らしい旅行をしています。アルバイトで稼いだお金で北海道に一人旅に行き、少しお金が残ったので神田の本屋街をぶらぶ

らして、タービンの本に巡り会います。それが卒業後の彼の人生を大きく左右することになります。タービンの研究の虜^{とりこ}になった土光は、就職先としてタービンを造っている会社を探しました。当時はまだ国内の民間ではタービンの需要はなく、海軍が効率の良い小型のタービンを求めている、石川島造船所だけがその製造に当たっていたので、当然のようにそこに就職しました。

ビジネスマンの頂点へ

入社早々、土光には二つの幸運が訪れます。一つは重役の娘との結婚で、もう一つは1年間のタービン研究のためのスイス留学です。特に妻直子は5人の子をもうけ、立派に育てただけでなく、土光のその後の波乱に満ちた人生を支える重要な援軍となりました。土光は自ら後年「ワイフは勲章ものだ」と言っています。

その後電力会社等が大型タービンを発注するようになり、芝浦製作所（現在の東芝）と共同出資で「石川島芝浦タービン」が設立され、土光は新会社の技術部長を命じられました。その頃の土光は晩年のずんぐりした姿からは想像できないスマートないい男でした。終戦の翌年、土光は50才にして同社の社長に任命されますが、空襲で工場は壊滅的な被害を受けており、まさにゼロからの再建でした。一番土光を悩ましたのは会社の資金繰りで、弁当を持って第一銀行本店に行き、「今日は何としてでも貸して貰わねば、翌朝まで座り込む。」と営業部長（後の頭取）^{ついで}に言って終に融資を引き出したというエピソードが残っています。

昭和25年やっと一息つけるようになった時、親会社の石川島重工業自身の経営が危機に陥り、その再建に土光は呼び戻され、社長として手腕を振るって欲しいと要請されます。土光が行った最大のことは播磨造船所との合併^{はりま}です。これによって世界一の造船所が誕生することになります。土光は社長としてさまざまな変革を行い、石川島播磨重工業を安定軌道に乗せて会長に退

き、これから好きなことが出来ると思ったら、当時東芝の会長をしていた石坂泰三から、今度は東芝の社長として減配続きの東芝の立て直しを頼まれます。業界で一番尊敬している石坂氏に「三顧の礼」を尽くして懇請されたのでは断れません。土光69才でした。後に土光に「自分の行く所、いつも逆風が吹き荒れている。」と嘆かせることになりましたが、それはまさに本心でしょう。

毒舌でならした評論家の大宅荘一は「マンモス東芝に“秀才の官僚主義”という毒素が回り、屋台骨が揺らいだ。そこへ土光が単身で乗り込み、チャレンジ経営を打ち出した。社員を暗示にかけ、精神的な荒療治をやって、眠っている潜在力を引き出した。」と言って土光を賞賛しています。

財界のボスと臨調会長

そして土光は4代目の経団連会長に78才にして祭り上げられ、6年間にわたって財界総理の座に着き、企業からの会費の上にあぐらをかいて非効率化していた経団連におおなた大蛇をふるい、やっと新設の名誉会長に退いて隠居と決め込んだのですが、今度は当時の鈴木総理から「日本の官僚機構が肥大化しすぎてしまったので、“臨時行政調査会”を作るから会長としてもうひと踏ん張りしていただきたい。」という依頼が入ります。土光は既に85才、普通の人間ならとうにリタイヤしている年ですが、「この役は土光さんにしかできない。」と言って執拗に迫られるので、土光は提言は必ず実施するということを約束してくれるのならと条件を付けて引き受けました。遂に日本国の再建まで託されてしまいます。

タービンの技術屋上がりで政治の世界とは遠い存在だった土光は、いくつもの専門分科会を統合するゼネラリストとして老体にむち鞭打って猛烈に勉強し、企業での再建屋の経験を生かして鈴木総理に報告書を提出します。しかし、派閥均衡の上に乗っかっただけの鈴木内閣は短命に終わり、提言は殆ど実施されずに終わってしまいます。鈴木内閣で行政管理庁長官として臨調に関

わって来た中曽根康弘が次の総理となり、臨調を臨時行政改革推進審議会と名前を変えた上で、中曽根総理は今度こそ必ず実行するからと土光に会長を続投して欲しいと懇願こんがんします。土光は既に87才になっていました。

土光は政府に任せておいたのでは、実現はおぼつかない、税金を払う方の国民が税金の使い道について監視するシステムをつくらなければと「行革推進全国フォーラム」という組織を造り、本田宗一郎、井深大といった一世代若い日本を代表する経営者に代表世話人になってもらい、全国行脚あんぎゃを行って行革を国民運動にして政府や行政に圧力をかけます。土光のこの最晩年の捨て身の努力がなかったならば、現在の日本はさらに窮乏きゅうぼうしていただろうと思われます。

最後になりましたが、土光の母について少し書き加えたいと思います。父に先立たれ田舎で一人暮らしの70才の母を川崎の自宅に引き取って一緒に暮らすことにしたのですが、母は「東京の女子教育は十分でない。将来の日本を支える若者を育てるのは母親である。立派な大和なでしこを育てる学校を自分は造る。」と言い出し、土光等身内が「とても無理だ」と止めるのも聞かず、一人で近所の地主を根気良く説得して回って、学校の土地を確保し、資金を集めてついに女学校を設立してしまいます。生徒ははじめは数十人の塾のようなもので、道德教育を中心に農作業や家畜の飼育まで生徒にやらせていました。母は設立後3年で亡くなりましたが、土光は母の意志を継ぎ、理事長として幼稚園、中学校、高等学校合わせて800人以上の生徒の教育たずさに携わり、自分は清貧な生活を続けながらも、収入の殆どを学校経営に注ぎ込んでいました。

土光さんの生涯を辿ってきましたが、全く私心がなく、策謀を巡らすこともなく、ただひたすら努力を積み重ねて頂点を極めた稀有けうの人だったことが分かります。ともすれば豊かさの中で自分を見失いがちな私たちが、どう生きたらいいのかを考えさせてくれる人だと思います。土光さんは一汁一菜の食事

(目刺しで有名ですが、本当はもっと安い煮干でした)のお陰で92才の長寿を全うされました。

17. アメリカ文学を世界水準に高めた ヘミングウェイ

私は文学青年ではなかったので、上下二段にぎっしりと活字の詰まった世界文学全集など読んだことがありませんでした。高校時代文学作品を読んで感想文を書く宿題が出て、本屋さんに行ってたまたま目に付いたのがヘミングウェイの「誰がために鐘は鳴る」という上下2冊の本で、結構苦労して読み感想文を書きました。これが本格的な文学作品を読んだ初めての経験でしたが、宿題を出した先生からは「自分が知らない作家なので、コメントのしようがない」と軽く受け流されてしまいました。当時はまだ日本ではそれ程知られた作家ではなかったのです。

私の家は八百屋で、千葉市内の全映画館のビラを店先に貼っていたので、タダ券が貰えて「誰がために鐘は鳴る」、「武器よさらば」、「キリマンジャロの雪」、「老人と海」などヘミングウェイ原作の映画を次々に観ることになり、晩年ピューリッツァ賞やノーベル文学賞を受賞するほどの大文豪だったことを知りました。

このシリーズで既に紹介したマレーネ・ディートリッヒやイングリッド・バーグマンの男性遍歴の中にも名前が登場する女性好きの男性という点からも興味が湧き図書館で調べてみました。

少年時代と第一次世界大戦

ヘミングウェイは1899年にアメリカ中西部、シカゴの西約16キロにある

オークパークに医者の子の5人兄弟の長男として生まれました。先祖はイギリスからの移民でした。

彼は幼い頃から父に連れて行ってもらった釣りや猟が大好きになり、その趣味は生涯続きました。12才の時、禁猟区でアオサギを撃ってしまい逮捕されそうになりますが、なんとか罰金で済ませてもらいました。しかし、法を犯したという罪の意識は少年の心に重くのしかかりました。

彼は高校時代から体が大きく身長は180cm、体重は70kgを越すほどだったので、ボクシング、フットボール、水泳とスポーツは一通り何でもやりましたが、あまり器用で敏捷な方ではなかったようで長続きはしませんでした。その代わり、校内新聞や文芸雑誌への投稿で、見事に彼の潜在能力は開花していきます。その頃は記事やエッセイや短編小説でしたが、その文筆力には後に文豪と言われるようになる片鱗^{へんりん}が見て取れたといわれます。

彼が高校を卒業すると父は大学への進学を希望しましたが、彼は従軍したいと言って家を出てしまいます。実はその年にアメリカは第一次世界大戦の傍観者では居られず、ドイツに対して宣戦布告しました。そしてウィルソン大統領の「全世界を民主主義の国にする戦いだ」という演説に国を挙げて戦意が高揚している時期だったのです。しかし彼は左眼が極端に弱視だったので入隊できず、やむを得ずキャンザス・シティーで地方紙の記者をしながら従軍のチャンスを待つことにします。キャンザス・シティーは人口30万人程の新興都市で、当時は犯罪、暴力、売春等の都会における様々な悪が横行する治安の悪い都市でした。静かな田舎から来た彼には全てが新しい経験で、実体験を通じた社会学習になり、1年足らずでしたが記者活動を通じて文筆力にも磨きがかかりました。その新聞社には片目が義眼なのに従軍して帰還した同僚がいて、赤十字の傷病兵運搬車の運転手なら従軍できる可能性があるという耳寄りな情報を得て、新聞社を辞めます。ヘミングウェイは合衆国赤十字の傷病兵運搬車の運転手となり、船でフランスに渡り任地のイタリアに

^{おもむ}
赴きます。

しかしそこは戦地とはいえ最前線ではなく、彼にとっては退屈な勤務でした。本当の戦闘を見たくてたまらない彼は、激戦地であるピアーベ川沿岸で、酒保要員（酒、タバコ、コーヒー、チョコレートなどを前線の兵士に届ける人）の補充があると聞いて直ちに志願し、採用されます。任務について2週間も経たないうちに、悪夢がやってきました。彼の輸送車はオーストリア軍の迫撃砲弾を受けて隣に乗っていた兵士は即死し、彼ともう一人の兵士が重傷を負ってしまったのです。彼は自分も重傷だったにも拘らず、もう一人の重傷者を必死に背負い陣地に届けると自分も意識を失ってしまい、ミラノの病院に長期の入院を^{よぎ}余儀なくされます。彼は左足に200個以上の迫撃砲弾の破片や機関銃の弾を受けており、その摘出手術を十数回にわたって受けました。

入院中彼は7才年上の看護婦の一人が好きになり、結婚する気にまでなったのですが、彼女は公爵の跡取り息子と結婚してしまい彼の初恋は実現しませんでした。

作家としての修業時代

彼の恋が成就したのは、戦争が終わって帰国し、シカゴの友人宅に居候^{いそろう}している時に知り合った9才年上の女性ハドリーとでした。彼は22才で初婚を迎え、既に作家として活躍していたアンダソンの奨めもあってパリで修業することになります。彼はカナダの「トロント・スター」紙の特派員記者としてギリシャ・トルコ戦争、ローザンヌ講和会議などを取材するため、イタリア、ドイツ、スイス、トルコ等を巡り、記事の作成や短編、詩の創作に励む一方で、パリで評論家や出版業者、作家等の知己を得て、本格的な作家になるための基礎を固めていきます。長男が誕生したことも彼の決意の後押しとなったことでしょう。そして短編集「われらの時代に」をフランスとアメリカで出版し、作家としてのデビューを果たします。

彼が28才の時、「ヴォーグ」誌の記者ポーリンと再婚します。前妻ハドリーとは相思相愛の仲が続いていたのですが、一夫一妻制度の下では二者択一を迫られ、彼は散々悩んだ挙句より若いポーリンを選んだのでした。

翌年父がピストルで自殺したという報を受け取ります。2ヶ月前に家に帰った時、父は糖尿病から来る心臓疾患、うつ病、土地投機の失敗等が重なり、ひどく元気がなく心配していましたが、このような結果になったのには、そこまで父を追い込んだ母にも大きな原因があると思ひ、彼は生涯母を許せませんでした。

彼が30才の時、彼自身の戦争体験をもとに執筆した「武器よさらば」を出版し、3年後には映画化されますが、批評家によると、それから7年位はヘミングウェイの停滞期とされています。その原因はその間に自動車事故で右腕を複雑骨折してしまい、筆を執れなかったことや、乗馬中に落馬して怪我をしたりといった外傷の他に、赤痢や気管支炎、さらに喉の手術に腎臓病と不運が続いたこともありましたが、内面的にも、初めての戦場で瀕死ひんしの重傷を負ったことがトラウマとなり、死の恐怖を克服することが作家活動を続ける上でどうしても必要だったのです。

彼は死の恐怖を乗り越えるためにスペインの闘牛場に足繁く通ったり、アフリカのサファリで大物を対象とした狩りに熱中したりしました。闘牛は命を懸けた闘牛士の勇姿を観覧者の立場で客観的に観察し、サファリでは自ら主体的に猛獣に戦いを挑み続け、最後は勝利者になる経験を重ねました。それらの体験を通して彼は再び作家魂に火を付ける事ができました。

作家として

そして彼の代表作「誰がために鐘は鳴る」というスペインの内戦を題材とした傑作が誕生します。独裁者フランコ將軍は、ドイツ、イタリアのファシズム勢力の支援を受けて勝利しますが、勝てないことを承知で義勇兵になった

アメリカ人記者が戦死するまでのたった4日間の鉄橋爆破活動の中に死の価値を謳いあげた見事な長編小説です。彼はこの小説を従軍記者としての体験に基づいて書きました。映画ではゲーリー・クーパーとイングリッド・バーグマンが主演して居り、私は劇場とテレビで2回観ました。フランコ將軍の豪邸は一般公開されて居り、家内とスペインを旅行した折に立ち寄りしました。

この頃、ヘミングウェイは二度目の妻ポーリンとの間に二人の子供を儲け、ポーリンとは決して仲が悪かった訳ではないのですが、作家である新しい恋人マーサと旅先で同棲を始め、ポーリンがそれを知って自ら身を引いたのを機に正式に結婚します。マレーネ・ディートリッヒやイングリッド・バーグマンと親しくなったのもこの頃からで、彼の創作意欲の高まりには常に女性が関わっていたようです。

新妻マーサとは甘い新婚生活を楽しむ間もなく、第二次世界大戦が始まり、二人は別々の依頼主に頼まれ別の地域に従軍記者として赴きます。マーサがいない時は、淋しさを紛らわすために彼は深酒をしていたといわれます。彼はまず日中戦争を取材するため中国に渡り、蒋介石や宋美齡に面会し、次いで自分の釣り舟を改装・武装してカリブ海に出没するドイツの潜水艦Uボートの哨戒活動を行います。44才の時、米国海軍省の特派員としてイギリスに渡り、灯火管制下のロンドンでまたも友人に乗せてもらった車が自動車事故を起こし、彼はフロントガラスに頭をぶつけて十数針も縫う大怪我を負って入院を余儀なくされます。

久方ぶりに彼に会うためにロンドンにやって来た妻のマーサはホテルで事故のことを聞き、驚いて病院に駆け付けると、頭を包帯でぐるぐる巻きにしながらも大勢の見舞い客に囲まれてチャホヤされ、酒を振舞い御満悦の夫が居ました。この戦時における非常識な行動に呆れかえったマーサは、「これで完全に終わりね」と言って退室してしまいます。実は同業のマーサとは仕事上すれ違うことも多く、一方で成果を張り合う面もあっていずれうまくい

かなくなるだろうと予見していた彼は、8才年下の人妻で「ライフ」誌の報道記者としてロンドンに来ていたメアリーになんと既に求婚していたのでした。そして47才で4度目の結婚をします。

退院後彼は報道写真家キャパ等と淋しさを紛らわすために連夜のようにパーティを開いていましたが、ヨーロッパ戦線にアメリカが参戦してからはノルマンディ上陸作戦を同行取材し、上陸後自ら労働者や農民から成るパルチザン（非正規軍）を組織し、パリ解放のためにパリに至る道筋に残っているドイツ軍の情報収集を指揮し、連合軍のパリ侵攻に同行しました。彼は連合軍の兵士やパルチザンに「パパ」と呼ばれて慕われ、彼がパリを解放したというややオーバーな評価といえるいわゆる「ヘミングウェイ伝説」が生まれましたが、彼は敢えてそれを否定しませんでした。自ら苦勞してパリの土を踏んだ感慨がそうさせたのだと思います。

第二次世界大戦後

大戦後は大物釣りを楽しむためにキューバのハバナに家を借りて4人目のメアリー夫人との睦まじい生活が暫く続きますが、同時に30才も年下のイタリアの娘アドリアードとの交際も公然と始めました。彼は彼女に年の差を感じさせまいと一時休んでいた執筆活動に猛然と取り組み、名作「老人と海」を完成させます。これは、それまでの戦争を題材とする小説ではなく、年老いた漁師が小舟に乗って巨大魚マーリン（まかじき）と死闘を繰り広げる話を書いたもので、老人はついに獲物を仕留めるのですが、それを舟の脇にくくりつけて村に帰る途中、鯨の大群に襲われ、獲物のマーリンは骨だけにされてしまいます。それでも老人は商品価値のない骨だけとなったマーリンを村に持ち帰り、たった一人でその巨大なマーリンと闘った証拠を示すことによってベテラン漁師としての威厳を示すことで満足するという筋書きです。

アドリアードは、ヘミングウェイを尊敬しながらも、恋心にまでは至らなかつ

たので、彼の一方的な片想いで二人の関係は終焉^{しゆうえん}を迎えます。

彼が54才の時、妻メアリーの強い希望で再びアフリカに行き、ケニア政府の特別の計らいで禁猟区の一部を特別に解放してもらい、早魃^{かんぼつ}続きで人間社会にまで餌を求めて出沒するようになった猛獣の狩猟に明け暮れる生活を送ります。その時も彼は現地人の娘ケツパに熱烈な恋心を燃やします。彼には異種族混交の願望があり、そのために自分もアフリカ人のように日焼けして真っ黒になりたいという変身願望もありました。本妻であるメアリーはそれを知り、常に彼の自分に対する愛情を言葉で確認すると同時に彼が同性愛的傾向もあることから、自ら断髪し、男装したりして、彼との性生活においても彼の好みに合わせようと努力しました。

不幸にして彼等はアフリカでの移動に使った小型機が2回も墜落^{ついらく}し、特にヘミングウェイは重傷を負ってしまいます。結果として彼は病院を転々としますが、再び筆を執るところまでは回復せずに自分の猟銃で自殺するという悲劇的な結末を迎えてしまいます。1961年享年62才でした。

死の前の10年近くの間、彼は目立った作品を残していませんが、「エデンの園」や「夜明けの真実」の執筆に当たって居り、彼の関心が広い意味でのエロスに集中していたことが分かります。これらの作品は第三者の手により圧縮された形で彼の死後出版されていますが、それによって彼の異常なまでの性愛への探求が読み取れるといわれます。

彼は最晩年血圧が250にも上がり、神経衰弱になり、幻想に脅え^{おび}、みるみる痩せていって自殺願望にとらわれるようになります。2回は妻メアリーによって寸前に止められましたが、3回目は地下室に隠してあった自分の猟銃を見つけ出し、即座に銃口を額に当てて引き金を引いてしまいました。

彼は、「作家の仕事は真実を伝えることだ。」という信念を持っていたので、長編、短編、エッセイ、記事等彼の筆になるものは殆ど彼の実体験が背景にあり、単なる絵空事で空想されたものは皆無とっていいと言われている

す。ある批評家は身体的な自由を失ったヘミングウェイには最早書くべきものが残されていなかったのではないかと言っています。二度にわたる世界大戦とスペインの内戦、闘牛、狩猟、釣りそして女性遍歴といった体験と見聞によって形成された男性的でマッチョな彼のイメージと、死の恐怖に脅え、度々執筆不能となるスランプに苦しむ彼の^{かいり}実像との乖離を最早自分の力では埋められなくなっていたのかも知れません。

18. 日本のゴッホになった 棟方 志功

もう十数年前のことですが、青森大学の主催で全国の大学の留学生を集めて十和田湖畔で合宿の研修会があり、私は講師として、家内は給食の手伝いとして一緒に参加しました。折角青森まで来たのだからと、青森市にある「棟方志功記念館」に行ってみました。

棟方志功は1903年に青森市で鍛冶職の父幸吉、母さだの三男、九男六女の第六子として生まれました。貧乏人の子沢山の例えのように志功は尋常小学校はなんとか出させてもらったものの、その後は家業を手伝ったり、青森地方裁判所の給仕をしたりして働きながら、ネブタ絵や映画の看板絵を描くことに熱中していました。その頃ゴッホの印刷された原色版の「ひまわり」の絵をもらって大変感動し、「わだばゴッホになる」と友人に触れ回ったといえますから、相当の自信家だったようです。ちなみに小学校時代の将来の夢に「何でも良いから世界一になる」と書き、あだ名が「世界一」だったといえますから、ゴッホを世界一の画家と認めてのことでしょう。

彼はそのまま青森にいたのでは先が知れていると、21才の時上京しますが、その時父は、「帝展で入選するまでは帰ってくるな」と厳命しました。彼

は上京しても美術学校に行く学歴も金もなかったもので、独学で内職をしながら油絵を帝展に出品し続けましたが、落選を続け、25才の時やっと油絵が帝展に入選したので、青森に帰郷し、既に亡くなっていた父母の墓前に報告すると同時に赤城チヤと結婚します。

彼は画家としては致命的ともいえるほど眼が悪く、左眼は殆ど見えないばかりでなく、右眼も極度の近視でした。そのお陰で徴兵は免れたものの、大きなハンディを背負っての画家人生となりました。それだけに彼は72才で亡くなるまで、酒や女にまつわる武勇伝もなく、ただ真一文字に芸の世界に没頭しました。

油絵が帝展入選する少し前から、志功は西洋の真似事である油絵の将来に失望を感じていて、民衆芸術としての東洋の木版画に自分の芸道を見出しつつありました。柳宗悦、河井寛次郎、浜田庄司らの民芸派のリーダー達が志功の民芸的な作風を高く評価してくれたことも後押しとなりました。志功が取組んだのは木版画の一種ですが、それは原画を忠実に再現する広重や歌麿等の浮世絵とは全く異なり、志功は原画はまず筆で描きますが、それは大体の構図を決めるためのラフなデザインで、木の板の表面に本人がいきなり大胆に彫り込んでいくところに特徴があります。

志功は途中から自分の版画に造語の「板画」という用語を使うようになり、その修行の道を「板画道」と称して、後進の指導に当たりました。それは自らを芸術家として祭り上げるのではなく、あくまでも庶民の中に身を置く職人と位置づけていた志功の生きざまの表れだと思います。私もコンサルタントという仕事を長年やってきて「調査道」と称して後輩の指導に当たると同時に自らを律してきた経験があり、棟方志功に親近感を持つようになりました。

皆さんも棟方志功の板画を見たことがおありと思いますが、殆どが仏画や裸婦で、小品から大作までさまざまです。彼の代表作の一つとされる「釈迦十大弟子」は昭和15年、37才の時の作品で、物資のない時代丁度6枚の板

が手元にあったので表裏を使って制作しようと10大弟子に釈迦の脇侍だった文殊、普賢の2人を加え六曲一双の作品に仕上げました。彼はその時仏教に関する予備知識はあまりなく、ただ心に込み上がってくるものを一心不乱に彫って出来上がってから気付いたのですが、不思議なことに数々の偶然が幸いしていました。まず12人のうち6人が右を、他の6人が左を向いていたこと、第2に衣の具合がヒダのあるものとないものが交互に並んでいたことです。そればかりでなく、後で12人を人名辞典で調べてみると、彫った顔立ちやたたずまいが恐ろしくなる程ピッタリだったそうです。

この作品は国画展で最高額の賞金を受け、続けてブラジル・サンパウロでの国際美術展とベニス・ビエンナーレで最優秀賞を受けました。

昭和20年、終戦直前に富山県福光町に家族で疎開し、その地に6年間居住し、制作に励み、48才で東京杉並区荻窪に移ります。それから肝臓癌で亡くなるまで精力的に制作し、世界各地で開かれる国際美術展の版画部門で最優秀賞を受賞すると同時にアメリカ、インドなどを歴訪し、講演をしたり個展を開いたりしました。67才の時には、文化勲章を受章、文化功労者に指定され、生きているうちに世に認められ、まさに日本のゴッホであることを証明しました。

棟方志功の名のついた美術館は、青森市、富山県福光町、鎌倉市の3ヶ所があり、私は棟方志功の他に3ヶ所も個人美術館を持っている作家を知りません。

ところで棟方志功の画の狙いを一言で言うならば、それはエロスではないかと思えます。うねった豊満な女体はいうまでもなく、仏画の中にも女性を連想するような仏像があります。実生活は実直そのものでしたが、心の奥深くに秘められた本能としてのエロスは、彼の場合見事に芸術として昇華された形で噴出したのでしょう。

19. 日本人で初めて自動車の殿堂入りをした 本田 宗一郎

「ホンダ」といえば、「トヨタ」、「ニッサン」に次いで日本で3位の生産台数を誇る自動車メーカーで、最近ではアシモ君という人型ロボット開発で有名ですが、本田宗一郎はその会社の創立者で初代社長です。私は、コンサルタント時代本田宗一郎自身が書いた「得てに帆あげて」、「俺の考え」などビジネス・マン向けの本を読んで生きる指針としてきました。後年デシジョン・システムという研修会社の教材開発を担当するようになり、その顧問をしておられた西田通弘氏（元本田技研工業の副社長）を通じて本田宗一郎の実像に触れる話を聞き凄い人がいたんだとつくづく思いました。

少年期

宗一郎は1906年に静岡県の光明村（現在の天竜市）に腕利きの鍛冶屋の一人息子として生まれました。父は農機具はもとより、鍋、釜、果ては入れ歯まで創意工夫して創ってしまう名人でした。宗一郎はそんな父の仕事をじっと好奇の眼で見つめていました。

また2キロ位離れた所に発動機を使う精米所があり、初めは祖父に連れて行ってもらい、小学校に行く頃には一人でよく遊びにいき、「なんで機械は動くの?」、「どうして煙が出るの?」など素朴な疑問を投げ掛けました。とにかく宗一郎は動くものが好きで、精米所はお気に入りの場所でした。

小学3年の時、一台の自動車（T型フォード）が村にやってきました。それまで動くものといえば荷馬車くらいのものでしたから、村の子供たちはその後を追いかけて回りました。宗一郎もその中にいましたが、彼はただ漫然と後をつけて走るだけでなく、エンジンの音を楽しみ、時に立ち止まって漏れた油の匂いを嗅いだり、指で触って感触を確かめたりしました。

また東海道線が敷かれると浜松駅に父に連れて行ってもらって、黒い煙を

吐きながらプラットフォームに入ってくる蒸気機関車にじっと見とれていました。

ある時陸軍の練兵場でアメリカ人のアート・スミスという飛行士が曲乗りをするということを知り、宗一郎は学校をさぼって25キロも離れた会場へ大人用の自転車に三角乗りでやっと辿り着いたのですが、父の財布から盗んできた小銭では入場料に足らず、途方に暮れていました。宗一郎は諦め切れずあたりを見回すと、一本の大きな松の木が目に入りました。あの木に登れば見える筈だと何とかよじ登り、複葉機の曲芸飛行をただで観ることに成功しました。

以上のような宗一郎の体験が後の彼の人生に大きな影響を与えることとなります。

アート商会のデッチ小僧時代

15才になった宗一郎は、働くことになり、東京の湯島にあるアート商会（飛行士のアート・スミスに憧れて名付けた）という自動車修理工場でデッチ小僧として住み込みで働くこととなります。しかし来る日も来る日も大好きな自動車には触らせてもらえず、主人の子供の子守ばかりで、家に帰りたと思っていた矢先、14万人もの死者、行方不明者を出した関東大震災が起こり、アート商会も被災して、15人いた工員の大半が辞めて兄弟子と宗一郎の2人だけになってしまいました。それで宗一郎もやっと修理を手伝わせてもらえるようになり、めきめき腕を上げていきました。交通網もずたずたに切断された東京で、移動できずに困っている被災者をサイドカー付のオートバイで目的地に送り届けるという社会奉仕活動も行いました。

18才の時、岩手県の盛岡から大型の消防車の修理の仕事が舞い込み、主人は宗一郎が一人前の修理工になったことを認め一人で出向かせました。出迎えた消防団長等は皆「こんな小僧で大丈夫かな？」と心配顔でしたが、

宗一郎は3日間で見事に修理を終えて宿に帰ってみると、階段下の粗末な部屋から床の間付の立派な部屋に変わっており、一本お酒もついてきれいな仲居さんがお酌までしてくれたのにはびっくりしました。

アート商会では、仕事とは別に、夜一人でレーシングカーを組み立てるのを楽しみにしていました。飛行機のエンジンの中古品を使って2人乗りの「アートダイムラー号」を作り、機関士（出走後はドライバーと機関士しか修理や整備に当たれない）として同乗し国内の地方レースに度々優勝しました。

独立へのスタート

アート商会の修業で自信をつけた宗一郎は、22才でアート商会の浜松支店を立ち上げ、仕事の早さと安全性で信用を得て、50人の工員を抱える青年実業家となります。27才の時には豊橋に二つ目の工場を作ります。

宗一郎は仕事熱心で、思いつくと夜も寝ないで考える一方、工員たちにも気に入らないと怒鳴り散らす激情的な経営者でした。一方で自分でモーターボートを作り、浜名湖で乗り回す遊び人でもありました。

宗一郎は28才の時、東京の月島で全日本自動車競走選手権大会が開かれ、アート商会の本店も出場することになり、宗一郎はまたも機関士として呼び出され、見事に優勝しました。宗一郎は今度は自分で作った車で出場したいと、多摩川スピードウェイで開かれた第二回大会に出場したのですが、故障車に追突してしまい、気がいたら病院のベッドの上でした。

宗一郎は車の修理に飽き足らず、東海精機という会社を新たに設立し、エンジンの部品の中で一番難しいピストン・リングの製造を始めました。そのためには自ら金属加工技術を習得する必要があると思い浜松高等工業専門学校で夜間部に入学し、昼間の仕事をこなしながら通学しました。東海精機は順調に発展していたのですが、戦争が激しくなり、宗一郎の関係する工場は全て軍需工場に廻され、新しい物を創ったり、研究する喜びは失われてし

まいます。

1945年、宗一郎38才の時第二次世界大戦は敗戦を迎え、東海精機を豊田自動車に売却して身軽になった宗一郎は、一年余りかけてこれからどう生きて良いのかじっくり考えました。結局はそれまでの路線を突っ走ることになるのですが、そのきっかけは小型エンジンを普通の自転車に取り付けたいいわゆる「バタバタ」と呼ばれる原付自転車で、浜松市を中心に実に良く売れました。その販売にはモンペ姿で乗り回す「さち夫人」も走る広告塔として大きな貢献をしました。

宗一郎は40才で自分の会社本田技研工業を立ち上げます。その真似をして全国に200社もの原付自転車（モーターバイク）のメーカーが乱立し、過当競争になって最後はホンダ、ヤマハ、スズキ等の数社が生き残ることになります。その厳しい淘汰の過程で宗一郎は自分には経営の能力が十分でない、それを補ってくれる相棒がどうしても必要だと思い知らされました。

宗一郎（42才）は知人の紹介で営業・経営の専門家藤沢武夫（38才）とお見合いします。二人はすぐに意気投合し、宗一郎は技術開発に専念し、それ以外のことは全て藤沢に一任することにします。能力も性格も異なる二人の二人三脚がここから始まります。

ピンチとマン島でのモーターバイクレース

戦後じきに朝鮮戦争が始まって、米軍からの注文で日本経済は活況を呈しました。消費者も原付自転車では満足せず本格的なモーターバイクを求めるようになってきました。それが宗一郎の技術者魂を刺激し、よりスピードが出て頑丈で格好も良いモーターバイクの開発に心血を注ぐようになり、開発グループへの叱咤^{しったげきれい}激励は一層激しくなって、昼夜を問わず開発は進められました。

当時箱根の急な峠を一気に登り切るモーターバイクは殆どなく、途中で過

熱したエンジンを冷やししながらやっと登っていたのですが、宗一郎はその同じ道を軽々と切り切る夢のようなバイクを探求していました。そして開発メンバーが疲れてぐったりした頃遂にそれが完成し、ドリーム号と名付けられました。ドリーム号は期待通り良く売れました。

しかし、ビジネスの世界では栄枯盛衰は世の習い、朝鮮戦争の特需ブームは去り、日本経済に不景気風が吹き荒れます。それまで順調だったホンダも大ピンチに陥ります。宗一郎と藤沢は社員に希望を与え続けることが何よりも重要と「イギリス・マン島TTレース（歴史あるモーターバイクのロードレース）への挑戦」を打ち上げました。

その手始めに招待されたブラジル・サンパウロレースに参加しましたが、見事な惨敗でした。それで宗一郎の闘志に火がつき、ヨーロッパ諸国を巡ってバイク業界を視察して回り、日本では買えない部品を有り金はたいて買い求めて帰国しました。そして社員にマン島レースでの優勝を宣言し、自分の退路を断^たって開発に専念しました。

しかし本当にそれが実現するまでには、宗一郎もまだまだ年月が掛かるだろうということは予測できましたので、当面の苦境を乗り切るヒット商品が必要でした。そして宗一郎と藤沢が目をつけたのが、力を持ち始めた女性層をターゲットとした新商品開発でした。女性層が求めているのは、可愛らしくて、安全で、音が静かで泥道でも泥をかぶらない比較的安いバイクでした。出来上がった商品は「スーパー・カブ」と名付けられ大ヒット商品になり、ホンダに大きな利益をもたらしました。

1961年、宗一郎54才の時、念願のマン島レースでホンダのバイクが上位を独占するという快挙を成し遂げました。マン島レース挑戦宣言から7年が経っていました。

そうなる^と将来を見通して大きなことをしたがるのが宗一郎の癖です。1962年に三重県の鈴鹿市に国際的規格にも適合する本格的な鈴鹿サーキット

トを建設しました。そして翌年にはそこで世界GPロードレース大会最終戦が行われました。

四輪車部門への進出と引退

本田は1963年からスポーツカーおよび軽トラックの分野で四輪車の市場に参入していきませんが、そちらの販売量は微々たるものの、四輪車のF1グランプリで優勝するなど技術には自信を持っていました。そんな折、アメリカでは排気ガスを厳しく規制するマスキー法が施行され、日本車にも適用されることになりました。宗一郎はそれをむしろチャンスと受け止めました。「GMもフォードもトヨタも今までは遥かかなたの存在だったが、クリーン・エアー・エンジンの開発では横一線のスタートに並ぶんだ。絶対に負けないぞ」と再び闘志をたぎらせて不眠不休の開発が始まりました。

宗一郎はこれまでの経験から低公害車の開発は空冷式エンジンでいくべきだと主張していましたが、若い技術者の多くは、空冷式では無理で水冷式でいくべきだと考えていましたが、社長である宗一郎に面と向かって言える人はいませんでした。副社長の藤沢は技術のことは良く分からないけれど、社長の怒声が鶴の一声となって論理的であるべき開発会議の方向を決めてしまうというのは「老害」の始まりであり、宗一郎に引退してもらう以外に本田の将来はないと考えるようになりました。藤沢が間に入って若い技術者たちによる水冷式エンジンでの低公害車の開発も並行して行われるようになります。そして遂に水冷式を採用した若者の開発チームの方が先にマスキー法の基準を満たすエンジンの開発に成功してしまいます。それは世界で一番早い成功でした。そしてそのエンジンを搭載したシビック、アコードなどの乗用車が大ヒットします。

藤沢は好機到来とばかり、創業25周年をもってまず自分が辞意を表明し、^{あん}暗に宗一郎の同調を促し見事に成功しました。退任後宗一郎は技術者本田

宗一郎を捨て、ホンダのシンボルに専念して一層輝きを増しました。宗一郎が引退した時（1973年）には海外の工場、販売店を含め従業員3万人を超える大企業になっていましたが、宗一郎は2年がかりで奥さんと一緒に従業員一人一人にお礼の握手をして回りました。1989年にはアメリカの「自動車の殿堂」入り（日本人として初めて）を果たし、1991年に84才の波乱に満ちた人生を閉じました。

本田宗一郎の基本的な考え方は、「他人のマネをしない」、「常識にとらわれない」、「時代に合ったモノサシで考える」、「常に未来を見つめている」といった言葉に集約されるでしょう。言葉にしてしまうと当たり前のことのようにですが、学歴と年功序列で2～3年社長の椅子に座ったような経営者にはなかなか実践できないでしょう。

宗一郎の経営者としての人生はまるで危険な綱渡りの連続で、藤沢という良きパートナーの協力がなかったら途中で挫折していたでしょう。二人はしばしば意見が食い違いぶつかったそうですが、ホンダを立派な会社にしたという共通の目標があったため決定的な衝突を避けられたのだと思います。

20. フランスの生んだ最大のシャンソン歌手 エディット・ピアフ

私がオーナーをしているアートサロンでは、これまで色々なジャンルのコンサートを開催してきましたが、その一つにシャンソンがあります。歌手は、ジローさん、森田日記さん、そして語りは柴山ゆきえさんという千葉周辺の方々が出演されましたが、その背景として大きな存在を占めていたのは常にエディット・ピアフ（1915年から1963年）でした。

「愛の賛歌」や「ばら色の人生」などでピアフは世界的に有名ですが、彼

女の生涯を紹介した映画を観てそのすさまじい短い（47才死亡）生きざまに驚愕し、これは是非皆様にも紹介したいと思いました。それで図書館で彼女の伝記を探すと、運良く死を間近にして、病床で自分の生涯を友人に口実筆記してもらった自伝「わが愛の賛歌」（中井多津夫訳、晶文社）が見つかったので、それに基づいて以下に紹介いたします。

訳者の中井氏によると、彼は越路吹雪がピアフ役をする劇団四季の「愛の賛歌—エディット・ピアフの生涯」の台本を担当していて、この自伝が彼女の生きざまの核心に迫る最も重要な資料となったということです。越路吹雪はその演技によって芸術祭賞を受けています。今年は美輪明宏が新国立劇場でピアフを演ずるそうです。

一夜にしてスターに

ピアフは1915年に生まれ、二流の軽業師の父に幼少時から連れられて場末の裏町を歌って歩いていました。母は彼女を残して家を出てしまっていたので、売春宿をしていた祖母の家で売春婦に囲まれて生活していました。祖母が元気が出るからとピアフに赤ワインを哺乳瓶で飲ませていたのが原因で、ピアフは7才まで両眼は殆ど失明し、その後奇跡的に回復したものの、後にアルコール中毒になる遠因となったのかも知れません。

彼女は18才の時ルイ・ルプレに見出され、一夜にして大成功を勝ち取りました。憐れみによって投げられた小銭を拾う生活から、多額の出演料を貰えるスターへと変身したのです。しかしその後の彼女の人生は、決して順風満帆とはいきませんでした。

ピアフを語るのに、最初に取り上げなければならないのは、彼女の多彩で華やかで苦難に満ちた男性遍歴でしょう。初恋の人プティ・ルイとは16才の時同棲し、娘マルセルが生まれますが、脳膜炎で早くに亡くなり、プティ・ルイとは2年程で別れてしまいます。彼女は短い生涯の間に、10本の指では

数えられない程の男性と恋人以上の関係になりました。彼女はフランス人としては小柄でさほど美人でもありませんでしたが、護ってあげたいという男性の本能をくすぐるところがあったのでしょう。

彼女は逞しくて、信頼できて、一生寄り掛かれる男を求めているので、自分の出世のための手段として男を選んでいただけではありません。ですから彼等の中には外人部隊の兵隊、水夫、炭鉱夫（彼には死の間際まで20年間も命を付け狙われた）、詩人、プロボクサーで世界チャンピオンのマルセル・セルダン、シャンソン歌手の卵イヴ・モンタン（彼はピアフの用心棒的役割を果たしてくれた）、作曲家のジャック・ピルスなどが含まれ、最後の恋人テオはシャンソン歌手志望の20才年下の若者で、義母はピアフより年下でした。

マスコミはピアフをふしだらで誰とでも寝る女と書き立てましたが、ピアフは気にもしませんでした。強烈な愛こそがピアフの人生そのものだったのでしょう。愛を歌うのが彼女の使命だとすれば、人々の胸をえぐるような彼女の歌は、まさにその男性遍歴がこやしとなっていたのでしょう。

彼女は恋愛とは嘘と欺瞞^{ぎまん}と喧嘩とビンタの応酬だと割り切った積もりでしたが、死ぬまで清い本物の愛を求め続けました。

麻薬・アルコール・浪費

次いでピアフの生涯を特徴付けるのが、モルヒネによる麻薬中毒です。そのきっかけとなったのは、自動車事故で腕と肋骨を折ったことでした。彼女はあまりの痛さに耐えられず、モルヒネを打ってもらったら、急に痛みがなくなり、不思議なほどに良い気持ちになりました。それが病みつきになり、退院後も誰彼かまわずモルヒネの入手を頼み、出演前に注射器を消毒もせずに衣服の上から自分で注射をする程までになってしまいました。

それが4年も続いたのですが、彼女を麻薬中毒から救ったのは、ピアフを2ヶ月で捨てた実の母親の夢を見たことでした。母も麻薬中毒でモルヒネの

量を間違えて死んだのでした。医者は麻薬中毒患者を救えたのは初めてだと言ってピアフに感謝しました。

麻薬中毒は脱しましたが、今度は簡単に手に入るアルコールに依存するようになってしまいました。アル中との戦いが人生において最も大変だったとピアフは言っています。ぐでんぐでんに酔って舞台上に立ち、何語か分からない歌詞で歌った時はすごいブーイングで、歌手生命もここまでと思うほどでした。それに加えて、彼女は手足の自由な動きを妨げる変形性リュウマチにも苦しんでいました。

彼女は自分を慕ってついてくるテオと正式の結婚をするためにも治さないと思い入院しました。しかし、アルコールが切れると、裸足で病院を抜け出し、近所の店でこっそりお酒を仕入れてくる有様に病院側もついに彼女をベッドに縛り付けてしまいました。私も仕事で東京都のアル中患者の厚生施設を訪問したことがありますので、立ち直るのが如何に大変かは想像がつきます。彼女も自分の死がそう遠くないことを自覚していたと思います。

ところで、これだけ出演依頼があり、レコードも売れているのだから、彼女は相当のお金を貯め込んでいるだろうとパリっ子たちは妬み半分に思っていたようですが、実際には普通の生活で数ヶ月しかもたない程度のお金しか残っていませんでした。それは彼女の並外れた^{ろうひへき}浪費癖と気前良さによってでした。

一例を挙げると、オートクチュールの店に行き、店員に「これは奥様にとでもお似合いです」と言われるとつい買ってしまい、店から出るともう気に入らずいつもの黒い服に戻ってしまうのです。また小さい頃貧しかったせいか、自分がサンタクロースになってみたいという願望が強く、自分に優しくしてくれた男性に車を買ってあげるといった始末です。

彼女はキャバレー経営者の殺人容疑で逮捕されるなど、まさに波乱に満ちた人生でした。どこかうら悲しいムードの漂うシャンソンの本当の味には、ピアフのような波瀾万丈な人生経験が不可欠なのかも知れません。

21. 人種隔離政策への抵抗を貫いた ネルソン・マンデラ

先日「マンデラ」（自由への長い道）という映画を家内と観て感動させられたので、ネルソン・マンデラの生涯をここに簡潔に紹介します。アフリカ最南端の国南アフリカのアパルトヘイト（人種隔離政策）については、30年位前英会話の副教材として「遠い夜明け」という映画（取材に訪れた白人の記者が主人公で、黒人と共に運動に参加する）を観た時、「何というひどい国だろう」とショックを受けて以来、私の念頭から消えていました。去年（2013年）マンデラが95才で亡くなったのを契機に何本かの映画が作成されましたが、私が観たのは、役者の演ずる伝記映画です。

アパルトヘイト反対の先頭に

マンデラは1918年にイギリスの植民地である南アフリカの一民族デンプ族の長の顧問をしている父の下に生まれ、マンデラも父の後を継げる身分だったので、黒人としては最高の大学まで行くことができました。しかし、学生の自治会運動に熱心になり過ぎ停学になってしまい、22才で単身ヨハネスブルグに出て来て、鉱山の警備員の仕事に就きます。そこで彼がみたものは、裕福で威張り散らす一握りの白人と、道路も電気も水道もない劣悪な環境の黒人居住区に押し込められた大多数の黒人という極端な差別社会でした。彼はまともに裁判も受けられず処刑されてしまう黒人を救うには弁護士になるのが一番の近道だと思い、大学時代の友人シスルの紹介で弁護士事務所の仕事を見つけ、働きながら通信教育で資格を取得します。同時にシスルのいとこと26才の時結婚し、長男をもうけます。しかしこの結婚生活は長続きしませんでした。マンデラがANC（African National Congress）に参加し、次第にその幹部に登り詰めて行くにつれ、家を留守にすることが多くなったからです。

ANCはインドのガンジーがそうだったように、白人の不当な支配に対し暴

力は使わず不服従という形で抵抗する団体でした。それでも警察はマンデラを度々逮捕したり、活動制限を課したので、マンデラは弁護士の仕事をしながら秘かにANCの活動を続けていきました。そして40才の時、ソーシャルワーカーをしていたウィニーと再婚します。彼女だったら自分と同じ理想を持っているので、うまくやれると思ったからです。ウィニーもANCの婦人部に入り、積極的に活動を始めます。

マンデラ42才の時、彼を含めて200人ほどが国家反逆罪で逮捕され、裁判にかけられましたが、その時マンデラは被告であると同時に200人の弁護をするという異例の働きをし、その裁判の様子が全世界に報道されて、注目を集めるという効果を生み出しました。その時の彼の発言は400ページにも及びますが、一言で言えば、「私たちは白人に反対しているのではありません。白人が黒人より優れているという白人優越主義に反対しているのです。」というものでした。結果として200人全員が無罪となりました。ただしANCは非合法的な団体とされ、政府は締め付けをますます強化してきました。

投獄と釈放後大統領に

あくまでも平和的に問題を解決したいと望んでいたマンデラも、度々武器を持たない黒人の集団行動に対する警察の発砲に、ANCとは別組織として黒人の軍隊を持つことを決意し、その資金集めに秘かに国外を回ります。そしてかなりの成果を挙げて帰国するのですが、それを密告する者がいて直ちに逮捕されてしまいます。マンデラは裁判で民主的な国家を作るために死を覚悟して全て自分がリーダーシップをとってやったものであるとし、罪を一身に背負いました。結果として彼は終身刑を受けることとなります。

マンデラの意思を継いでANCの幹部となった妻のウィニーも度々逮捕され、通算数年間の獄中生活を送り、次第に白人に対する憎しみを強めていきます。

マンデラは釈放される見込みがないにも拘らず、狭い場所で腕立て伏せや

腹筋運動等で身体を鍛え、入手できる限りの資料で勉強をし、外界の動きにアンテナを張っていました。そして囚人仲間を集めて教育し、待遇改善の運動の先頭に立っていました。一時はやむを得ず武力闘争も辞さない過激な思想に傾いたマンデラも、長い獄中生活の間に民主主義を実現するには暴力を否定する方法しかないという彼本来の温厚な考え方に戻っていきました。

しかし彼は全ての民族の平等という理想を実現するという信念には、一切の妥協を許しませんでした。南アフリカ政府は巧妙にアパルトヘイトを存続させる道筋を整えたうえで、マンデラに釈放の話を持ちかけますが、その都度断固として彼はその申し出を拒絶しました。そうこうしているうちに、国際世論が次第に南アフリカをボイコットし始めます。まず宗主国であるイギリスがイギリス連邦から南アフリカを排除し、アメリカ、フランスが中心となって南アフリカ製品の不買と一部商品の販売を制限しだし、オリンピック委員会等の国際競技団体も、南アフリカの参加を制限し始めます。1988年ロンドンでは、獄中のマンデラの70才の誕生日を祝う8万人近くが集まった野外大音楽会が催されました。

こうなると、これまでアパルトヘイトを強硬に進めてきたポタ大統領では、政権を維持することが困難となり、より常識的で温厚なデクラークが新たに大統領となりました。デクラーク大統領は再三マンデラとこれからの南アフリカのあり方について二人だけで相談し、基本線で合意に達したので、マンデラを無条件で釈放しました。マンデラが刑務所に入ってから実に27年、彼は71才になっていました。

そして1994年、全国民による初めての自由選挙が行われ、75才のマンデラが黒人初の大統領に選ばれました。5年間で政界を引退すると同時に、白人への憎しみから過激な路線をとり続ける2番目の妻ウィニーと離婚し、80才にして故モザンビーク大統領夫人と結婚します。彼は過酷な獄中生活にも拘わらず95年という長い生涯を立派に生き抜き、ノーベル平和賞をはじめ多

くの荣誉ある賞や、名誉博士の称号を授与されました。

私が今回の映画を観て特に感銘を受けたのは、あれだけ白人から迫害を受けながらも、最後にはそれらを全て許すことによって、より高い理想を実現したマンデラの宗教人にも似た寛容さと、国際世論を味方につけることの重要さでした。

22. 20世紀最大の肉体派女優 マリリン・モンロー

男性の多くがそうであるように、私も肉体派女優が好きです。イタリアのシルバーナ・マンガーノ、ソフィア・ローレン、フランスのブリジッド・ヴァルドー、ジーナ・ロロブリジータ、イギリスのエリザベス・テイラー、アメリカのマリリン・モンロー、キム・ノバックなどで、彼女たちの出演映画はかなり観ています。中でもマリリン・モンローの主演映画はテレビのリバイバルが主ですが、殆ど観ています。

先日テレビの歴史番組でマリリン・モンローを取り上げていたので、懐かしく思い、その生きざまを皆さんにご紹介することにしました。なんと映画俳優の中でマリリン・モンローが断トツに多く伝記が出版されているそうです。2位のチャップリンを遥かに^{しの}凌ぎ、36才という短すぎる人生からしてまさに驚異的な多さです。中には暗殺説を唱えるものなど、真偽に^{とな}疑いのある本も含まれていますが、ここではモンローと姉妹のように、またライバルとして、友人として多くの時間を過ごしてきた舞台女優であると同時に映画俳優でもあるスーザン・ストラスバーグの書いた500ページに及ぶモンローと著者本人の関わりを中心とした伝記をもとにまとめてみました。

アメリカの有名な現代アートの作家アンディ・ウォーホルがモンローの白黒

写真に単に口紅等を塗っただけの作品を大量生産し、それが飛ぶように売れたことから、アメリカでのモンローの人気のすさまじいものであることが分かります。

ジョー・ディマジオとの結婚と離婚

マリリン・モンローは1926年（私より9才年上）に父親の分からない私生児としてロスアンゼルスで生まれました。母方の祖父母は共に精神病院で亡くなり、母も神経症で子供を育てる力はなく、幼い頃から里親に預けられ、次々と里親を変えながらも里親に虐待される悲惨な少女時代を過ごしました。9才からは孤児院に引き取られ、僅か16才で中年男性と結婚しますが、さんもてあそん弄ばれたあげく2年で離婚してしまいます。

ハリウッドが近かったこともあり、自分の容姿にも自信があったのでピンナップ・ガールとして生計を立てていましたが、女優に憧れを持つようになります。しかしなかなか仕事を貰えず、21才の時「嵐の園」でやっと端役を貰い、27才の時、19本目にして初めて「ナイアガラ」で主役の座を勝ち得ます。そこでは大きく胸の開いた赤いドレスを着て腰を振って歩き、その歩き方が「モンロー・ウォーク」と呼ばれて、セクシー女優として一躍有名になりました。売れるとなれば商業主義に徹するハリウッドのことですから、立て続けにモンローに仕事を出すようになります。「紳士は金髪がお好き」、「百万長者と結婚する方法」などが連続ヒットし、ヤンkeesの現役を引退したばかりの強打者ジョー・ディマジオに気に入られ、28才のモンローは2度目の結婚をします。モンローは野球には全く興味はありませんでしたが、ヤンkeesでベーブ・ルース、ルー・ゲーリックの後を継ぐ強打者であり、センターの守備も盗塁も優れた万能選手で、背が高く、ルックスも良かったので、モンローは一目で恋に落ちてしまいました。

2人は新婚旅行で日本に来ましたが、ディマジオは日本の野球関係者との

会合に忙しく、モンローは1人帝国ホテルに淋しく取り残されたので、夫に相談せずに朝鮮戦争に派遣されてきた米兵の慰問に行ってしまいます。慰問自体は大成功だったのですが、夫の威厳を傷つけられたディマジオは面白い訳がありません。

帰国後に撮影した「7年目の浮気」で、地下鉄の通気口の上に股を広げたモンローのスカートがまくれてパンティ丸出しの有名なシーンを見たディマジオが、猥褻わいせつすぎるといって憤りいきどお、夫婦喧嘩が絶えなくなって、僅か9ヶ月で離婚に至ります。

モンローは大衆受けはしていましたが、ハリウッドでは「セクシーなブロンドの白痴美人」という評価で、一人前の女優とは認められてはいませんでした。そのせいもあってモンローと雇い主の20世紀フォックス社とはいさかいが絶えず、彼女は独立のプロダクションを作るために、会社を辞めてしまいます。女性が一人で大会社を相手に会社の方針について対等に渡り合っ
て辞めた例はハリウッド史上初めてのことでした。

アーサー・ミラーとの結婚と離婚

モンローは一人前の女優としての演技力を身に付けるために、ニューヨークのブロードウェイで「メソッド」という特殊な演技指導方法で多くの役者（マーロン・ブランド、ジェームス・ディーン、ジェニファー・ジョーンズ、ジェーン・フォンダ等）を輩出しているリー・ストラスバーグの教室に入門します。モンローは多くの門下生の中で唯一リーの家族の一員として迎えられ、特別指導を受けることとなります。それまで孤独な生涯を送ってきたモンローは、初めて家庭の味を満喫することになり、年下の妹としてスーザンを持つこととなります。当時スーザンはブロードウェイで「アンネの日記」のアンネ役で絶賛を博しており、自由奔放に振舞うモンローとは対象的にやや生真面な役者で、二人はお互いに刺激し合える良きライバルとなりました。

モンローは演技力を真剣に学び、リーの「アクターズ・クラブ」という門下生だけの閉ざされた劇場でしたが、シェクスピアの「ロメオとジュリエット」などで喝采^{かつさい}を受けるまでになりました。一方でまだ若い彼女の体は男性を求め続けており、スポーツ選手で失敗したこともあってインテリの脚本家アーサー・ミラーに恋をし、目出度く結婚にこぎつけます。しかし、モンローはアーサー・ミラーの日記を見て驚愕^{きょうがく}します。「モンローのような女と結婚したことを恥ずかしく思う」という意味のことが書かれていたのです。モンローの愛情は一気に冷めてしまいました。子供の欲しいモンローはミラーとの性生活は続けていました。

そんな折、20世紀フォックス社は「恋をしましょう」という映画で、フランスのシャンソン歌手イヴ・モンタンの相手役としてモンローを呼び戻します。モンローは、リーの妻ポーラを演技指導者としてハリウッドに乗り込みます。そしてたちまちイヴ・モンタンとの許されざる恋に陥ってしまいます。イヴ・モンタンも外見上は共演者以上の対応を示していたのですが、彼の妻シモーヌ・シニョレから直接モンローに電話で猛烈な抗議があり、このゴシップは終わりを迎えます。

この後、モンロー・プロダクション初の企画で「王子と踊り子」という映画を作ることになり、モンローは相手役としてイギリスの名優ローレンス・オリヴィエを指名し、交渉して何とか成立するのですが、気位の高いオリヴィエは監督まで自分でやると言い出し、撮影に入るとモンローを単なる一女優として扱い、一つのシーンを何回もやり直させました。モンローはすっかりノイローゼになってしまいました。

アメリカに戻ると、夫のアーサー・ミラーがモンローのために書いたという「荒馬と女」を映画化しようということになり、クラーク・ゲブル、モンゴメリー・クリフトという錚々^{そうそう}たる男優陣に魅力を感じてモンローも出演を承諾したのですが、中身はモンローの出番は殆ど酔っ払っているシーンで、ミラー

との生活で実際にあったことが基になっていました。ミラーは撮影中終始モンローに冷たい視線を送り続けていました。モンローはますます神経を病み、睡眠薬とお酒の飲みすぎで、撮影にはいつも遅刻し、関係者全員に大変な迷惑を掛けてやっと映画は出来上がったのですが、興行成績は不振でした。

このこととイヴ・モンタンとの関係が決定的な要因となって、アーサー・ミラーとも僅か2年で離婚してしまいます。ミラーと結婚している間に2回妊娠しますが、子宮外妊娠でモンローの母親になりたいという強い願望は実現しませんでした。セックス・シンボルであったモンローが実は子宮内膜症を病み、月経の度に耐え難い程の痛みを苦しんでいたというのは、何とも皮肉な話です。

モンローの自殺

モンローが父親のように慕っていたクラーク・ゲーブルは「荒馬と女」撮影の翌年心臓発作で急死してしまいますが、モンローは自分が撮影に遅刻したことが原因ではないかと自責の念にかられ、一層精神分裂がひどくなります。そしてついに精神病院に入院させられ、他の病人と同様拘束状態に置かれます。それを見かねて他の病院に移してくれたのは、ジョー・ディマジオでした。そして一時は退院するまでに回復し、再びニューヨークのリー家の世話になるようになります。

そんな時、ケネディ大統領から誕生パーティの招待状が届きます。モンローはそのパーティにスパンコールのついたシースルーのドレスを下着も付けずに着て出席し、何曲か歌いました。彼女が席に着こうとすると、弟のロバート・ケネディ他政府の高官が彼女と同じテーブルを囲もうと先を争ったといいますから、彼女の魅力はまだまだ男たちを惹きつけるものがあったのだと思います。

間もなくモンローは睡眠薬の多量摂取で死亡しますが、大統領や弟とのスキャンダルもあって陰謀説、他殺説などでマス・コミを賑やかせました。私

はスクリーンで大スターになったモンローがそのイメージを壊したくなくて自らの命を絶ったのだと思います。自殺はしなかったけれど人前から姿を消したグレタ・ガルボや原節子の気持ちと通ずるものがあるのではないのでしょうか。モンローは裸体を鏡に写し、うっとり見とれていることが良くあったようだし、映画でも全裸で泳いでスタッフを驚かせたりしましたので、「シャネル5番の香水を着て寝ていた」というのも嘘ではないでしょう。

23. 不朽の革命戦士 チェ・ゲバラ

これまで私は圧政、人種差別に対し、不服従、非暴力で戦ってきたガンジー、キング牧師、マンデラの3人を偉人として複数の書物で紹介してきましたが、ここで取り上げるゲバラはちょっと違います。彼は帝国主義に反対し、それを打倒するためには武力闘争しかない、自分の国籍を捨て、自分を必要とする国を求めてゲリラ戦を挑み、1967年に39才という若さでボリビアで銃殺されてしまいます。

私は若い頃ゲバラの死後間もなく出版された伝記を読み、潔くて格好の良い生きざまをした人生の先輩（7才年上）だと思いました。彼の死後50年近くにもなって最近テレビで彼を特集した番組を観て、あらためてゲバラへの関心が高まり、彼に関する資料を調べてみました。

キューバ革命の成就

彼は1928年にアルゼンチンに生まれ、幼児から喘息ぜんそくに悩まされ酸素吸入器を常にそばに置いていましたが、敢えてラグビーという激しいスポーツに熱中し、また友人と2人で2回にわたって中南米の発展途上国を巡る無謀な

バイクによる長期の旅行をしています。そこで彼は抑圧された先住民、農民、労働者の貧困、忍従、不平等をより間近で直接見ることとなります。一方頭脳を鍛えるためにチェスをよくやっていました。本の虫でもあってフロイト、ボードレー、シェークスピアなどに関心の幅も広げていきました。日記を生涯書き続ける記録魔でもありました。

彼は自分の病気を治すためというよりも、他人の病気を治すために医学の勉強を始めます。医師の資格を取り、後年医師のいない革命軍の中では、彼の医学知識は大いに役立ちました。

ゲバラは2回目の旅の時、コスタリカでバティスタ体制反対派のキューバ人亡命者たちと初めて会いキューバの政治状況について詳しく聞くことができました。そしてアメリカの大企業ユナイテッド・フルーツ社のキューバ砂糖きび農家に対するひどい搾取さくしゅを知り、この資本主義の化け物を一掃するため本物の革命家になろうと決意を固めます。

ゲバラは27才の時、7才年上のペルーの革命家イルダと結婚しますが、互いに尊敬の念を持ちながらも僅か3年間で離婚し、直ちにサンタクララの戦いで知り合ったキューバ人アレイダと再婚します。

ゲバラがフィデル・カストロ率いる革命軍に本格的に参加するのは、キューバ侵攻のために82人の同志と共に25人乗りの木造の古いヨット、グランマ号に乗り込んでからです。グランマ号は嵐のお陰でキューバ政府の偵察機に発見されず見知らぬマングローブの生える海岸に漂着し、道に迷い武器と荷物を頭上に差し上げながら何日も行軍しました。そしてやっと砂糖きび畑に辿り着いて休息をとっているところを農民から通報を受けたキューバ政府軍に発見され、猛攻撃を受けて24人を失い、残りも散り散りになってしまいました。その後やっと20人が集結でき、組織的に作戦を練り直すこととなります。

彼等のいる所はシエラ・マエストラ山中で、分散的に小さな集落が点々とある未開の地でした。農民たちは最初は革命軍を警戒していましたが、ゲバ

ラの医療支援のお陰ですっかり信用し、次第に革命軍に協力的になってきました。またゲバラは文字の読めない革命軍に、毎晩学習塾を開いて教育すると同時に、これからふくれ上がる革命軍のリーダーとしての自覚を植え付けました。

ゲバラは政府軍との最初の戦いで、援護射撃もなく一人で敵の弾薬庫に火を点けて回り、味方を大勝利に導くことができました。これによってゲバラは総司令官であるカストロの厚い信頼を得ることになります。ゲバラは革命の広報活動として機関紙「自由キューバ人」を立ち上げ、「反乱軍放送」というラジオ局を開局し、自ら執筆すると同時に放送原稿を作成しました。それによってキューバ全土でばらばらに繰り広げられていた労働者、農民、共産党員等による独裁者バティスタに対抗する運動グループを一つの統制のとれた運動にまとめ上げていきました。農民等が新たに義勇軍として参加しやすくする募集制度もつくりました。このようにしてゲバラがその知能と創造性を最大限に発揮したことが大きな貢献となって、グランマ号が漂着してから僅かに25ヶ月にして首都ハバナを含むキューバ全土を革命軍が制圧しました。ゲバラはごく自然な形でアルゼンチン人でありながら、フィデル・カストロに次ぐナンバー2の地位を確保していきます。

カストロとの離別と死

カストロを首相とする新政権が確立され、ゲバラはキューバ国籍を取得すると同時に革命で混乱している国内の治安維持を担当します。ある程度治安が良くなると、ゲバラは次にキューバの移動大使に任命され、新たな外交関係樹立と武器供与のために世界を駆け巡ります。その際日本にも立ち寄り、原爆を投下された広島を視察しています。キューバ同様国内資源に恵まれない日本の驚くべき経済発展に、キューバはもっと頭を使って創意工夫しなければと思いました。

ゲバラが30才になると農業改革局と中央銀行の総裁も兼務するようになり、2ヶ月で農地解放を終了し、大地主はいなくなりました。後にゲバラは工業相にもなり、国連での演説をする機会も持ちました。ゲバラは国連で「ソ連の社会主義は、キューバのような低開発国の社会主義とは異なる。ソ連の社会主義は一種のマヤカシであり、資本主義的搾取さくしゆを行っている欧米先進国と変わらない。」という趣旨の演説をしました。

このことがソ連に大きく依存し、ミサイルまでソ連から導入しようとしていたカストロとの路線上の対立を生むことになります。2人は2日間に渡って部屋に閉じ籠って意見を交わしましたが、妥協点を見出せず、6年間同志としてお互いに尊敬し合いながらも異なる道を進むことになります。

リーダーには組織の創生期向きのリーダーと安定期向きのリーダーとがありますが、ゲバラは素晴らしく頭が良く、マルチタレントで、その上頑固一徹で性急というまさに創生期向きのリーダーだったのだと思います。ゲバラはキューバの国籍を捨てまさに世界人（コスモポリタン）として、どこの国でも自分を必要としている国へ行っていた虐げられた人々のための理想的な社会を実現するために武力闘争をも辞さないという革命戦士の道を歩むことになります。

ゲバラは、まずアフリカのコンゴで1年間反乱軍の指揮を取りましたが、大きな成果を上げることはできず、再び南アメリカのボリビアに行き、ゲリラを組織して政府軍と戦いましたが、捕まって銃殺となり短い生涯を終えてしまいます。

彼の死後半世紀近くになりますが、彼は今なお語られ、映画化され、日記や伝記が出版され、ゲバラの記念館が造られ、若者用の彼の顔を刷り込んだTシャツが売られているということはどう理解したら良いのでしょうか。ゲバラの全盛時代はケネディ大統領の時代と重なりますが、ゲバラはアメリカから見れば、資本主義の資本力によるグローバルな自由競争に個人でも立ち向

かうドン・キホーテのような命知らずの恐ろしいテロリストということになるでしょう。

にも拘らずなおゲバラの信奉者が大勢いるのは、彼が信ずる理想社会に向けて即決実行する一途で純粋な生きざまに魅力を感じるからではないでしょうか。その理想社会がどういう社会であるべきかということは、資本主義も社会主義も大きな行き詰まりを見せている現在、世界中の知恵者が集まってじっくり考えなければならない一大テーマです。

24. 世界に誇りうる現代日本画家 平山 郁夫

平山郁夫の絵は多くの美術館に収蔵されているし、時には彼の作品展を開催する美術館もあるので、彼の作品を観たことのある方は多いと思います。私と家内は画廊オーナーという仕事柄、勉強も兼ねて趣味の旅行をする時には、つとめて美術館に立ち寄るようにしているので、断片的ではありますが何回か平山郁夫の絵には接してきました。

彼の作品をまとめて鑑賞したのは、彼の生地である瀬戸内海に浮かぶ生い口島ぐち（広島県尾道市瀬戸田町）にある平山郁夫美術館に寄った時です。本州の尾道と四国の今治を結ぶ「しまなみ海道」の途中にある小さな島が生口島で、平山美術館には彼の本画や水彩によるスケッチ、少年時代の絵などが飾られており、また大作制作の過程を垣間見ることもできます。私は自分とほぼ同時代（私より5才年上）を生きた日本画家に凄い人がいたものだと感服し、皆さんにその生きざまの概要をご紹介しようと、あらためて彼に関する数冊の本を読んでみました。すると平山郁夫は画家として私が思う理想的な人生を歩んだ人だということが分かり、ますます好きになりました。

東京美術学校卒業まで

平山郁夫は1930年に8人兄弟の3番目の次男として、島で350年も続く旧家に生まれました。父は早稲田大学を出て新聞社勤めを経て平山家に養子として入り、町会議員や地域の名誉職をしていましたが、人が良く他人のために財を投げ打ち、先祖の築いた財産を殆ど失ってしまいました。一方母は子育てには厳しく、郁夫が小学校に入ると毎日の予習・復習を義務付けることはもとより、自ら読み書きや算数の問題を出したり、絵日記を書かせたりしました。郁夫は絵を描くことに大変興味を持ち、家の裏山に登っては瀬戸内海の変わりゆく姿をじっと眺めて写生していました。

小学校を卒業すると、全寮制の広島市の中学校に入りますが、2年生の時肺門浸潤という病気になり、休学を余儀なくされます。戦況が悪化し中学生にまで学徒動員令が下ると、自分だけ休んでいるのは申し訳ないと、無理を押し自ら希望して広島しゅうの陸軍兵器補給廠しょうに働きに行きました。3年生の夏（1945年）8月6日、外にいた郁夫は米軍のB-29から、黒い物体が3つの落下傘に吊るされて落ちてくるのを見たので、仲間に知らせようと兵器の貯蔵庫せんこうに入りました。そのとたん、原爆の閃光と耳をつんざくような轟きに驚いて外を見ると、近くに黒いキノコ型の雲が上がっているのが見えました。それは本来なら郁夫がその日に作業に行く方向でした。

幸い郁夫は直接の被爆まぬがは免れたものの、その後長い間白血球の減少という原爆の後遺症に悩まされることとなります。そして後になって考えると、この経験が彼の画業を方向付けることとなります。

戦後彼は中学校を転校し、母方の大伯父の清水南山宅に一時寄宿します。南山は東京美術学校（東京藝術大学の前身）で彫金科の教授を長く務めた人ですが、最初は絵画を志すものの菱田春草等の才能を目の当たりにし、彫金に転向した人で、郁夫の絵の才能を認め、絵を描くことは好きだけれど

画家になる気まではなかった少年に、南山は自らの夢を託すように東京美術学校受験を勧めました。

郁夫は中学校を卒業し、落ちてもともとと東京美術学校を受験すると1回で合格してしまいました。16才というのは勿論同期生の中では最年少でした。郁夫は日本画を描く勉強は全くしてなかったのも、同期生たちとの技術の差に圧倒され、真剣に退学まで考えたのですが、教授に説得されて思い止まりました。郁夫は真面目に日本画を勉強し、5年で美術学校を卒業した後も学校に残り副手（助手の下）として前田青邨教授の手伝いをしながら勉強を続けていました。その当時は瀬戸内海の風景や島に生きる人々の日常を描き、25才で院展の院友に推挙される等画家としての一応の評価は受けていたのですが、郁夫の心は「もっと自分自身が救われるような、また不安感の消えるような画題を探さなければ」と悩んでいました。

美智子との結婚

そんな時、前田青邨の仲人で、同期生で首席で卒業した松山美知子と結婚します。彼女の父は国会議員で敬虔なクリスチャンでもあって、当時としては珍しく娘の教育については娘の自主性にまかせていました。彼女は女子美術学校を卒業してから東京美術学校に入ったので、郁夫より5才年上で画業も郁夫より数段上でしたが、青邨の「一家に二人の画家がいるとうまくいかない」というアドバイスに美知子は潔く従い、自ら絵筆を折り郁夫のサポート役に徹することになります。貧しい新婚時代は美術講師として家計を支え、取材旅行ではスケッチにいそしむ夫の傍らで鉛筆を削り、写真を撮り、メモを取っては詳細な記録を作成しました。その後の郁夫の大活躍は、妻のこの献身的な支えがあったればこそと思います。

広島での被爆以降、郁夫にはその後遺症や死への恐怖が付きまどっていましたが、28才になって白血球の急激な減少という明らかに原爆症と見られ

る症状が出て、病に臥せ、創作活動もままならなくなってしまいます。既に長男、長女が生まれており、一家の大黒柱であるべき自分が明日をも知れぬ身、郁夫は体力的にも、精神的にもいよいよ追い込まれていきます。

そんな時、郁夫には学生達を引き連れて八甲田山にスケッチ旅行に行く日程が迫っていました。山道を何キロも歩き続ける強行軍は病身の郁夫にはいかにも無謀でしたが、開き直った郁夫は、周囲が止めるのも聞かず参加しました。めまいや吐き気に苦しみながらも、新緑の山々は郁夫に不思議な活力を与え、新たな創作意欲を沸かせました。このようにして生まれたのが彼の最初の傑作「仏教伝来」という絵です。

彼は画家生命をかけてこの絵を院展に出品しました。残念ながら入賞を逃がしたものの、美術評論家の河北倫明の目に留まり、新聞で取り上げられ、その数行の批評が郁夫に自身と勇気を与え、「画家としての本当のスタート」を切ることになりました。「仏教伝来」の中心に描かれているのは馬に乗った玄奘三蔵です。私がこの絵を始めて目にしたのは20年位前で、東京都庭園美術館でしたが、その時は平山郁夫の生涯におけるこの絵の位置づけを知らなかったので「素晴らしい絵だな」位で終わってしまいました。

シルクロードの作家

郁夫はその後玄奘三蔵が辿った道のりを自らの足で辿ることにします。玄奘三蔵は中国の古い小説「西遊記」のモデルとなった人で、昔日本のテレビドラマで夏目雅子が演じ堺正章が孫悟空を演じ好評でした。郁夫が思い立った頃は毛沢東による文化大革命の最中で入国が許されなかったもので、中国領内は後回しにしオリエント一帯を西から東へと歩くことにしました。アフガニスタンから中央アジア天山山脈周辺のタシケント、サマルカンド、ガンダーラと取材しているうちに、郁夫は仏教伝来だけでなく、より広く東西文化の交流に大きな役割を果たしたシルクロードに興味を持つようになります。

45才の時やっと中国国内の取材が可能となり、チベット、ウイグル自治区、^{とんこう ろうらん}敦煌、楼蘭、ヒマラヤ等を巡っています。灼熱の砂漠、酷寒の山地、危険な紛争地帯を取材して回ることは健康人でも厳しいのに、郁夫がそれを耐えてやり抜いたのは、明確な使命感を持ち続けることができたからだと思います。その大きな要因となったのは高田好胤^{こういん}が管主をしていた奈良薬師寺が寺院内に玄奘三蔵院を建立することになり、その内部に玄奘の遺徳を伝える壁画の制作を郁夫に依頼したことでした。全長49メートルにも及ぶ壁画が完成したのは郁夫が70才の時ですが、これは彼の画業の集大成とって良いでしょう。

平山郁夫にはもう一つの顔があります。それは彼の「文化赤十字構想」といわれるもので、戦争で破壊されたり、自然崩壊していく人類の貴重な文化財の保護・保存を国や宗教・イデオロギーなどを超えてしていこうとするもので、絵が高価で売れるようになって入ったお金をそのために何億円も惜し気もなく寄付しました。^{とんこうぼっこうくつ}敦煌莫高窟、アンコールワットの保存事業は今も引継がれています。

その他東京藝術大学における40年にわたる教育者としての活動、2度にわたる学長としてのマネジメント活動など、芸術・文化面での平山郁夫の果たした役割には計り知れないものがあります。国は彼が68才の時文化勲章を授与しました。

彼は2009年に^{のうこうそく}脳梗塞のために79才で死ぬまで院展に出品し続け、残したスケッチブックは約6百冊、下図類は数千枚に及ぶといえます。芸術に^{しんし}真摯に向き合い、妻という良き伴走者に支えられ、一時たりとも無駄にするまいと^{まいしん}邁進し続けた立派な人生だったといえるでしょう。

田中 義明

プロフィール

【略 歴】

- 1935年 千葉市に生まれる
- 1951年 千葉大学附属小・中学校を卒業
- 1954年 千葉県立第一高等学校を卒業
- 1958年 一橋大学商学部を卒業
- 1958年 日本精工(株)に入社
- 1959年 公認会計士元吉重成事務所に転職
- 1961年 (株)日本能率協会に転職
(企業に対するコンサルティング、国・自治体のプロジェクトの研究に從事)
- 1970年 (株)フォークアートサロンを設立(代表取締役)
(レストラン、パーティホール、カルチャースクールなど)
- 1975年 (株)水問題研究所を設立(代表取締役)
(建設省、国土庁、環境庁、東京都等からの委託にもとづき利水、治水、親水に関する
リサーチに從事)
- 1984年 (株)デシジョン・システム、P S マネジメントの開発顧問となり、思考
技術の開発、教材作成および研究指導にあたる
- 現 在 (株)フォークアートサロン代表取締役
(パーティホール、ギャラリー、貸し会議室など)



【著 書】

- 「新企業分析入門」(白桃書房)、「創造力革新の研究[共著]」(日本能率協会)、
「技術者教育の研究[共著]」(日本能率協会)、
「アート・ファンの時代」(近代文芸社)、
「ホワイトカラーのプロジェクト・マネジメント[共著]」(生産性出版)、
「尊敬する歴史上の人々[共著]」「続 尊敬する歴史上の人々」(自費出版)など

【資 格】

- ・ 公認会計士三次試験合格 ・ 不動産鑑定士二次試験合格

続・続 尊敬する歴史上の人々

それぞれの時代に生きた - 偉人たちの記録

2015年3月発行

〈著者〉

田中 義明



〈印刷・製本〉

ワタナベメディアプロダクツ株式会社
